



社会工学科 50周年記念誌

2019年3月

東京工業大学社会工学科
同窓会「社工会」

社会工学科 50周年記念誌



2019年3月

東京工業大学社会工学科
同窓会「社工会」

記念誌発行に当たって

社会工学50年を記録し、歩み続けるために

社工会会長 佐藤 年緒（1975卒、華山研）

最後の第50期学部生が卒業し、文字通り「社会工学」の看板が大学から消える。この「半世紀」の節目となる2019年3月に、学科草創期を含めた諸先生方、卒業生の皆さまとともに、感慨をもってこの日を迎えることになりました。

ちょうどこの春、平成最後の年（31年）から新元号へと移る変わり目です。高度成長の絶頂期にあった昭和42年からの「昭和」の約20年間も含めて、正確に数えると52年間、時代の変遷のなかで、東工大で社会工学の研究と教育が進められてきたわけです。

自然災害が多発し、原発事故からも収束していない今日。科学技術と社会とのより良き関係がますます求められている時代に、私たちが学んだ「社会工学」の考え方は、一体どこに消えてしまうのだろうか―。学科廃止に伴い、同窓会「社工会」も存続するかどうか、皆で決めようとしている際に、最初に思い起こしたのがこうした素朴な疑問でした。

卒業生の「社会工学」に対する考え方や理解の仕方は、一人ひとり異なるでしょう。種子がサヤから四方に飛び散るごとく、母校から勢いよく幅広い分野に飛び出していった先輩・後輩たち。しかし、50年を経た現在、さまざまな仕事や生活、経

大岡山にて



今年もキャンパスに桜の季節が訪れた（写真提供：齋藤潮教授）

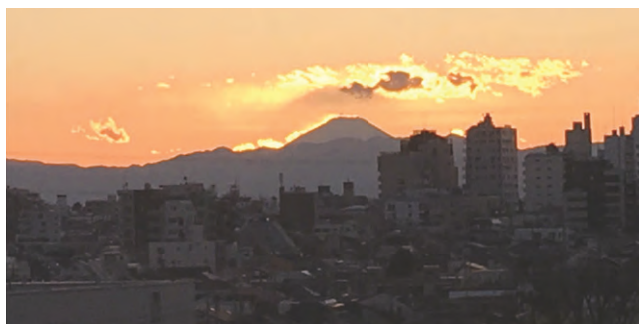
験を通して培われた「知」は味わいの深いものがあるでしょう。そのような知を共有できないだろうか、との願いが私たちにあります。

社会会の役員会や、企画・編集に協力いただいた委員を加えた拡大役員会で、この3年間議論を重ねた結果として、卒業生は「社工のDNA遺伝子を残す」「残り火の火は消さない」といった決意に似たキーワードが浮かび上がってきました。

一方、大学の社会工学科付属の図書館は閉鎖され、収蔵していた社会会資料も含め関係資料は廃棄されている。卒業論文・修士論文の類の記録など私たちの足跡も、記憶と共に消滅していこうとしている。その様相に「お前もかー」と愕然としていた矢先、一方でこうした学内の公文書の貴重さを重視し、保存に応援くださる東工大博物館資史料館の存在も知り、今回の記念誌編集でも協力をいただきました。

「記念」とは、辞書によると「後々の思い出に残しておくこと。また、そのものかたみ。」とあります。とはいえ、私たちの50周年記念は、偲ぶという思い出だけではなく、半世紀の研究・教育に携わってきた諸先生方への感謝と、そしてこれからの前に進む「ニュー社会工学への道」の出発点でありたいとの願いが込められています。掲載記事はメールで連絡の届く範囲で呼び掛け、1月末までの短期間に寄せられたものに限られ、すべての卒業生の声が反映できているわけではありません。それでも60人を超す方々の思いが伝わってきます。

3月9日の総会・記念のパーティに合わせて、この記念誌を発行し、平成に代わるこれからの時代を生きる卒業生とともに、新たな道筋を見出すために役立つことになれば幸いです。



夕暮れには遠くに富士や丹沢のシルエット（写真提供：在学研究生）



炎暑の夏、桜並木に広がる木陰



1996年以降の社会工学科の教育・研究拠点となった西9号棟

記念誌発行に当たって	社工会会長 佐藤 年緒	2
〔コラム〕 われわれが社会工学に残したもの		6
〈第1部〉 社工会・社会工学科の歩み		7
社会工学とともに歩み・・・	初 代会長 林 亜夫	8
50年間に及ぶ議論 ― 社工とは ―	第2 代会長 岡部 聡	10
社工会設立余話	第3 代会長 和泉 潤	11
私の番外人生 社工は東工大の「夢の島」だった	第4 代会長 角田 光男	12
社会人になってもつながりが強かった	第6 代会長 角方 正幸	14
名簿づくりの資金獲得、産業界の大先輩に直訴	第8 代会長 佐波 利昭	16
現実の問題に対処する「総合知」を求めて	第9 代会長 渡辺 孝	17
〔年表〕 社工会誌から読む「歩み」		18
社会工学科の50年	坂野 達郎	20
社工の恩師の言葉から	中井 検裕	22
異端からみた社会工学	齋藤 潮	24
社工50年によせて	大土井 涼二	26
いまこそ必要、社会工学と総合理工学	原科 幸彦	27
〈第2部〉 社工会はいま		29
2017年度 社工会ディスカッション「ニュー社会工学への道」		30
〔コラム〕 「お帰りなさい」。笑顔とVサインとともに		51
2018年度 ディスカッション「ニュー社会工学への道（続）」		52
社会工学科OB & OG懇話会…… 第1～5回の記録		72
社工会の現状を乗り越えるには	社工会役員会	74



緑ヶ丘に建てられた
社工棟（1971年、
蔵前工業会百年史
年表より）



社会工学を話し合う合宿。山田、林、原、矢野の各先生の姿も（1971年、八王子セミナーハウスにて）



製図室での社工棟の完成を祝ったパーティ

〈第3部〉 卒業生はいま	75
「50年に寄せて」 35人からの便り.....	76
鈴木光男先生から届いたお手紙.....	105
〔コラム〕 「昔といま」 を未来に伝えるもう一つの場.....	106
〈第4部〉 これから	107
見つけた「未来志向のキーワード」.....	108
資料館からのメッセージ..... 広瀬 茂久	110
第50期の学部卒業生に贈る言葉..... 社会工学学科長 樋口洋一郎	112
おわりに・謝辞..... 事務局 十代田朗、津々見崇	113
資料編	115
資料1 社会誌第1～7号で伝えてきた内容.....	116
資料2 社会工学科設立20周年記念誌.....	118
資料3 「専門家の倫理と学際」..... 原科 幸彦	119
資料4 「社会工学と学際教育」..... 中井 検裕	120
資料5 「専門教育の評価と期待」..... 高梨 竹雄	125
「計画の Spiritual Foundation」..... 宮城 健一	126
資料6 東京工業大学百年誌（通史）複数学部構想.....	127
東京工業大学百年誌（部局史）第2章第14節 社会工学科.....	127

〈注〉 執筆者や発言者の卒業年次は学部卒業の3月時点の年を西暦（省略する場合は下2桁）で表し、M（修士課程）、D（博士課程）を付記する表記とします。



緑ヶ丘の空き地を使って学生が開いた「社工・土木・建築3学科運動会」(1972・5)。中村英夫先生も一緒に汗を流した。



旧社工棟のいま。右は製図室。周辺に緑が広がる。(1990年卒業生提供)

われわれが社会工学に残したもの



青木陽二

(1971卒、M73、D76・鈴木忠義研)

社会工学2期生は、1971年の卒業に当たり、一つの記念行事を実施した。鈴木忠義先生の助言により、社会工学科棟の前にクスノキを植樹した。卒業生、在校生、教職員で金を出し、高さ3m程の木を植えた。それが現在、樹高約14m、幹回りは237cmになった。いずれ、社会工学科と共に無くなるのであろうが、周りの木々と一緒になって緑ヶ丘に森を造りつつある。我々が社会工学として残したものはこれだけかもしれない。

2期生の青木さんが寄せた上記の寄稿文と写真を見て、5期生の記念誌編集者の脳裏によみがえったのは、このクスノキが植樹された48年前の年の秋の日のことである。社工棟が完成し、いよいよバラバラだった研究室も一つの建物に集まった。その落成記念祝賀会の日。1階の製図室には紅白幕が張られ、教員や学生たちが乾杯し、スピーチや落語、ものまねなどの隠し芸を披露するなどして大いに喜び合った。窓からは明るい光が射しこんでいた。

その時に鈴木忠義先生がこのクスノキの植樹のことを学生の前で披露した。「この木は私たちより長く生きていきます」と。社会工学もこのクスノキのように、大きく、そして長く育っていくようにとの願いが込められていたように思う。その忠義先生は昨年（2018年）2月に旅立たれた。

この緑ヶ丘の社工棟もいまは別の学科が使用しているだけに、建物の中を覗いても、その製図室もなにかよそよそしい。ただ、この木だけは歴史を見守ってきたように思う。冬なのに葉

は落ちず。晴れた日にアングルを変えて見上げれば、なお成長し未来を照らしているようにも見える。社工会の打ち合わせのあった日（2017年1月21日）に編集者が写したこのクスノキの写真を、50周年記念誌の表紙に用いた。

（編集部）



〈第1部〉 社工会・ 社会工学科の歩み

- 歴代会長が語る
- 社会工学科の50年
- 現役・旧教官が語る

社会工学や同窓会「社工会」に対する考えは人によってさまざま。また年代によっても異なる。学生また卒業生としてこれまでの年月をどう生きていたか。社工会が誕生したときの舞台裏、運営に当たったの苦勞一。50年を経て歴代の社工会会長に心に残る日のことを振り返り、今後につながるメッセージを語ってもらった。

社工会の元事務局長であり、社会工学の研究や教育にも長く携わった坂野達郎教授には「社会工学科の50年」を解説していただいたほか、卒業後戻られた東工大で研究・教育に当たられている現役・旧在籍の先生方に「社会工学と私」を寄稿いただいた。

社会工学とともに歩み・・・

林 亜夫 (1970卒、72M・鈴木光男研)
初代会長

小生が大学に入学し2年次進級時、昭和42年に社会工学科が設立されたと記憶しています。当時多くの大学では学園紛争の嵐が吹き荒れ、キャンパスはゲバ棒と大学当局・教員と学生との団交（団体交渉）に席卷され、大学の本来的機能である研究と教育は瀕死の状態でした。我が東工大も多くの紛争大学と同様に、教職員をキャンパスから締め出し、キャンパスを封鎖し学園紛争に突っ込んでいきました。そして学生がゲバ棒で暴れるだけでなく、「核付バリケード封鎖」などと称され、大学自体が近隣住民に脅威を振りまく迷惑危険施設になっていました。

高校時代は電子工学分野の技術屋になりたいと思い大学に進学したのですが、紛争の中で技術者の社会的責任の議論などに触れ、このまま無自覚ではいけないと思うようになりました。恥ずかしながら純粹でまじめだったのですね。このような状況からちょうど設立された社会工学科に吸い込まれるように進学しました。

しかし進学後、製図からオペレーションズ・リサーチ、構造計算からゲーム論、社会心理学から政治学といった広範囲な技術、学問領域に取り囲まれ、戸惑いと混乱に陥りました。学生同士製図室に寄り合い、何をどうやって勉強するのか？ 将来



の自分の専門職業はどのようになるのか？ジェネラリストなのか？ 公務員かシンクタンク研究員に？ 等々一抹の不安のもと、議論を重ねていました。

卒業生の就職先は従来の東工大のそれらと大きく異なり、商社や政府系金融業、そして流通業といったサービス業に広がっていきました。学科のカリキュラム、教育目

的からして当然の成り行きで、また無理のない結果だと思っています。そして社会工学という教育体系もなくなるというより、残存する既存体系に組み込まれていったと考えています。

(筑波大学、放送大学、明海大学教授などを経て現在、日本土地家屋調査士会連合会理事)



東工大の大学紛争時の正門のバリケード（1969年2月、東京工業大学博物館資料館提供）。



1967年に誕生した社会工学科の第1期生は本館屋上で揃って記念撮影をした。林亜夫氏は前列向って右端（p. 9）。



50年間に及ぶ議論 ― 社工とは ―

岡部 聡 (1971卒・阿部研)

第2代会長

「社会工学とは問題解決学なのだよ。社会に蔓延しかねない問題をあらゆる手法を使って、解決に向け努力する使命を持っているんだ。」これは社会工学設立発起人の中心人物であった川喜田二郎教授が私に言った言葉である。1968年当時、大学紛争が激しくなる中で、“社会工学とは何か”という設立以来の命題が活発に議論されていた。

〈各専門領域を横断的にカバーして高度成長による社会の歪みを工学的観点から評価・調整して健全な発展に貢献する〉このような趣旨で川喜田教授をはじめとする発起人は『社会工学構想』を提起した。しかし、我々学生のみならず学内関係者の多くは建築、土木、数理統計、経済学などの既存の学問ジャンルからの発想から抜け出せず、議論が収束することはなかった。問題解決学というイメージはあっても方法論に繋がる具体的構想には結びつかなかった。

その後社工第1期生は卒業して社会人になっていったが、“社工とは何か”という熱い議論をした問題意識は皆の心の中にはくすぶり続けていたはずである。その問題意識を共有し続けたい気持ちからOB会としての社工会を創ろうという有志が集まり、林君を初代会長、私がお後を継ぐことになった。

私は在学中、川喜田教授の指導による野

外科学・問題解決実践の場『移動大学』の設立と、ヒマラヤ山村での貧困対応策としての水道と無動力ロープウェイの架設に取り組み、その記録と考察を卒論としてまとめた。工大の卒論としてはユニークすぎて如何なものかとの意見もあったが、私自身はこれぞ社会工学の実践事例と自負していた。海外援助の政府関係者からの強い推薦で冊子にしたところ、そこそこの評価をいただいた。

ヒマラヤでの援助活動により、1年留年してトヨタ自動車に就職。海外部門を担当し、2001年からは取締役として世界各国での問題に対峙してきた。それらは千差万別であり、対応策をマニュアル化などできるものではない。問題解決にあたり最も重要なことは、上から目線ではなく現場での個々の課題・ニーズをしっかりと把握することだ。体系化された方法論やアカデミズムを動員する前にまず、問題となる現場に身を置いて状況把握を十分にすることが不可欠だ。そのための有効な思想・手法が川喜田教授の提唱する野外科学であり、それこそが私なりの問題解決学としての社会工学の実践であった。問題の状況をしっかりと理解できればその対策、方法は自ずと見えてくるものだ。

そもそもこの世の社会構造には、行政府や大企業に代表される制度や規律が明快な管理・官僚社会と、小集団や地域コミュニ

ティのようなお互いの顔が見える創造的問題解決型社会がある。社会工学的課題に取り組むにあたり、目線をどちらにおいて対処するのかによりアプローチの仕方が大きく異なる。混沌の度合いがますます深まる



社会会設立余話

昨今、社会学=問題解決学という発想からすると後者の視点をベースとした姿勢が一層重要視されることになろう。(トヨタ自動車専務取締役、東海東京証券取締役副会長などを経て現在、川崎汽船社外取締役)

和泉 潤 (1971卒、73M・熊田研)
第3代会長

社会会の設立に関わった一人として当時のことを思い出すに、多くの関係者のご支援、ご協力があったことが目に浮かぶ。そのいくつかをあげると、まず鈴木忠義先生から卒業生に対して同窓会設立の話があり、設立準備にいろいろとご助言をいただいたことがある。これは、土木工学科の同窓会が動き始めた時期にあたり、それを参考に準備を進めていくことではなかったかと思われる。

続いて、この同窓会の名称について思い起こすに、卒業生や学科関係者から提案していただく公募の形をとり、土木工学科の「岳友」や建築学科の「冬夏会」など、学科名称とは異なる他同窓会の名称も多くある中で、あえて学科の略称を同窓会の名称とした。多数の案の中には、海野道郎さん提案の「斜交会」といったものもあり、このような略称やの類似名称が多くあったことから「社会会」に決定された。

さらに、同窓会誌を「社会会」の会員(正会員：卒業生、特別会員：新旧教員など)

の意見の公表、交流の場として年1回刊行することとし、会誌の表紙には、山岳写真家でもある山田圭一先生の写真(チョモランマなど)をご好意により使用させていただいたことがある。また、刊行の費用に充当するため、いろいろと議論はあったが、学科に関連する企業(卒業生の就職先)などの広告を掲載した。創刊号からしばらくは、この態勢で刊行していくことができた。なお、当初は紙ベースでの編集、刊行であったため、残念ながらデジタルデータはなく、さらには、アナログデータ(会誌)も、私個人のは散逸して手元にはなく、毎号寄贈してきた社会工学科図書室のものも残念ながら所在不明と聞いている。

そして、設立当初より、社会会の運営には費用的問題を抱えており、会員からの会費だけでは刊行できないので、会誌の発行については広告収入に頼ったことは前にも述べた。会費を集めることには、会員名簿の整備が必要であるが、それがなかなかできなかったことがあげられる。このことは、

現在の大学同窓会、蔵前工業会にも通じる話であるが、会の運営には会費の納入率を高めることが必要であり、そのため、長期的には魅力的な行事などを実施することが重要であるが、短期的な対応として議論があった終身会費もその一つとして実施された。導入にあたり、単式簿記では会計管理に限界があるため、複式簿記を入れて資金の流れを明示的にしたが、これには、会計担当であった平田道憲さんの大きなご尽力

があった。

これ以外にもいろいろな話があるが、これらはいくまでも筆者個人の体験と記憶に基づくものであり、上記の内容や名前をあげさせていただいた方々には、誤解があればご容赦いただければと思う。

(国際連合地域開発センター研究員、朝日大学教授、名古屋産業大学教授を歴任、現職は名古屋産業大学客員教授。)



私の番外人生 社工は東工大の「夢の島」だった

角田 光男 (1972卒、「社工番外生」)
第4代会長

東工大卒業から半世紀近くになる。振り返ってみると、私は今もって少し軌道から外れた「番外人生」を歩んでいるように思う。

東京・足立区の生まれ。中学は1期上に「ビートたけし」こと、北野武さんがいた。足立、荒川だけでなく上野や浅草、日本橋などを学区とする都立竹台高校を卒業し、1年の浪人生活を経て、1967年に東工大に入学した。ちょうど社会工学科が1期生を迎え入れ、「東工大に理工学と社会科学が融合した学際的な学科が誕生」と、新聞のニュースになるような注目を集めていた。

まだ、「類別入試制度」がスタートする前で、700人余りの1年生全員が、大学が最も力を入れていた「基礎物理実験」や「化学実験」に取り組んだ。データを取り、考

察しレポートを書いた。戦後の混乱期に生まれた「団塊世代」が、受験勉強から解放されて、あるものはクラブ活動に汗を流し、あるものは学生運動の旗を振った。日本列島が高度経済成長のひずみに、揺れ始めた時代だった。

2年に進級する際に、1年次の試験や実験レポートの総点数をもとにした「学課進級オリエンテーション」があった。物理の単位を落とし、大学側のお情けで2年次に「仮進級」させてはもらったものの、人気学科の「社会工学科の門」ははるかに高く、私にとって取り付くことのできない「夢の島」だった。

「金属、繊維、無機など材料系」や「応用化学系の一部学科」に定員の空きがあり、私は金属工学科に受け入れてもらった。2

年次が終わろうとしていた1969年の年明けに、大学紛争が起きた。校舎がバリケード封鎖され、長期間のストライキに入った。東大では改革を求める学生たちが、安田講堂を占拠し、機動隊が導入された。全学部で入試が中止になった。

私はその時に、積極的に学生運動には参加しなかったが、「社会はこれでいいのか」ということは考えた。「東京の下町に生まれ、地下水のくみ上げが原因で地盤が沈下し“夕立30分、浸水30cm”という毎年のように大水に苦闘する自分たちの街を、変えなければいけない」。短絡的ではあったが、もっと実社会とかかわりの持てる勉強をしようと決意した。

「仮進級」で拾ってもらった金属工学科の学科主任、中村正久先生の研究室に別れのあいさつをしようと、出掛けたときのことは、いまでも覚えている。

「学科を離れて無所属で、自分の将来に向かって勉強しようと思います。大学の卒業証書は要りません」と、先生に切り出した。沈黙が続いた。

「でもねえ、僕も君と同じ年くらいの息子を持つ人の親だけど、せっかく東工大に入ってさ、無所属で先生との縁を切っちゃうなんて、君のお父さんがっかりするぜ。大学でどんなことを勉強してもいいから、学科の籍だけは抜かないで、学期末に顔だけでも見せてくれよ」。

東武電車の土手下にある4軒長屋の自宅の作業場で、天職のように「クレヨンづくり」の仕事に励む、おやじの顔が浮かんだ。勢い勇んで教授の部屋に駆け込んだが、学生時代にやっていた合気道の達人に「関節外し」の技をかけられたような気持になっ

た。大学紛争の後遺症で、先生と学生の間には、これまでにはない緊張感があっただけに、中村先生も真剣だったのだろう。

その後、社会工学科の科目を中心に「自主カリキュラム」を組み、教務部長に提出した。お世話になる社会工学科の学科主任だった、日本でのゲームの理論のパイオニアである、鈴木光男先生にもあいさつに行った。温顔の鈴木先生は「光男君、僕と同じ名前ですね。大いにやりなさい。自分の道を切り開きなさい」と、励ましてくれた。

大学紛争に終止符が打たれた1969年の後期から「社工番外生」になった。だから私は正規組とは違って、裏門から入って学科の授業を受け、5年をかけて1972年に大学を出た。卒業研究は、後に母校の東大に戻り、退職後、武蔵工大に移り、改名後の東京都市大学の初代総長になった中村英夫先生の「地域計画の研究室」で指導を受けた。いまもってご縁が続いている。

卒業後、共同通信社で事件事故を主に取材する、社会部記者を軸に歩いてきた。60歳で定年退社し、フリーランスになった。いまは都市大で「非常勤講師」と「広報ディレクター」を務める。70歳を過ぎた番外生は、IDとパソコンのパスワードと、机ひとつをもらい、キャンパスを歩いている。わたしの「番外人生」の土台をつくってくれた社会工学科。「夢の島」が消えることは寂しいが、「どこにいたって自分流に生きていくのが番外生の作法」と、私は思っている。

(共同通信記者、TOKYOMXテレビコメンテーターを経て東京都市大学勤務)



社会人になってもつながりが強かった

角方 正幸（1972卒、原研）

第6代会長

社会工学科第3期生として1972年に大学を卒業し約半世紀が過ぎた。当時は大学紛争が全国の大学に広がり、入学後1年の冬から2年生の夏まで正門がロックアウト状態であった。そして、このロックアウトの中で永井道雄先生が特別に開講した「大学改革」という集中講義を聴き、私は建築学科から社会工学科志望へと希望する学科を変更した。結果的に、この時の学科変更で、その後の職業選択や人生が変わったと言っても過言ではない。

あの時「大学改革」という講義に出会ったのが社会工学との出会いでもある。当時の社会工学科では、永井道雄、川喜田二郎、林雄二郎等々人文系の著名人が名を連ねていた。そのような経緯から、研究室の希望は自然と社会学（教育）の原芳男研究室となり、運よく助手、先輩、同僚に恵まれ楽しく充実した学生生活を過ごすことが出来た。

そのため、卒業後もそのまま研究生として居候し、翌年三井情報開発(株)に入社した。ここで11年間働くことになったのだが、私が職業人として成長したのはこの会社で4人の社工1期生のもとで働いたお蔭だと思う。1期生4人が集中した会社は珍しいと思う。4人は入社時期がそれぞれ異なるものの、同一の総研（シンクタンク部門）で働いていた。私は先輩4人とそれぞれ別々のプロジェクトで働くという貴重な経験を

持った。その4人が個性豊かでまったく異なるマネジメントスタイルであったため、多様なリーダーシップと仕事の進め方など多くの経験を短期間ですることが出来た。大学在学中だけでなく、社会人になってからも社工との繋がりが強かったと言える。

その後縁あって社工会の会長を数年勤めたが、当時は予算がない中で「社工会名簿」の更新と出版をどうするかについていつも頭を悩ませていた。（今なら、FBやTWなどのSNSで簡単に対応できたものを…）

昔のメールを見直したところ、懐かしい社工会MLを見つけました。20年前の社工OB会の活動の一端としてご紹介しておきます。

（三井情報、リクルートリサーチ取締役を経て、現在、(株)大学改革 代表取締役、リアセックキャリア総合研究所 所長）



角方会長の時期に発行された「社工会」名簿

「二水会」とメーリングリストで活動 20年前のOB会

社工会 ML 2000.8.28 [shakoukai.138]

2水会のご案内とテーマ募集

まだまだ残暑が厳しい日々が続いていますが、皆様お元気ですか？今回、私から2水会の案内と皆さんの参加とテーマ募集を提案いたします。

2水会は社工1期生のサロンと思われているフシもあるようですが決してそのようなことはありません。社工卒業生を中心に情報交換、異業種交流、世代間交流等を通じての勉強会&呑み会&同窓会です。(この会の世話役は1期生の三宅さん、内田さんで、会場はじめ大変お世話になっております。感謝・感謝・・・)

私を感じるに、近頃この会も停滞気味です。一つにはメンバーが固定化されてきているためです。(今まで積極的に広報もしていません)是非、まだ一度も参加されていない社工卒業生の方々、とくに若手のひと、参加してみませんか？日常の職場とは違った話題や意見、情報が得られますよ。

このような「社工会ML」が多くの人に活用されるようになれば2水会をMLのオフ会と位置付けることもできます。ネットの利点を活かし、バーチャル同窓会をネットで、そして月1のオフ会を2水会で。そこで、9月の2水会のご案内とテーマの募集をいたします。

〔2水会の話内容 (1998年～2000年)〕

1998 3月	アメリカビジネス事情・ランドアート	高原(株)・高原社長
5月	長野オリンピック給食サービスあれこれ	エームサービス(株)藪下常務
6月	国際観光政策の動き	運輸省観光局・本保課長
7月	ゼロエミッションについて	国立環境研究所・森田教授
9月	最近の都市開発動向と民都の役割	(財)民間都市開発推進機構・今泉部長
10月	最近の政治動向について	毎日新聞政治部・和賀井主幹
11月	中心市街地再生への取り組み	地域振興整備公団・真野室長
1999 2月	政策評価・公共事業評価・行政評価	東京工業大学・肥田野教授
7月	I S O資格を取ってその後	日本工営(株)・高橋部長
9月	幕末・維新の庶民の楽しみ～江戸のガーデニング	(株)森林都市研究室・青木室長
10月	ネットワークというメディアへの期待	(有)プラネット・越野圭子代表
11月	メーリングリストの効用	東京工業大学・肥田野教授
2000 2月	中央省庁等の改革について	大蔵省・田中氏
3月	最近の大手銀行合併問題について	(株)日本アーンスト&ヤング・森田氏
7月	民主党は本当に勝ったのか	(財)日本リサーチ総合研究所・宮城部長



名簿づくりの資金獲得、 産業界の大先輩に直訴

佐波 利昭 (1978卒、鈴木忠義研)
第8代会長

学科廃止に伴い記念誌を発行するという
ことで、若輩ではありますが当時の思い出
を含め寄稿させていただきます。

学生時代は不出来な学生だったこともあり、卒業して(大阪勤務)まもなく蔵前工業会・大阪支部の会に誘われたことで「社会人として大学に恩返ししよう」と思ったことが同窓会活動のきっかけでした。当時大阪支部には「燕友会」という若手会があったことも気負いなく活動できた背景にありました。その後東京に転勤した際、もう亡くなられましたが大阪支部の畑四郎支部長(当時、大阪府立大学長)から「蔵前工業会本部で動け」と命令(?)されたこともありがたいきっかけです。まだ三十代前半でしたが、すぐに編集委員になり同窓会誌(現在の「蔵前ジャーナル」)に携わったことで、社工会の会長にと推薦されたのかと思います。

当時、社工1期生を中心に「二水会」という交流がありました。第二水曜日に麴町のM社の会議室に仕事が終わった19時頃から集まり、一人講師役が話をし意見交換。金融・商社・流通・建設不動産・設計・コンサルなど毎回10~20人が集まり、同窓会としての絆を深めたものです。また学生さんとも年に2~3回、当時の中井検裕先生や坂野達郎先生が場を作って下さり、社会人との交流も行っていました。

まだPCやメール環境もなく同窓会活動の大きなテーマの一つが卒業生の名簿づく

りだったこと(今でもですが)、しかも冊子にして郵送しないと同窓会として継続できないので印刷郵送など資金が必要なことが悩みでした。

私自身それほど社工会に貢献できたかどうかわかりませんが、最初に任命されたときに、「そうだ、資金が要る」と短絡的に考え(笑)、編集委員でお世話になっていたT社のTY会長を急きょ訪問、お話ししたところその場で潤沢なご寄付をいただいたこととても印象に残っております。TY氏は電気化学科卒業ですので社工とは無関係、ですが同窓生としての交流に必要ならとその場で秘書に通帳を渡して「おろして来い」と。このような先輩にならなきゃと当時思ったものです。

今は学生時代にタッチした横浜の港北ニュータウンにたまたま縁あって住んでいますが、勉強しなかった学生時代のお返しとばかりボランティア活動三昧。これもTY氏や二水会、社工会で教えていただいたことが身に染みているんだなと感じています。

社工という名称がなくなっても、社工会のつながりがこれからも続いていくこと、皆さんと同じ思いで伝え活動していければと思っております。同窓生の益々のご活躍をお祈り申し上げ、筆をおきます。

(伊藤忠ファッションシステム(株)、現在衆議院議員鈴木馨祐事務所政策担当秘書)



現実の問題に対処する「総合知」を求めて

渡辺 孝 (1970卒、72M・阿部研)
第9代会長

私は1972年、日本開発銀行（現日本政策投資銀行）に就職し、公害問題から米国で勃興し始めたバイオテクノロジーに対する日本の医学界の問題、等々いろいろな課題に向き合おうとしてきました。それを可能にしてくれたのが、社会工学での20歳前後に学んだ様々な講義と演習だったと思っています。それぞれどこまで理解できたかは疑問ですが、幅広い関心を涵養してくれたと思っています。

銀行勤務の後半、日本の現状に大きな問題が横たわっていることを感じました。1995年前後、銀行の情報基盤をパソコンネットワークシステムに転換する仕事において、もう追いつくことのできない技術格差をシリコンバレーの隆盛の中で感じました。また、バイオテクノロジー分野における米国での大学発ベンチャーの大活躍を忌々しく思いました。

当時、いまでも同様のことを言っている人もいますが、「それは技術水準は高いがビジネスにする人材が欠けているからだ」という意見が多くありました。私もそれを真に受けて、大学発ベンチャーをサポートするベンチャーキャピタル組成の制度を作りました。自らも銀行を辞めて東工大のTLO（技術移転組織）に入り、ベンチャー設立をサポートしました。その中で体験したのは、「安普請の経済社会基盤」という感覚です。特に、日本の大学の組織設計に根本的問題を抱えていて、世界のイノベー

ションをリードする研究成果は出難いという結論でした。私自身の実力不足で、その証明をする学術的研究は出来ませんでした。今の大学制度の延長には期待が持てないと思っています。

そんなことを思っているときに、社会工学科の廃止が決まりました。政府が大学を評価する制度を作り、大学横断的に客観的な評価基準を考えた時、国際的有効ジャーナルに論文を書いた、国際的引用回数が多い論文を書いた研究者が何人いるかという数値が独り歩きします。個々の大学の個性は失われます。

学術研究と現実の問題解決を両輪にして組織運営するのが大学ではないかと思っています。まさに社会工学が目指す社会問題を正面から取り組む社会起業家（Social Entrepreneurship）に関しての取り組みも、米国では優れた学術研究を生み出す大学の組織内部に活動拠点があります。スタンフォード大学のMBAの中に「Center for Social Innovation」、MITの中には「Global MIT (<http://global.mit.edu/serving-world>)」などがあります。

社会工学科廃止そのものが、日本の高等教育の問題を浮き彫りにしていると思いますが、同窓の我々としては、社会工学で培った現実への総合知を求めて活動していくことが、社会的貢献であると思います。

（日本開発銀行、芝浦工大、東工大教授を歴任）

〔年表〕 社会会誌から読む「歩み」

社会工学科の50年の歴史、それに学科創設から10年後に発足した「社会会」の歩みを、機関誌「社会会誌」や社会会のニューズレターなどからたどってみよう。大学の環境変化や世の動きとともに年表にまとめてみた。

〈社会会の歩み〉

1970 年代	77・6	「社会会」設立総会、社会工学科10周年記念式典 林亜夫会長（～81・5まで）
	78・5	社会会誌1. 発行 （「創刊に当たって」林亜夫、「10年を顧みて」石原舜介、卒業生の進路など）
	79・3	社会会誌2. 発行 特集「東工大教育の流れと社会工学の設立」 大山義年、中村良夫講演録、など）
1980 年代	80・7	社会会誌3. 発行（特集「卒業生の就職状況」など）
	81・5	岡部聡会長（～84・5）
	81・9	社会会誌4. 発行（特集「卒業生の意識調査」、海外シリーズ、会員投稿など）
	83・3	社会会誌5. 発行（会員4氏の投稿と研究室だよりなど）
	84・3	社会会誌6. 発行（川喜田二郎、永井道雄の2氏の特別講演を収録）
	84・5	和泉潤会長（～86・5）
	86・1	社会会誌7. 発行（特集「私の転機」、研究室紹介など）
	86・5	角田光男会長（～91・5）、肥田野登事務局長
87・3	社会工学科設立20周年パーティ開催、社会工学科設立20周年記念誌を発行	
1990 年代	91・5	石井望会長（～93・4）
	93・3	「社会会ニューズレター」発行（OB教官の近況、卒業・修了生の論文題目）
	93・5	角方正幸会長（～95・4）、阪本一郎事務局長、樋口洋一郎事務局長
	93・11	『93年「社会会」名簿』発行 付録「ニューズレター特別編集号」（総会報告、支部だより、教官紹介など） 会費口座振込制度導入
	95・3	『94年「社会会」名簿』発行
	95・4	飯田保憲会長（～96・12）、樋口洋一郎事務局長、 ニューズレター発行（会財政の健全化とOB/OGと学生、教官との交流機会増大の呼び掛け）
	96・11	『「社会会」名簿1996』を発行
	96・12	ニューズレター No.96-2発行（ホームページ開設、FAX番号、メーリングリストのアドレスの登録呼び掛け、 社会工学ガイドブック「社会工学1996」の紹介）
	96・12	佐波利昭会長（～2012・5） 二水会などとの交流、資金づくりに奔走
	2000 年代	03・7
12・5		暫定総会開催（鈴木忠義先生講演） 渡辺孝会長（～16・5）、坂野達郎事務局長、白川慧一事務局員 各期の世話人・連絡役への呼び掛けと総会復活、就職セミナー、入式式での呼び掛け
13・5		総会（鈴木光男先生講演）
14・5		総会（岡部聡氏講演）
16・2		学科廃止に伴い、会存続の意見を聞く集い、会員の名簿収集の努力
16・5		佐藤年緒会長（～現在）、十代田朗事務局長、津々見崇事務局員
17・5		規約改正（各期選出の評議員制度を廃止）、 ディスカッション企画①、学生との懇話会を定期開催
18・5		ディスカッション企画②、学生との懇話会を定期開催
19・3		社会工学50周年記念パーティ開催、記念誌発行

〈大学・社会工学科関係の動き〉

〈世相、社会の動き〉

1960年代	66・6	3学部（理、工、社会学）構想が決定	67	公害対策基本法の公布
	67・4	「3コース制（経済、土木、建築）でスタート	68	東大紛争
1970年代	69・3	紛争で卒業式が中止	69	東名高速全通、アポロ11号月面着陸
	・7	機動隊導入。大岡山キャンパスロックアウト		
	・9	授業再開		
	70・3	類別入試（社工は土木、建築と第6類に） 第1期学部生が卒業	70	日本万国博覧会、よど号ハイジャック事件
・4	学科の3コース制を廃止	72	浅間山荘事件、沖縄の本土復帰、日中国交回復	
71・秋	大学院（理工学研究科）に社会学を新設	73	第一次オイルショック	
75・4	社工棟完成	74	国立公害研究所発足	
1980年代			76	ロッキード事件
			77	筑波大学に社会学類誕生
			78	東芝が日本語ワープロを製品化
			79	第二次オイルショック、ソニーウォークマン登場
	85・12	華山謙教授死去	82	羽田沖で日航機墜落、東北、上越新幹線が開業
			83	大韓航空機墜撃事件
			84	グリコ・森永脅迫事件、東京ケーブル火災
			85	日航ジャンボ機墜落、つくば科学博
			86	ソ連でチェルノブイリ原発事故
			87	国鉄分割民営化
1990年代			88	青函トンネル開通
			89	昭和から平成へ、消費税導入、ベルリンの壁崩壊
	90・6	生命理工学部を設置	91	湾岸戦争、ソビエト連邦崩壊、バブルの崩壊
	91・4	大学院生命理工学研究科を設置	92	地球サミット開催
	94・4	大学院情報理工学研究科を設置	93	細川内閣誕生により55年体制崩壊、環境基本法公布
	96・4	大学院社会理工学研究科を設置。人間行動システム、価値システム、経営工学、社会学の4専攻を設置	95	阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件、もんじゅ火災
	98・4	大学院重点化始まる 〔重点化された組織〕理工学研究科（理学部、工学部）、生命理工学研究科（生命理工学部）〔学部を基礎としない「独立研究科」〕総合理工学研究科、情報理工学研究科、社会理工学研究科	96	Windows 95発売
			97	衆議院選挙で小選挙区制導入
			98	山一証券経営破綻
			99	長野オリンピック
2000年代				東海村JCO臨界事故
	00・4	大学院重点化を終える	00	ヒトゲノム読み取り完了、白川英樹博士ノーベル賞受賞
	01・8	渡辺貴介教授死去	01	アメリカ同時多発テロ事件、省庁再編
	03・9	森田恒幸教授死去	03	イラク戦争始まる、地上デジタルテレビ放送開始
			04	スマトラ沖大地震・インド洋津波
			08	リーマン・ブラザーズ経営破綻
			09	民主党政権誕生、個人情報保護法施行
			10	「はやぶさ」帰還
16・4	全学改革で社会学科が廃止	11	東日本大震災、東電福島第一原発事故	
19・3	第50期学部生が卒業	14	消費税8%導入	

社会工学科の50年

坂野 達郎

(1979卒、81M,87D 熊田研、東京工業大学
環境・社会理工学院 土木・環境工学系 教授)

本年2019年3月に卒業する50期生を最後に、社会工学科は幕を閉じる事になりました。1967年に第一期生が誕生してからこの間に巣立った学生数は、修士課程、博士課程の学生を含めるとおおよそ2500名にのぼります。私自身は、1976年に学科所属してから、途中私立大学に勤めた7年間を除く36年間、緑ヶ丘と大岡山で社工とともに過ごしたことになります。社工出身の教員の一人として、日本だけではなく、世界的にもユニークな存在であった学科の最後に立ち会うのは、とても複雑な気持ちです。

社会工学科の50年は、おおまかに3期に区分できるかと思います。まずは、ファウンディングファーザーズの時代です。学科創設に尽力された永井道夫先生、阿部先生、石原先生、川喜田先生、鈴木光男先生、そして学科創設直後に赴任された林雄二郎先生、鈴木忠義先生、いわば第一世代の教官の時代です。社会工学科の誕生は、社会の大きな変動と切り離して考えることはできません。鈴木光男先生の言葉をお借りすれば、20世紀は社会の工学化と工学の社会化が同時に進行した時代だと言えます。科学技術が社会に及ぼす影響の大きさと、それ故に工学自体を社会化しなければならないという時代認識が、社会工学科設置の決議を行った東工大の多くの教員はもちろんのこと、学外の多くの識者にも共通していたのではないかと思います。実は、社会

工学科は、工学部の一学科として出発しましたが、1966年の教授会で決議された大学拡充計画の中では、情報工学科と経済工学科を含む社会工学部を、理学部、工学部とは独立した第三の学部として設立するという構想の中に位置づけられていました。社会工学部構想の背景には、1952年に米国MITでSchool of Humanities and Social Studies が設立されたことの影響もあったとは思いますが、このような時代認識を共有した当時の先生方の決意の強さを感じます。

ファウンディングファーザーズの時代は、石原先生の退官された1985年をもって終了します。この年を堺にして以後、熊田先生、中村良夫先生、原先生、深海先生等、第二世代の教官に引き継がれていきます。時間は前後しますが、原科先生、宮島先生、矢野先生、渡辺貴介先生が着任され、初の社工出身教官として肥田野先生が着任されたのもこの時期です。異論はあるかもしれませんが、この時期をあえて特徴づければ、人文・社会的な色彩が弱まり、地域・都市計画的色彩が濃くなった時期と言えます。鈴木光男先生からお譲りいただいた資料の中に、林雄二郎先生、石原先生、谷口汎邦先生、阿部先生が集まり、社会工学科の現状と社会工学のあるべき姿について議論したメモがあります。日付が明記されていないため推測になりますが、おそらく学科創

設後1、2年のものと思われます。興味深いのは、社会工学部としてカバーすべきものを社会工学科一学科で担うことには無理があるという認識で全員一致しているものの、学科の性格を巡っては、地域や施設といった物的なものを通じて行動を誘導していくための技術・学問として特徴づけるべきとの立場と、地域開発に主眼をおいているのは社会工学（social technology）の可能性の一つを選択したものであって便宜的な措置に過ぎないとの立場の対立が見られます。人文社会出身の先生方と工学出身の先生方の考え方の対立が学科創設の当初からあったことが伺えます。第一世代の人文社会出身の先生方が去られた後、第二世代の社会工学科は、地域や都市を対象領域の中心におく方向にシフトしていきました。第二世代の中核を担っていただけたであろうと思われる華山先生が石原先生退官の年に亡くなられたことも、この社工の方向転換を決定づけた原因の一つになったように思われます。

地域・都市計画学科化した第二世代の時期が転機を迎えるのは、社会理工学研究科が設立された1996年です。社会理工学研究科の設立は、学部中心に組織されていた大学全体を大学院中心に改組する動きの中で行われた改革でした。同研究科には、旧専攻としても存在していた社会工学専攻と経営工学専攻に加えて、新たに人文社会系の先生方を中心にして価値システム専攻が、教育工学の先生方を中心にして人間行動システム専攻が設置されました。研究科の設立理念には、科学技術の発展が社会に深刻な影響を及ぼしているとの時代認識のもとに、科学技術と人間社会のインターフェースに

位置する文化や科学技術を対象とする学問領域を切り拓くとの理念が掲げられました。1966年に構想された社会工学部が、形を変えて実現したと見るができるかもしれません。

社会工学科は、この時期に、社工出身の教員が9名となります。第三世代の時期の始まりです。また、経済学出身の教員が増え、社会学出身の教員がいなくなったことも特徴です。教育カリキュラムが、3プログラム（経済学、ゲーム理論を中心にした制度設計理論プログラム、地域・都市計画を中心にした時空間デザインプログラム、どちらにも色分けしない創設期以来の社工的曖昧さを残した公共システムプログラム）に別れ、教員も、制度設計理論、時空間デザインのどちらかに所属し2分されることになりました。社会工学という共通のディシプリンを築けなかったことに対する反省から、専門分化はやむを得ないという意見が大勢を占めた結果ではありますが、専門分化すればするほど、既存のディシプリンと差別化することが困難になり、社会工学の独自性は消えてしまうリスクがあります。結果として、2016年の全学の改革時に、社会工学科は消滅し、経営工学コースと都市環境学コースに教員は分属することになりました。私自身は、共有のディシプリンはなくても、また、異質なものが同居することの緊張感や対立はあったとしても、それ故に生まれる可能性にもう少し挑戦し続けてもよかったように感じています。ただ、そのためには、緊張感に見合うだけの強い魅力を発信し続ける何かが必要です。最後の数年、2期生の渡辺孝先生を教員にお招きし、社会人ドクターを対象に

設置したノンプロフィット・マネジメントコースに、魅力の再生を期待していましたが、残念ながらその期待は潰えてしまいました。

この50年、社会工学は、共通のディシプリンを作り出すことはできませんでした。相変わらず、社会工学とは何か説明に苦労します。しかし、社会工学を必要とした社会の要請は変わっておらず、いまだその解

は誰も見つけていません。ゲーム理論、計量分析手法はほぼすべての社会科学の共通言語になり、情報社会、成熟した市民社会、ツーリズムといった第一世代の先生方の時代を先取りした社会意識は、ほぼ実現しつつあります。学科という組織の歴史は、幕を閉じることにはなりますが、この歴史を記憶にとどめ、新たな一歩を踏み出すことができると願っています。

社工の恩師の言葉から

中井 検裕

(1980卒、現東京工業大学 環境・社会理工学院長、建築学系教授)

社工会事務局からの50周年記念誌への寄稿を要請された。事務局からの依頼には「大学改革に伴う教育研究環境の変化へのご感想やご自身の研究室の変遷などを伝えていただければ」ということだが、要請に類することは本誌収録の「ニュー社会工学への道」(p.47)でも多少記録されていると思うので、自分史で読者には申し訳ないが、ここでは社工の恩師の言葉で今でも覚えているものを書くことにした。なにせ古い話であるから、少々脚色が入っているかもしれないが、そこは大目にみてほしい。

「君、ドクターに行くか」

修士2年の秋ごろだったかと思うが、恩師の石原先生にかけられた言葉である。当時は今と違って就職活動は最終学年に入ってから行うのが普通だったが、博士への進学も含めて何となく行先を決められず、典

型的な「はっきりしない」「決められない」学生だった。いくつか就活的なこともしたのだが、そういう学生だったから企業からいい反応があるはずもなく、結果的に就職浪人か博士かというような状態だったかと思う。そんな時、おそらくは見るに見かねてということだと思うが、先生から「君、ドクターに行くか」と声をかけられた。結果的に、それが後押しになって、博士に進学することになった。

「君、イギリスに留学しないか」

そんな状況で博士に進学したので、研究したいテーマを見つけるわけでもなく、なんとなく無為に過ごしていたところに、石原先生から「ちょっと話がある」と教授室に呼ばれて言われたのがこれだった。ちょうどその頃、先生はOECD会議の日本委員として参加されていたらしく、国際会議の

後だかに同じくイギリスの大学から参加していた委員と、今でいう留学生派遣のようなスキームの話になったらしい。こちらとしては全く寝耳に水の状態で、「ちょっと考えてみます」と言ってその日は終わった記憶がある。今では留学は珍しくもなんともないが、当時はまだ前例も少なく、費用のこともあるのでかなり悩んだが、チャンスをもたらしたと考えて最後には行くことに決めた。その後、苦手だった英語を克服するのに1年以上かかり、結局1984年10月に渡英した。

「お前、いつまでイギリスにいるつもりだあ？」

当初は1年の予定だったイギリス留学だったが、諸事情に加えて途中からは結構イギリス暮らしが性に合ったこともあって、留学は2年半かけて終え、その後運よくロンドン大学で今でいう特任助教のようなポジションを得て研究者としての道を歩み始めた。その助教の任期（2年間）も切れそうになった頃には、次の職探しということでダメもとでスコットランドのある大学の公募に応募してみたら、なんと面接に来てほしいとの連絡があった。その数日後、石原研の助手から助教授に昇任されていた深海先生から突然電話があり、開口一番これを言われた。結局、電話では埒があかないとその後すぐに直接ロンドンに来られて、話をした結果、スコットランドの面接は断って日本に戻るようになった。

「都市計画は冠婚葬祭からだよ」

日本に戻って東大の教養学部で4年近く助手をした後、石原先生が学部長で作られ

た明海大学不動産学部でお世話になることになった。当時、三鷹に自宅があり、浦安のキャンパスまでは車で通勤することも多かったのだが、夜も遅くなった時などは時折、石原先生を自宅まで送っていく機会があった。これは、そうした機会に車中の会話で先生から聞いた言葉である。あまりにもこの言葉の印象が強くて、前後の会話の脈絡を全く思い出せないのだが、要は人間関係を構築するのが大事というようなことだったかと思う。それから25年がすぎ、自分も今では、都市計画はつまるところ信頼の技術だと思っている。

書き出すときがないので、これくらいにしておくが、社会工学でこうした言葉に導いてもらったおかげで自分の今がある。「ニュー社会工学の道」での発言のとおり、社会工学で専門的な知識を先生から直接教えてもらった記憶はほとんどない。しかし、「人間力」のようなものは社会工学で教えてもらったと思っている。その意味では、社会工学には感謝してもしきれない。そして実はこの「人間力」こそは、今、どうしたら大学で学生に身につけてもらえるか、大学教育で一番腐心していることなのである。だから、社会工学科は終焉を迎えたが、社会工学での50年の経験はこれからの東工大に必ず役に立つし、社会工学の名前ではないだろうが、社会工学的な教育プログラムは学科（今では系と呼んでいる）としてではなく、次は全学共通のものとしてまた必ず復活すると思っている。

異端からみた社会工学

齋藤 潮

(1981卒、現・東京工業大学
環境・社会理工学院土木・環境工学系教授)

以下は徹頭徹尾の駄弁である。1977年。もともと、社会工学に関心があったこの大学に入学したはずだった。入学後、渋谷の書店に出かけては都市計画とか都市デザインとか題する書籍類を眺めたが、建築分野の手になる本が抜群に面白かった。工夫された図面表現や、構成を充分に考えて撮影された見事な写真を見て、そういうことに触れられる分野に身を置きたいと思った。それで、入学1年後、学科所属の折には建築学科を第一志望とした。しかし、そういう本ばかり読んで、いわゆる授業科目には不熱心だったので、当然、1年次の成績が思わしくない。当時、学科の人気は建築、土木、「社工」の順だった。それで「自動的」に社会工学に所属することとなった。甚だしく計画性を欠いた人種である。

ところで、「社工」は学内3大「暇」学科の称号を戴いていた。他の2つがどこか、聞いたようにも思うが覚えていない。必修科目でがんじがらめではないというだけで、入ってみるとそれほど暇とも思われなかった。それに、社会工学には都市空間をフィールドとする設計製図があって、これではじめて大学に入った意味を見出した。幸か不幸か、経済学などの授業にリアリティを感じることはできず履修計画を最適化した。それで自分にも意外に計画性のあることに気がついた。それはともかく、逆に、数理的思考は得意だが空間表現は苦手

という同級生もいた。まあ、そういうものだろう。ある著名な4期生の話だが、学生時代、設計製図が大嫌いだったと火を吐くような勢いで吠えておられた。養老孟司氏流に言うなら、それぞれ使っている脳の部分が違うから、リアリティを感じる向きが異なるのだ。

それでも、私の周囲では社会工学とは何かということが折々に捉え直されていた。建築や土木とどう違うのか。どんなスキルを身につけて世に出るのか。職能としての将来性はどうか。しかし、正直に言って、そんなことにあまり関心はなかった。自分が好きなことをやればいいんじゃないか、という程度にしか、問題を捉えてはいなかったのである。

東京大学の土木工学出身で景観工学という分野を創始された中村良夫先生が当時、助教授でおられたので、1980年、研究室所属では迷わず門戸を叩いた。先生に拾われて、のちに研究室助手として奉職することとなった。以後、2つの職場を経て1996年に再び社会工学に呼んでいただいた。折しも大学は大学院重点化政策に向けた組織改革の最中だった。社会工学は、土木、建築と別れ、人文系分野などと「文理融合」を掲げて大学院に社会理工学研究科を組織する選択をしていた。

そうこうするうちに、数理分野の教員から、設計製図で徹夜した学生が講義を欠席

したり、遅刻したり、講義中に居眠りするなどして授業運営に支障があるとの苦情が出だした。2005年ごろには、カリキュラムを数理分野と空間分野で分離しようという動きが加速し、そのとおりになった。それでも卒業論文発表会では教員の全員参加が原則だった。ある数理分野の研究室の卒論生が、過去数年間の社会工学の卒業論文をもとに数理解析手法によって研究室を分類して見せた。それはその卒論の副産物だったようにも思うが、ともかく、その結果、私の研究室が特異点的に異端であることがわかった。なるほど、と思った。

2015年ごろから本学は、ディシプリン強化に向けて舵を切り出した。ある数理分野の教員がこれを受けて社会工学解体を推進した。社会現象の複雑化に対応できる高度な専門性が要請されるこんにち、異分野横断的なカリキュラムでは十分な教育ができないというのがその大義だった。もっと言えば、空間分野が数理解析手法を用いて行なう研究のレベルは、数理分野研究の最先端からみれば今やあまりに初歩的であって、所詮、研究交流など期待できないというような趣旨だった、と私は解釈している。そのかれは、我々は経営工学と一緒にいるから君ら空間分野は土木や建築と一緒にやっではどうか打診してきた。大学院重点化で土木、建築との分離を唱えたその人の言葉だけに啞然としたが、数理分野の他の教員に密かに解体阻止を持ちかけても賛同はなかった。しかし、冷静に考えてみると、社会工学のあるべき姿にも無関心で、研究分野的にも社会工学の異端たる私には、分離に反対する合理的な理由はないはずだった。

2016年、社会工学は組織的に解体され、

数理分野は新組織、工学“院”の経営工学“系”に、空間分野は環境・社会理工学“院”の建築学“系”と土木・環境工学“系”に分散して編成されることとなった。教員の配属先は本人の希望に依る。空間分野の教員は大学院では都市・環境学“コース”に所属し、大学院重点化の折に組織的に分散した教員もここに合流するに至った。だが、新組織開始後には、旧社会工学枠で入学した学生の卒業論文発表会も数理分野と空間分野で分離して実施されるようになった。授業でも発表会でも分野を超えて顔を合わせる機会は失われた。社会工学は、接着しにくい要素を接着しようとしてエネルギーを注いできたが、その中では分離しようとする力がつねに、おそらくは発足当初から作用し続けていたのである。接着のエネルギーが失われれば分離は必然だと言ったら、無責任の誹りを受けようか。

私の同期生には社会工学の存在意義を語れそうな人物が何人かいる。私自身について言えば、語る言葉を持ちあわせてはいない。しかし、もし、学科所属で建築学科に入っていれば、そこでは都市空間を視野に入れた授業はほとんどなかったわけだから、完全に落ちこぼれていただろうと想像できる。今、自分がここにいるのも社会工学の恩恵であることに違いないし、異端を排斥しない自由な気風もまた恩恵だということ是可以する。しかし、そのことと、数理分野(精確には経済学分野)と空間分野を接着させようとした社会工学の存在意義とは、少なくとも私にとっては別問題である。社会工学が半世紀にわたる実験だったとすれば、それが終了したという、そういう淡い感慨があるのみである。

社工50年によせて

大土井 涼二

(2001卒、現・東京工業大学
工学院経営工学系 准教授)

もう「しゃこう」と打って変換しても、「社工」がなかなか出てこない。かつては一発変換できるよう単語を登録していたが、2016年4月の組織改編から3年を経とうとしている現在、研究室の学生も順調に巣立っていき「しゃこう」とタイプする機会も減った。社工がゆっくりと自分にとって遠い存在になっていくのを実感させられる。

社工には学生として3年間、教員としては4年間いたことになる。といっても大学2年のときは好きな講義を除いてほとんど大学には行かなかったし、大学院からは当時も今も多くのマクロ経済学の研究者が集積している大阪大学へ進学したので、おそらく同期の人間と比べると社工への思い入れは薄い方だろう。教員としても、過去のメールを読み返してみると着任した翌年の2013年には既に組織改革に先立つカリキュラム改革の会議が始まっている。このようなこともあり、じっくり腰を据えて社工にいたという実感はない。

学生時代を振り返ってみて、当時の自分の社工への感情を一言で表すと、その学際性ゆえの「愛憎こもごも」となるだろうか。「憎」は穏やかではないので、「アンビバレントな感情」と表現し直した方がいいかもしれない。「愛」、もしくは「感謝」の理由は明白で、自分の専門分野であるマクロ経済学に出会うきっかけをくれたのは間違い

なく社工だからである。前述のとおり2年時はあまり大学にいなかったもので、3年時に社工のいろいろな分野を一から勉強していくうちに経済学の面白さにハマった。その意味で、自分は間違いなく社工が持つ学際性の恩恵を受けている。結果として、その翌年にはマクロ経済学のテーマで卒論を書き、更に次の年には別の大学院の経済学研究科に進学することになる。結局この大学3年の1年間がその後の自分の進路、そして現在の職業を決定づけてしまうのだから、改めて当時の1年間は今の4、5年分に相当する濃密さだったように思う。10年以上の時が経って2012年に着任したとき、「入科当初はよくサボっていた経済学の講義を、まさか自分が担当することになるとは」と感慨にふけたのをよく覚えている。

一方、負の感情の理由も明白で、一分野の講義の厚みのなさ、要は「物足りなさ」である。これは個々の教員が行う教育の質に問題があるわけではなく、学際教育を標榜する部局が直面する特有の難しさだろう。様々な分野の研究者が集まればそれぞれの学術的基盤のディシプリンがあるわけだが、そのディシプリンや研究の方法自体がそれぞれの分野において日進月歩で発展している。しかし、ある方法がもはや最新のものではなくなっても、それを知らないとならば最新の方法の利点がわからない

といったことも学術の分野ではよくあることである。学際教育の場合、一分野の科目数の制約上基礎か応用ではどちらか一方のみが講義されやすく、結果として最新の研究方法を講義してもそれが表面的な理解にしかつながらないといった問題や、基礎的な内容をみっちりやっても学生のモチベーションが持続しないといった問題が起りやすい。後に学科内で分野によって履修コースが分割され、私が教員として着任したときにはこの問題はだいぶ解消されているように感じたが、同時にそれは学際性が失われたということも意味する。本当に難しい。

現在、私の所属は「社会理工学研究科社会工学専攻」から「工学院経営工学系」へと変わったが、幸い組織改変以前と同じ講義を担当させてもらっている（マクロ経済学第一、第二、そして大学院科目の上級マクロ経済学）。同じ数の科目がミクロ経済学、計量経済学にも用意されている点も社工と同じで、この3分野に「応用〇〇経済

学」と名付けられた応用科目も用意されている。もちろん社工の伝統的研究分野であるゲーム理論についても協力ゲーム理論、非協力ゲーム理論に関する質の高い講義が学部、大学院の両方で行われている。研究に関しても、経済学では学生と共同研究を行うことは稀で（そもそも経済学では“研究室”はもっぱら教員の居室を指し、「教員室と学生居室がワンセットで“研究室”というスタイルではない）、教員同士で行うことが多いので、社工から経営に指導学生が変わっても特に研究スタイルを変えることもなく毎日を過ごせている。

社工を飛び出していった自分だが、縁があって戻って来て、そしてその終わりに立ち会うこととなった。今から自分が社工にできることは非常に限られている。非常に凡庸ではあるが、自分がすべきことは、これまでとこれからをきちんと記憶しながら、日々研究と教育に邁進することだと思っている。

いまこそ必要、社会工学と総合理工学

原科 幸彦

(東京工業大学 名誉教授)

私は社会工学科のゼロ期生です。1968年、社会工学科の1期生が研究室所属する1年前、高度情報社会論を唱え未来学で知られた林雄二郎先生の研究室に入りました。1期生の1年前なので、ゼロ期生。私は建築学科の所属でしたが、同期の天谷幸生君、さらに応用化学工学科の佐々木真一君も一

緒、3人で林研究室に入りました。また、早稲田大学政治経済学部から研究生として小栗幸夫君らも研究室に加わりました。

私が建築学科から社会工学科の研究室に移った理由は都市計画や公害問題に関心があったからです。1968年は日本のGNPが世界第2位になった年で高度経済成長の

真ただ中。都市問題、公害問題が深刻な時代でした。林雄二郎先生は高度経済成長を行政側で支えた方で、経済企画庁経済研究所の所長を経て社会工学科の教授になりました。思いがけず1年早い学生指導になったわけですが、林先生は快く引き受けてくれました。

おかげで、社会工学、建築学、化学工学、さらに政治経済学と、分野を超えた交流が始まりました。学際的で自由な雰囲気があふれ、社会工学科の1期生をはじめ後輩諸氏とは研究室を超えた交流がありました。林研究室では科学技術と社会の問題が大きなテーマで、テクノロジー・アセスメント(TA)が重要な話題でした。私はその後、より広くインパクト・アセスメント研究を行ってきましたが、政策や計画の意思決定を合理的で公正なものにと支援するものです。これは持続可能な社会づくりの根本で、社会工学の重要な領域です。

私はその後、博士課程では熊田禎宣先生の指導を受け、社会工学科の助手を経て、環境庁国立公害研究所(現在、国立環境研究所)で参加と合意形成の研究を行いました。1983年に社会工学科に戻り助教授、教授を務め、1998年に、すずかけ台の大学院総合理工学研究科に移り、環境理工学専攻で環境計画・政策の教育研究を行いました。2012年に定年退職するまでに両キャンパス

で40数名の博士も指導しましたが、多くの教え子が多様な分野で活躍をしており、その姿を見るのが楽しみです。

総合理工学研究科は文字通りの学際研究科で、理工学の全ての分野が交流します。この研究科ができたのは、社工1期生卒業の5年後、1975年です。当時は社会と科学技術の問題に真正面から取り組もうとしていました。この姿勢は今こそ必要なのですが、東工大は社会とのインターフェースである社会工学科と、学際的に取り組む総合理工学研究科の双方を廃止してしまいました。このことが残念です。

東工大の卒業生は職人気質で、専門家として筋を通す人が多いように思います。これが専門家としての倫理。私は現在、千葉商科大学で倫理教育を基礎に、持続可能なエネルギー社会の形成を目指して活動しています。再生可能エネルギーに関して、工大ではテクノロジーの開発を、商大では「商いの力」で再エネを社会に流通させる。日本では商工会議所と言うように、商と工とは相補い合うものなのです。

そんな思いも込め、総合理工学研究科の元研究科長として、研究科創立40周年記念誌に寄せた以下の一文(本誌・資料編に掲載の「専門家の倫理と学際」)を紹介します。社会工学と共通する精神を読み取って頂きたい。(現在、千葉商科大学 学長)

〈第2部〉 社会会はいま

社会工学の学科は消えるけれども、そこで学んだ卒業生は各分野で活躍している。その姿を同窓生同士で、また在籍している最後の学生に伝える2つの活動をお伝えします。2年続けて行われたディスカッション「ニュー社会工学への道」と「社会工学科OB&OG懇話会」です。これからの「社会会」をめぐる、さまざま意見が交わされました。

「ニュー社会工学への道」



社会工学科に新入生が進学しない「廃科」の決定を受けて、同総会「社会会」は2017年の総会前に、これからの同窓会の方向を模索するためにフリーディスカッション「ニュー社会工学への道」を開催。海外の開発に取り組むOGも含めた5人が登壇し、社工で学び、仕事で生かされている考え方や、これからの社会会でのつながりについて話をしていただいた。現役の先生からも同窓会への期待が語られた。司会は3期生でメディア出身の角田光男さん。

角田光男（司会）：角田です。今日のディスカッションですが、一番手前が東京都の生活文化局長を務められた小林清さん。そ



のお隣にマニラから駆けつけていただきました本田恵理さん。三番目に鹿島建設で都市計画などをやられている西村真さ

日時：2017年5月20日（土）

午後1時～3時30分

場所：東工大西9号館933教室

【登壇者（年次順）】

小林 清氏（81卒/東京都）

本田 恵理氏（84卒/アジア開発銀行）

西村 真氏（84卒、86M/鹿島建設）

中田 康之氏（93卒、95M/日本政策投資銀行）

白川 慧一氏（05卒、07M/土地総合研究所）

【司会】

角田 光男氏（72卒、/元共同通信）

ん。それから日本政策投資銀行でお仕事をされている中田康之さん。ここまでは20世紀の卒業生ですが、一番若くて高校野球でいうと「21世紀枠」のように実力がある2005年卒業白川慧一さんです。よろしくをお願いします。

最初の登場は小林さん。私、実は共同通信の社会部の記者時代に都庁を担当したことがあったのですが、都庁の連中に小林さんについて聞くと、議会答弁もぴしっとしてるし、実行力もあるいい男だよという話を聞いておりました。東京・三鷹の出

身で、「小林さん、良い体してますね」って聞くと、「子供のころ相撲やってました」っていうんですよ。稀勢の里に負けないくらいなかなかの相撲をやって、大学時代はバレー部。ですから、スポーツマンとしても活躍していて、道なき道を突破する社会工学スピリットみたいなものは、そんなところからもでてきてんじゃないかなと私は感じ取っております。では、小林さんにお話をしていただきましょう。

異質との交流、都知事 of 思想を汲み取る —小林さん

小林清：小林でございます。いま角田さんにリラックスさせていただくような紹介をしていただいたんですが、まだ緊張しております。私は1981年に華山研究室を卒業しました。この東工大の思い出は、社工と華山研とバレーボールをしていましたから体育館。ここに火曜・金曜・水曜・土曜は練習をしていましたから、そこに通ったというのが最大の思い出です。しばらく前になくなってしまい寂しい気もしておりますけれども、この学内を走らされたりもしましたので、このキャンパスは、やはり非常に大



きな青春の一ページになっていることは間違いないと思っております。

華山研を出て東京都に就職しました。82年に入って昨年の夏に退職するまで、36年都庁に勤務をしました。この間に知事は5人です。最初、鈴木俊一さん、長くやられましたけれども、私も若かったものですから、あまり直接存じあげておりません。それから青島幸男さんが急になられて、一期4年でやめられましたけれども、非常に厳しい立場の中でやられたんじゃないかなと思います。その後、強烈なインパクトの石原慎太郎さんが登場し、かなり長い時期、都知事をやられました。

長い時期やられたので、課長のときから局長のときまで結構近くで付き合うことになったわけです。石原さんがやめたら、毎年知事が不祥事で代わり、私は4年間局長をやらしていただいたんですけど、都議会のときに都知事の後に座っていて、いつも前に座る人が代わるのでテレビカメラにさらされるという状況でした。

地方自治体は4年任期の首長です。国と違って自治体は「二元代表制」です。議員内閣制ではございません。大統領制に近い。私たちは知事の下で執行機関にいるわけですが、しかし現実的には執行機関と議決機関の機能はかなり重なり合ってる。どうしても、あるところから、政治と非常に密接な中で仕事をしなければいけない。行政が行政としてだけの領分でなく政治を慮ってコトを動かしていく。この公務員の生活の後半はかなりそういう仕事でした。

大学では華山研にいて土地問題をやらせてもらいました。華山研では経済学はかなり主流なものを占めていたのですけれど

も、社会工学では、経済があり、都市計画があり、社会学がありと。また、研究室ごと、あるいは一人一人がいろんなテーマをもって、いろんな多岐な分野にわたる中を包括する社会工学というものがある。やっている一つ一つのことが、他の分野、他の人と交わることでスパークし、そこにどのような新しい価値が生み出されるかということに、社会工学の意味合いがあると思っておりました。

このことは実社会の中に入るとまさにそのものでして、社会工学ということで就職しているわけではもちろんございませんし、私は事務という職種の中で、法律や経済や様々な分野の中の人たちと一緒にやっていく。また、事案によっては土木や建築など技術職とも仕事をやっていく。行政はある意味縦割りで壁を築きがちですが、そういう時に、自分の中で何か異質なことを拒否するんじゃないくて、むしろそういう中で多様な議論を歓迎する気質が社会工学の中で育ったんじゃないかな。やってるときはあまり意識しませんでした。結果的に多くの場面でそのDNAに助けられたり、役立ったりしたんだとようやく分かってきたというのが実感です。

いくつか経験した事例をお話したいと思います。東京都は非常に大きな組織でして、職員の数も、学校の先生や警察官も含めれば17万人、一般行政部局と公営企業だけでも4万人程度。局にしても相当の局がございます。私も36年間で7つの局を経験し、都庁の外の組織でも、経済企画庁と墨田区役所に出向しました。いろんなところの部署でいろんな人と交わって、それを何年か繰り返してやっていく。

印象に強く残っている仕事の一つの事例ですが、石原さんが知事になったときに、所信表明を書く仕事を担当していました。青島さんの最後の時からです。国でも施政方針演説を総理大臣がしておりますけども、年4回ある都議会の初日の冒頭の知事所信表明演説、それを書く仕事です。アメリカにはスピーチライターという専門家がいると聞いておりますけども、私は「石原さんはこういう仕事を役人にやらせないだろう」「自分で書くか側近にやらせるんだろう」「知事はまたしても作家だが、作家に出す文章なんぞございません」と勝手に考えていました。しかし上司も知事側近も当然私が書くものという雰囲気なので、集めた資料を読み漁り、都知事に就任して最初の本格的な発信となる演説原稿のたたき台を、センセーショナルな公約も料理して織り込みながら書いたのです。

知事はもちろん副知事はじめ都の幹部が集まる首脳部会議で、上司の部長が読み上げて、私は後ろに小さく座ってました。30分以上かかる長い文章でしたけども、読み終わったあと、石原さんがいきなり「誰だ！これを書いたのは！？」と大きな声をあげ、私は後ろで震え上がったのです。当然うちの局長は「これは私共事務方が組織で書きました」と言うと思ったら、「あそこに座ってる課長の小林が書きました」と。振り返って私を見た局長にそう言われて、なんという上司だ、一課長に責任を全部押し付けるのかと、びっくりしました。その後、私を睨んだ知事がしばらくの沈黙のあと（私にはとても長く感じた）「おう、これで行こうぜ」と。だったら最初から怒鳴るんじゃないよ！と言いたくなりました。けれ

ども、そこを突破したから今があると思っております。

石原知事は公約もはっきりしていましたが、価値観が鮮明ではっきりしてたんですね。就任直後に側近の人から、「石原の思想と価値観、やりたいことは全部この中に入っている」という冊子を貰って、これは熟読しました。僕はあの人の小説は面白くないから一冊も読んでないですけど、政治に関する著書や論文は殆ど熟読しました。演説や国会答弁も丹念に調べました。結局、最初にいかに本人の思想を汲み取って信頼感を得るか。価値観や時代認識を書くところで間違えらるともう相手にされません。逆に政策の方は、行政の土俵の中で書けるんですけど、あの人の独特の価値観、それは私の価値観とはもちろん違いますけど、しかし、ゴーストライター役としては、それを読みとって表現するのが仕事であり、それをこなしたから仕事として認められたということです。今考えると、これも社工DNAに救われたのではないかと思います。

学生時代に社会学を学んだときに、何かを排除をしないと、異質なものも受け入れるところを、あのリベラルな華山先生のもと非常に強く感じて、振り返ってみれば、自分の中に残っていたのではないかなと強く思っています。それからもう一つ、華山先生から非常に強く学んだのは現場主義です。これも社工の特徴だと思っております。自治体は政策を生み出さなくては行けないんですけど、現場の中に政策の源があるというのはとても大切な考え方だと思っております。

現場での判断を優先に

何回目かの所信表明のときに、こういう案文を提案して認められたことがあります。それは「行政とは社会の利害関係のぶつかり合いや衝突を議会や都民と一体となりながら調整し、新しい価値を生み出していくものであり、そこに新しい政策の源があると考えます」という文章です。これは行政実務を経験してきた自分の考えです。石原さんから言われて書いたわけではありません。調整を要する多くの現場は正義と正義のぶつかり合い。正しい人と間違っただけの人がいるのではない。その中で合意形成が求められる。決して足して2で割ったのではない、そこで生まれた価値観の中にこそ、実践力を備えた新しい政策の萌芽があると思うわけです。

現場主義と言えば、墨田区に出向したときに、「コンサートホールの立ち上げをやり」と言われた時の経験も忘れることができないスリリングな出来事でした。錦糸町駅北口に1997年10月にオープンした「すみだトリフォニーホール」です。290億円も建設費に掛けていたので、失敗したら強く推進している区長に責任が及ぶチャレンジな事業だなと緊張したんですけど。そこに新日本フィルというプロのオーケストラをフランチャイズさせるという日本で初めての仕事。僕は相撲をやっていて大好きですので、墨田区と聞いて最初飛び上がって喜んだんです。しかし大変な仕事でした。「芸術と地域」という重要なテーマにおける行政の新しいチャレンジです。

クラシック音楽好きな方いっぱいいらっ

しゃると思いますけども、欧米では同じホールで練習をして、そこで本番をする。「音作りの一貫性」という当たり前の話。だが、日本ではその環境がない。練習と本番は別のところでやる。サントリーホールで練習するプロのオケはありません。NHK交響楽団もNHKホールで両方やっているわけではなく、練習は高輪の練習場でやっている。そして、オーケストラがそのホールに住むということ、それを日本で初めてやる。楽器庫も楽譜室も、楽団の控え室も事務局もすべてホールの中にある。そこで練習を何回やって本番を何回やるか、オケにホール利用の優先権がある。チェロの台の木目は縦と横のどっちがいいか、高さはどうか、その一個一個までもオーケストラの要望を取り入れて決めていく、そういうホールです。

ここに当時の新日本フィルの名誉芸術監督は小澤征爾さん。小澤さんをご存知の通り「世界のオザワ」。その当時はボストン交響楽団の音楽監督でした。その小澤さんが振って最後の音響の実験で新日本フィルが演奏すると「音が出てこない」と言われる。音響設計会社を交えていろいろ話したんですけど、結局は「ホールに問題がある。ステージの上に音響反射板を作ろう」と小澤さんが強く主張しました。

音というのは、弦楽器は上昇指向があり天井に当たって反射した音が客席にいくらしいのです。それに対して管楽器は直接飛んでいく。初期反射音と直接音、この微妙なバランスがそのホールの音響を形成し、初期反射音の密度がホール全体で均等になることが音響の良さの要因になるそうです。小澤さんは「天井高をもっと低くしろ。

音響反射板をつくれ」と言う。一方、音響設計会社は「このホールはそんなことは必要ない。なぜかといえば、ホールは後ろから前に客席は下がっていきますけど、このホールは天井高も並行して下がるようにしてある。だからステージ上での天井高は高くない。模型を使ったテストでも反射板はつけなくて大丈夫と証明されている」と強硬に抵抗をしました。

さてどうするか。この調整に当たって、私は反射板を付ける方に判断したんです。付けるに当たってももちろん、音響設計会社を説得しなくてははいけませんし（涙ながらの説得でした）、それから、ただ反射板を作るだけじゃなくて、いろんな制御装置の入れ替えもしなくちゃいけなくて、5千万円以上の経費がかかるということもわかりました。でもそれを現場で即決しました。

この仕事を通じて私はいつも現場の中にいました。もしかしたら正解は別だったかもしれない。事実、別に付けなくてもよかったですね。後になったら外してました。オーケストラがホールに慣れてきたら外したんですね。コンクリートも乾いて音がしっかりしてきましたから。ただ、オープン前に小澤征爾が、「このホールは音響がよくない。しかも対応した役人が良くない。音楽家の言うことを聞かない。だから公共ホールは多額の税金をかけてもいいものができないんだ」。こういう風に言われたら、もう正直言ってアウトなんですね。このときも社会工学を思い出しました。行政の現場にいと、正解は一つとは限らない。問題は決めたものにどうアプローチするか。あとをどうフォローするか。という風に思っております。その時に、日頃から

現場の中で信頼関係を築いておくことはとても重要です。この仕事も、私が社会工学の華山先生の現場主義を意識した、やはり現場の人たちといろいろ話していて良かったなという事案でございます。

角田:小林さん、ありがとうございました。私も東京の足立区千住の出身ですから、下町の気質とか気風とか、肌身につくような人間なんですけども、そこへ山手の中央線から小林さんが飛び込んで来て、見事お互いに違った育ちの環境の者が混ざり合って、いいものをつくった。その後、やはり生活文化局長になったのも、この時代に社工で学んだことを生かしながら、進んでいたのが小林さんには非常に大きな持ち味になったんじゃないかなと私は感じました。私から一つだけ質問ですが、小林さん、5人の知事、鈴木さんから舩添さんまで、強烈に印象残っているという人がいたら、この人っていうのを言えますか？

小林:そうですね、やはり石原さんは強烈なイメージですね。例えば、さっきの小澤さんに関する別の話をすると、石原さんの公約の中に、良し悪しは別で、横田基地の軍民共用化というのがあったんですね。それをやりたいといったときに、「委員会の委員に小澤を入れたいので、ちょっと話してくれないか」という話がありまして、「え、なんで小澤征爾なんですか」と石原さんに聞いたら、「東京都は横田のことを考えるときに地元の自治体とばかり話をしている。それだけじゃダメだ。まず国際的に活躍している日本人で、成田がいかにも不便で時間の損失であるかが分かっている人間を

まず入れるんだ」という話なんですね。地元の騒音対策だけじゃなく、横田空港に利便性を享受するサイレントマジョリティーを見なくてはいけない。なるほどと思いました。

よく似たテーマに、開発利益の「還元と負担」問題がありますね。誰が負担して、誰に利益が還元されるか両方を見なくてはいけないのと非常によく似た話。平成11年の頃は斬新だったと思うのです。行政はなかなかそういうことをできなかったから。ですが、この話にはオチがありまして、小沢さんは当時ウィーンフィルの指揮者になったので、「最初は『うん』って言うてくれたけど、ヨーロッパに行っちゃったので委員会には来られません」って伝えると、石原さんは「じゃあ坂本龍一を…」って言われたんで、「そりゃ僕は知りません」となりました。

広く浅い知識と経験で、チームを束ねる 一本田さん

角田:ありがとうございました。では、次にお隣の84年学部卒の本田恵理さん、よろしくお願い致します。

本田恵理:秘密の仕事をつくって、マニラから帰ってきました本田です。私は東工大を卒業（84年卒、原研）してから、修士はバンコクにあるアジア工科大学（AIT）のヒューマンセトルメンツデベロップメント（人間居住開発）という学科で2年間勉強しました。ヒューマンセトルメンツデベロップメントも実はなくなってしまったので、私は大学も大学院も卒業した学科がなくなってしまった、寂しい気持ちになってお



ります。

AITを卒業してから国際協力機構、当時は国際協力事業団に就職しました。それ以来ずっと、途上国の開発援助の仕事をしています。2004年からはアジア開発銀行（ADB）。このごろ、前総裁の黒田東彦さんが日銀の総裁になったり、中国のAIIB、アジアインフラ投資銀行との比較で、アジア開発銀行もニュースになったりしているので、みなさんご存じかもしれません。ADBと同じ国際開発金融機関の世界銀行は世界全部の途上国を対象にしていますが、ADBはアジアと大洋州の国を対象に、基本的に開発のためのお金を政府に対して貸し付けています。私たち職員は貸し付けるための準備の調査をやったり、事業実施中に調達などの支援をしたりしています。

ADBではベトナム事務所にも勤務しましたが、今はマニラの本部に勤務しています。海外の生活は全部で今22年目。だから大学を卒業してからは海外で生活している方が長くなってしまいました。

今は東南アジアの担当ですが、主にミャンマーの都市インフラプロジェクトを担当しています。上水道、下水道、廃棄物処理、都市交通とか、そういうプロジェクトをやっています。プロジェクトの計画・実

施には、いろいろな専門家を交えたチームで取り組みます。インフラといってもエンジニアだけでなく、プロジェクトの経済効果を測るエコノミスト、事業の財務分析を行う財政の専門家、環境アセスメントの専門家、女性の参加を確保するジェンダーの専門家、などです。このようにさまざまな分野の専門家をチームリーダーとして束ねていくうえでは、いろいろな分野のことを広く浅くわかっている必要があります。エンジニアの中には、ジェンダーとか社会開発などいわゆるソフト分野にアレルギーのある人もいますが、私はあまり抵抗なく取り組むことができました。社工で学際的に幅広い分野の勉強をしたことが役に立っているのかなと思います。

マンダレーというミャンマーで2番目に大きな町で、上下水道整備のプロジェクトを実施しています。マンダレーでは、全体の人口の半分にしか水道が来ていません。その他の人たちは自分で井戸を掘ったり、川に汲みにいったりしてるわけです。水道のある50%の人たちも24時間水が出るわけではなくて、大体平均して12時間くらいしか水が出ません。

川や井戸の水を、浄化处理せずにそのまま水道管に流すものですから、乾季の終わりくらいになると、水かさが減って水が濁ってきます。ホテルでも、蛇口から出てくる水がなんとなく茶色くなってくる。「水が茶色くなってきたね」という話をしていたら、ミャンマー人のコンサルタントが「自分の家ではときどき小さな魚が出てくる」などと言うのです。そんな状況ですから、水道を作ればみんな喜んで使ってくれるだろうと思ったんですね。

ところが、ヒアリング調査で「上水道ができたなら、接続しますか？」と聞いたところ、「接続したい」という人がごく少なかったんです。これは、水道に接続するための接続料金が比較的高いということもあるのですが、もっと根本的に「健康」と「水質」との関連がよくわかってない。下痢をしているのが普通だから、気にしないのですね。水質の悪い水を使っていると病気になるというのを、まず理解してもらわなくてはなりません。

それから、水道管に接続することが可能でも、「一日12時間しか出ないんだったら、いらぬよ」と思ってしまうということもあります。川とか泉に汲みにいけばタダだし、我が家はそれでいいという家族もいるわけです。また、ミャンマーは軍事政権が長かったので、政府のことは信用しないという気持ちを持っている人たちがたくさんいるのだと思います。そういういろんな理由で、いい水道を作ったからと言って、自動的に人々が水道に接続してくれるとは限らない。そこで、できるだけ多くの家庭が水道に接続してくれるよう、いろいろな話し合いや啓発活動をしていくわけなんです。そうなるともうエンジニアリングだけの仕事でなくなってくるわけですね。幅広い視点から問題に対応していかななくてはならない。このような仕事をしていくうえで、社工的なアプローチが、役に立っているように感じます。

私が最初に海外に行ったのは、バンコクのアジア工科大学院に留学した23～24歳の時ですが、若いときに海外で暮らすと、驚くほどたくさんのお話を吸収するものです。今日はあまり若い方がいらっしやんな

いようですけれども、若い方には、まだ心が柔らかいうちにぜひ海外に行っていただきたいと思います。いまでは、街の中を象が歩いていても牛が歩いていても駱駝が歩いていてもびっくりしませんが、バンコクで象が街の中を歩いているのを初めて見たときには、本当にびっくりしました。

角田: 本田さん、ありがとうございます。本田さんの話の中に、専門のことを少しずつ分かって、それを基に組織を、チームを束ねていくというお話がありました。私自身もそうなんですけども、小林さんも同じようなものを感じていた。本田さんの体験で、そこをもう少し深掘りすると、どんなことでしょうか。

本田: それぞれの専門の人は自分の専門のことに集中するわけですね。例えば、財政の専門家は、水道料金をもっと上げないと施設の維持管理に必要な収入が得られないと言う。他方、貧困配慮の専門家は、ここには収入の低い貧しい人たちがたくさんいるのだから、そんなに上げちゃダメだと言う。異なる立場の専門家の間で話し合い、調整を重ねて、妥協点を見つけていく。そういうようなことではないかと思います。

都市の開発、各専門分野をコーディネート —西村さん

角田: はい、ありがとうございます。続きまして西村真さんです。

西村真: 鹿島建設の西村です。本田さんとは同期です。まず、私の鹿島建設での仕事を少しお話して、それから社会工学科にどうして入ったか、でどうだったか、という話ができればと思います。

鹿島建設で、私は設計屋でもなければ施工屋でも事務屋でもない。1986年修士卒で、そのころ丁度、冬の時代からバブルに向って駆け上がっていくスタート地点だったんですね。ゼネコンは昔から、単純に設計だけ施工だけやっても天井にぶつかってしまうと言われていて、必ず多角化しないといけない。でも多角化もむやみなことをやってもダメで、開発事業が重要な柱の一つとなりました。それは今でも変わっていません。

鹿島に開発事業本部が1985年に組織され、その一期生を採りたいという話が先生を通じてきました。私はゼネコンに行くつもりじゃなかったけれど、「都市開発ができるのなら、じゃあ、ぜひ応募したい」と開発事業本部の一期生として入りました。そのあと後輩がずっと入ってもう二十名近く社工の出身を開発事業本部で採用し続けております。

入社後はいろんな経験をしているいろんな部署に散っております。開発事業本部では都市開発・地域開発の仕事をします。自分で土地を買ってマンションを作って売ったり、オフィスビルをつくって貸したり、それをまた売ったり、という不動産デベロッ



パーのような仕事をしますし、不動産コンサルタントとして公有地であれ、民有地であれ、いろんな企画提案、コンサルティングもします。また駅前再開発や、区画整理でニュータウンや産業団地をつくったりもします。再開発や区画整理では事業協力者や業務代行者という立場で、全体をコーディネートしたりもします。ソフトなところでは、対行政のコンサルティングでマスタープラン作成の支援をしたり、大きいものから小さいものまで、コンサルタントから不動産屋的なものまでいろんなことを幅広くやってきております。

私が社会学を知ったのは、高校3年のときにたまたま中古本で「都市の景観」という鹿島出版会の本をたまたま手にしたからです。そこに中世の都市の魅力、空間の魅力であったり、マーケットを広場でやっていたり、魅力的な生活ができていた新しい事例や古い事例が紹介されていた。これは面白かった。

私は少しデザインが好きだったけど、決して建築デザイナーになるような人間ではなかった。だけど、都市という分野があることに目覚めたのです。建築家が設計する都市計画を俺はやりたくないじゃない。では何がやりたいのか。人間の豊かな活動やコミュニティがそこで生まれるだとか、建築だけじゃなく、開発プロジェクトを運営する、都市が運営される、経済が回る、そういう幅広いことに興味があるなと段々思い始めたのです。

さらに、NHKのラジオ講座で、都市経済学、都市社会学、都市心理学とか都市何とか学というシリーズがありました。受験勉強をちょっと脇に置いて、これは面白い

など思いながら聞いていたこともきっかけで、探して見ると、東工大に社工があると知りました。ここに行ってみようと思って今に至っています。

大学時代、社会工学という分野について学問体系もないし、何を学んでいるのか、自分はどうすればいいのか、と思いながら過ごしました。今もモヤモヤとしているところがありますけど、一番重要だ、ありがたいと思うのは社会問題を幅広く捉えようとする姿勢です。専門分野のことだけ、建築のことだけ、デザインのことだけ、不動産のことだけでなく、幅広くまず捉える視座を持たなきゃならんという意識は持った。専門知識はどれだけ身につけているかは分かりませんが、そういうことが大切だという価値観は持たせてもらった。

時代の変わり目、フロンティア・雑草精神で

それから、自分の専門ではない分野の方々をコーディネートするときに、専門でないことは任せればいいが、その勘どころとか、どちらの方向に行くべきなのかだけは外さないようにコーディネートしていく。それに、体系化されていない、前例がないことを、我々は学生時代からめげずにやっているんだという「雑草精神」「開拓精神」、そういうものを悩みながら身に付けさせていただいたのかなと思います。

都市開発の仕事をする、すぐゼネコンの開発で住民の生活がおかしくなるとか、街がおかしくなるとかというアンチ・ゼネコンの話もいろいろ聞きます。私も今再開

発をやっている、横暴だとか言われたりする。ものごとは常にプラスとマイナスがあり、街づくりでいうと、全体の中で、鹿島が取り組むある程度大規模な開発と、それからその周りで鹿島のビジネスではないコンバージョンとか空き家リニューアルだとかの草の根的な動きがある。それを包括してマネジメントしていく行政の建築系、案件によっては道路や河川が絡んでくる土木系、さらに中小企業などの産業をどう育成しようかという経済系の動きまで幅広く関わります。

そういう全体を見渡ししながら、自分は鹿島の社員という看板で、この部分のプレイヤーとなる。だけど周りのこういう人たちの動きをよく理解するし、お互いの違いと、連携できる部分とを理解しながら、コミュニケーションをとりながら一緒にやっというよと動くことが大切だと思います。

こういう社員は鹿島の中でもなかなか少ない。だけど、社工を出ていろいろな経験をした人間の中から、数パーセントでいいからそういう人間が鹿島の中にも居、行政の中にも居、草の根的な街づくり活動をされているコンサルの方も居、デベロッパーにも居、いろんなセクターにそういう価値観が共有できる人があちこちに育ってくると、そこで一つまた大きな動きがじわじわとできてくるのではないかな、そういうことが大切さだとすごく感じています。

いま丁度、時代の変わり目です。都市の世界で言うと、高度成長期にはどんどん拡大していく都市開発がテーマだったのだけれども、これからはそうでない人口減少の話もある。だからコンパクト化していかないといけないだとか、あるいは高齢化が進

む、医療費が増大するからそれにあったような都市計画を誘導していくような政策をつくっていかねばいけないだとかの話がある。全世界を見渡してもなかなか前例が少なく、それぞれが試行錯誤しながらやっていかねばいけないというまさしくいまフロンティアにいます。他のテーマでもフロンティアに皆様いろんな業界で接していると思いますけど、まさしくフロンティア精神をもって幅広い視野を持った、負けない雑草のようにやっていく人間が増えていかないといけないし、これからも必要だと思います。

社会工学科という看板がなくなっても、そういうスピリットがどこかに綿々と受け継がれるような運営を大学にもしてもらいたいし、我々OBもそういうことを共有する集団がいるということを失わないように、社工会を失わないようにしたいという思いです。

ジェネラリストとしてかスペシャリストとしてか

角田：西村さんの関連で聞いておきたい方いらっしゃいますか？

会場から高橋元美さん（71卒、73M・阿



部研）の要旨：ジェネラリストとスペシャリストという言葉がある。西村さんは、ジェネラリストの仕事を最初からされていたように聞こえた。一般に社工の卒業生は、ジェネラリストとして入社しても会社としては意外と使いにくく、このため多くの社工の卒業生は、それぞれの専門分野に入っていく人が多い。根っこは社工だが、表に出ているところは社工でなくて、それぞれの会社の専門職に入っていく。鹿島の場合には、ジェネラリストが若いときでも活躍の場はあるのだろうか？

西村：ご指摘の通り、私は社内的には再開発だとか不動産関係、その分野のスペシャリストの位置付けになるでしょうね。ただ、その都市開発のスペシャリストは幅が広いんです。一応会社の中では開発系のスペシャリストとして入っております。当然、薄く広くだけだと能力があるとは到底言えません。でも、そういう視野を持たなきゃという意識を持ったスペシャリストになっていけば、その道でプロジェクトをやるうとすると、ジェネラリストにならないとそのプロジェクトが回らないという経験をします。これはOJTみたいなものでしょうか。そういう意識を持ってジェネラリストになっていくか、いやもうスペシャリストでいいよ、不動産取引だけしていればいいよ、マンション屋でいいんだよっていう意識なのとで、自ずと変わってくるかなという心得次第だと思います。

角田：今のご質問、社工の卒業生で多くの人が体験したことではないかなと思います。小林さんも今の質問のことでありますか？

小林：私、公務員なものですから、役所の場合はまたちょっと違うのかなという気がしております。東京都には新規採用や経験者採用が配属される局が20ぐらいあり、ほとんどが出先の現場勤務になります。そこに配属されて、学校で学んだことはすぐ役立つかっていうと、これはかなり違うと思います。さっき現場主義ということを行いましたけど、それぞれの行政にそれぞれの現場があります。現場を知るということは、知識としての制度や仕組みだけではなく、住民を知り、業界や区市町村など関係団体を知ることです。意見は違っても、ステークホルダーに自分を認めてもらうことにも繋がります。そういったことを積んできた上で、段々その分野の行政におけるスペシャリストになっていくということです。

ただ、昇進面を考えると、東京都の場合、管理職試験があつて管理職になるにはその試験に受からなくてはなりません。管理職になれば責任はありますが、活躍の場は大きく広がると思います。

スペシャリストとジェネラリストの議論から少し離れてしまうかもしれませんが、行政は総合力で勝負します。例えばいま難しい問題で豊洲市場の問題がございますね。こういうことをやっていくのに市場の経験者、それから、その技術屋さんであれば、建設とか都市整備とかの専門家をあの中に送り込んで、よりそこを強力にして行く。そういうことで行政は解決しようとしています。それに加えて事務屋からも、例えば市場会計（公営企業会計）の分野で、あるいは土壌や汚染には環境政策の分野など、スペシャリストを集めて総合力を発揮させようということは重要な課題によくあ

ります。

そのステークホルダー、関係者は非常に多いものですから、そのことを知った上でないとなかなか理屈だけの世界ではいけない。相手にも自分を認めてもらうということで、初めていろんな合意形成ができますから。この政策にはこの人間を起用しようということは、昔に比べて今のほうが遥かに出来上がっているというのが実態だと思います。

角田：国際組織に勤めている本田さんの立場ではいかがでしょうか？

本田：国際機関も割と役所に似たところはあると思います。ただ、国際機関の場合は新卒の人を採らないので、最初からある程度、私はファイナンシャルスペシャリストですとか、私はエコノミストですとか…。私はアーバンデベロップメントスペシャリストですけども、ある程度専門性というカタグ付けされた人が入ってくるという感じになっています。

バブルがはじけ、リーマンショックを経験するなかで —中田さん

角田：それでは中田さんお待たせいたしました。よろしく申し上げます。

中田康之：今日は諸先輩方を前にこういう機会をいただきまして本当にありがとうございます。この機会に私なりに自分の仕事を振り返ってみて、すごくいい機会になったと考えております。

自己紹介させていただきますと、私が勤めておりますのは日本政策投資銀行、以前は日本開発銀行という政府系の金融機関で、政府の政策を実行する実働部隊として

仕事をしております。

それが行政改革の動きの中で政府系金融機関改革があり、いまは政府の100%出資ではありますが、株式会社に組織形態を変えた形になっております。組織も変りましたし、私自身の考え方も変ってきており、そのあたりをご紹介しながら社工で学んだことは何だったのか、お話ししたい思っております。

まず、入学前皆さんは何になりかっただですか。私は建築家になりたくて、カッコいいデザイナーになりたいなど。だから建築学科志望。入学前から社工をイメージされている同級生がいてびっくりしました。社工に入って、将来、何になりたいのだろうと。ところが、皆さん共感していただける方も多いと思うのですが、6類に入学すると図学の授業がありました。図学、これが全く分からなかったですね。今でしたらCADとかありますから何とかならんんじゃないかと思いますが、当時の図学の授業が全く分からず、空間把握能力のなさを痛感し、一つ大きな挫折をしました。

社工に入りましてカリキュラムの豊富さと多才な先生方、これを本当に強く感じました。分野も広いですし、経済から社会学、それからプランニングまで幅広くありました。入学当初は建築家になって自分がいいと思う空間をつくりたいと思っていたのですが、社工に入ってから、学科の授業、友達との会話を通じてパブリック・マインドっていうものが非常に重要なんだってことを学びまして、そういう仕事をしてみたいと思いました。

私は渡邊貴介先生の研究室に所属しリゾートとか地域開発とか研究しており、そう

いうプロジェクトに携われる、まさに西村さんのようなお仕事ができたらいいなあと思っていたのです。が、私が就職を迎えた1993（平成5）年、学部から大学院に進んだ1995（平成7）年の頃は丁度バブルが弾けておりまして、就職活動が厳しい時期にありました。当時、ハウステンボスとか、シーガイアとか、スペイン村とか、いわゆるハコモノ開発がことごとく破綻をするのを目の当たりにしました。

そのとき思いましたのが、建設しただけではダメなんじゃないか。建設した後も長く利用されるような施設にしていけないと。魅力ある施設でない。地域の最終的な貢献にならないのではないかと思います。至り、考えを変えて、銀行に入ろうと思いました。銀行っていうのは建設して終わりではなくて、建設してから、収益をあげ返済していただくという仕事になりますので、先を見通して建設前にしっかりと収益性を確保できるようプランニングしなければいけない。その判断、ファイナンスのマルかバツかという判断があって初めて事業が進めていける、地域貢献をサポートできるという思いがあったものですから、今の銀行に入行しました。

先ほど、ジェネラリストか、スペシャリ



ストかという話がありましたけども、銀行というところは基本的にはやっぱり皆さんご存知の通りジェネラリストの世界でありまして、いろんな部署を2〜3年で異動するのがベースにあります。私も若い頃はいろんなことを幅広く経験しました。ひとつ私には転機がありまして、国土交通省に出向をする機会があり、市街地再開発事業の補助金を配分する担当をしておりました。そこで、公共性、パブリック・マインド、役所の仕事のやり方、考え方を、2年間、みっちり仕込んでいただきました。公共性の考え方を自分なりに理解できたような気がします。

そのあとの銀行での仕事は、長らく都市開発とか不動産分野のファイナンスを担当したのですが、バブルがはじけた後だったものですから、破綻処理・債権回収の仕事をしばらくしました。大阪に赴任したときには、マイカルとか、大阪府、大阪市の大規模三セクを担当し、銀行が巨額の損失を被りました。それからJAL破綻の処理の担当もやりました。まさに債権回収ということで、収益性の考え方もみっちり経験させていただきました。

そんな経験を踏まえ、新たな不動産プロジェクトに対してご融資のご相談をいただきながら、いいものは融資しますし、そうでないものはこうしたらいいんじゃないですか、ああしたらいいんじゃないですかってなことをお話し事業化に向けたサポートをしておりました。

社工で学んだこととは、やっぱり銀行って文系の人が多いので、圧倒的に数字を見る力とかデータを解析する力、ビジュアルに表現する力とかが格段に違いましたね。

その半面、法律、会計の知識がなくて苦労もしましたけど。

最近、世の中の流れも大きく変わってきています。Jリートが破綻したリーマン・ショックの時、強く感じました。リートはきちんとキャッシュ・フローは生んで事業としては問題ないのに、ファイナンスがつかないことによって資金繰り破綻する、金融機関の理屈である意味、健全なリートが破綻してしまう、リートの業績が悪いから貸さないのではなく、銀行が貸せなくなってリートが破綻する。あらためてファイナンスの重要性、インパクトの大きさを目の当たりにしました。

その後、キャッシュ・フローは生んでいるリートを、これまで発展してきたリート・マーケットを健全にしていこうと、国土交通省、リートのスポンサーであるデベロッパー、金融機関が一体となって、不動産市場安定化ファンドを組成することになりました。関係者と協議を重ね、不動産金融市場マーケットを支えるという仕事をさせていただきました。

この時、パブリック・マインドをしっかりと持って、まさに社工っぽい仕事だなとすごく思いまして、社工のときの気持ちを思い出した、そんな気持ちで今も仕事をさせていただいております。

社工のときに学んだいろんな幅広い学問分野の、俯瞰する世の中の見方みたいなものが上手く発揮できると良いなと考えております。

角田：はい、中田さんありがとうございます。中田さんが最初に図学が全く不得意だったって言われましたが、図学は悩まされましたね。建築では、あの空間把握をコ

コンパスを使いながら頭の中でパッと描けるようにと、そこで鍛えられるのはすごく大事なんだそうですが、最近は3Dのができちゃったからコンパスでやんなくてもできちゃうらしいですね。社工の人間でも図学が得意な人もいるんですけども、私は悩まされました。それから、隣にいる小林さんも、図学をやってクラブ活動に支障が出るからやめたんですよ。

小林：早々と辞退いたしました。

角田：非常に思い出のあることですけども。では一番最後、5番バッターの白川さんお待ちしました。よろしくどうぞ。

10年、20年後に「社工スピリット」 を伝えていきたい —白川さん

白川慧一：「若手若手」と強調していただき、期待に応えられるかどうか分かりませんが、よろしく願います。最初に経歴だけ申し上げますと、2005年卒業で、実はその後も博士課程にずっといまして、かつその後に助教も2年ほどさせていただきまして、かなりの期間この社工でお世話になったということになります。3年前まで、社工がなくなる直前まで、最後の過程を中にいてみてきた形になります。

今は、土地総合研究所という、昔の国土庁の外郭団体で、土地不動産関係の調査研究業務を担っております。あと、昨年度から東工大の文系教養科目で教養特論都市という授業をやっているところでございます。

まず、最後の社工の姿がどうだったかというところだけ先にお話しますと、丁度私の1、2年あとぐらいから、学生の中で、



いわゆる「空間系」と「経済系」という言葉で呼んでいたんですけども、受ける授業が完全に分離するような形で卒業できるようになったところが始まっています。要するにそれまで、例えば私の時代では、先ほど図学の話もありましたけど、どんなに経済が大好きな人間でも図面を書かなければいけないし、模型をつくらなければいけなかった。それが完全に分離したのが丁度その頃、2000年代初頭ですね。それ以降は、人的交流はそこで分かれていたわけではないんですけども、普段受けている授業は完全に別なので、生活も別になっていた。研究室もそういう形になっていたということです。

皆様ご経歴の話の中で、すでに活動されている諸先輩方ですので、いろいろと活動の話をしていただけたんですけど、私はほとんど外に出ていない状態なので、あまり語れることはございませんけれども、実際皆様これまで仰っていただいたとおり、ジェネラリストとスペシャリストの話がありましたけれども、社工として複眼的ないろんな視点からみるだとか、専門分野の枠に捉われない見方をするだとか、そういう話は当然私の調査研究の話にもありまして、やはり調査研究の世界、特に既存の資料を見る

ときもそう思うのですけれども、他の外部の人たちがつくっているものはどうしても視野が狭い。

具体的な話をしますと、最近一つ困ったことがあったのは、不動産の仲介業ですね。要するに流通の仲介業を調査対象にするという話が出まして、そのときに仲介手数料ってどういうふうに決まっているのか、どう理論的に説明できるのか、ということを探したのです。でも、日本に先行研究はないのですね。日本語だとない。英語だと実はちょっとある。そんな状況なのです。不動産流通は、基本的には経済学の人たちが中心になって研究されていて、分析対象は基本的には価格、ファイナンスの世界でいうと指数ですね。先ほどリートの話も出ましたが、そういうところに使うための指数の研究とかは非常に進んでいる。

けれども、最近週刊誌にも出ましたけれども、今の不動産の世界は不透明ですので、いろいろと叩かれる。どうやって手数料が決まっているか分からないですし、両手仲介という、いわゆる顧客を囲い込んで仲介させてしまう。要するに一生に一回の買い物だから、これでしょうがないだろうと諦めるだろうと、そういう実態もあって非常に不利な立場におかれている。そういうこと自体も問題なわけです。

問題なのだけれども、その問題自身になかなか着目できない。していない。できないのかどうか分かりませんが、ということもあって、私は、社工はなくなっちゃいましたけれども、社工のスピリット、心持ち自体はこれからも持たないと、仕事の中でいままさに私が壁にぶちあたっている形になっていますので、やっていかなけれ

ばいけないなと感じているところがございます。

社工会関係で出会った若手の方から受けた印象というところでは、社工がなくなったこと自体、ある意味ではしょうがないんじゃないかとか、それでいいんじゃないかとか、あるいは社工会自体をこれから残していくってどうなのか、という結構厳しい意見を言われている方も若手の方でいます。結局、何が一番大きなことかということ、この後10年、20年経ったときに、私が「社工出身です」といったときに何処まで通用するかというところでよく分からない部分もあるわけですね。

でも10年、20年後は私とかもまだ現役で活動しているわけですから、そういうときに社工が持っていたスピリットというのがこういうもので、こういう機会を活用して残して、それを次の10年20年後に説明できるというふうになるのがいいのかなど。あるいは実際に行動として見せるということができるといいのかなというふうに思っております。

角田:白川さんから「最後の社工の姿」という言葉が出たときにはドキッととして、実はそうなのかもしれないけど、私は個人的に学科っていう看板がなくなっても「社会工学スピリット」とかね、今日ここにお集まりになっているOBの方々は愛してやまない気持ちがあるから、「最後の姿」と一瞬かもしれないけど、我々とする「今日はここはお通夜でもお葬式の間でもなんでもないんだ」というぐらいの気持ちで進んでいきたいなと思うんです。

会場からの疑問と提案

角田：それでは皆さんに報告をしていただいて、区切りがついたところですけど、今日50人超える方がこのお天気のいい日に大岡山まで足を運んでいただいたのですが、それぞれの方が社工に対する思いみたいなものもあると思います。登壇者に対する質問だけではなくて、感想ご意見などありましたら、それも含めて挙手をしていただいとお話を伺えればと思いますけど、皆さんどうでしょうか？

佐藤年緒会長：きょう欠席されていますが、今期役員で監事の渡辺美衡さんから、これからの社工会への願いについてメッセージをいただいているので会場で配布させてもらいました。皆さんは、ぜひ読んでいただきたいと思います。ここに紹介します。

……………
会場からの質問（越智信夫さん、71卒、熊田研）主旨：社工会の総会に46年ぶりくらいに初めて出てきた。社工の考え方は、ますます重要視されるものと思っていたが、なぜそれが終わってしまったのか、率直な疑問です。私の常識とは真逆の現象が起

私の「ニュー社会学」への期待

渡辺 美衡（監事）（82卒、熊田研）

東工大の社会学学科が50年の歴史を閉じようとしているのに際して、寂しく残念に感じると同時に、大学当局に存続の価値ありと認めてもらえる程には実学としての社会人成果を挙げられなかった卒業生として、責任の一端を負っているようにも感じています。

大学は研究機関としての役割と同時に、教育機関としての役割も担っています。社会学は、まさにその教育を重視した学科であったのではないのでしょうか。インターディシプリナリーを目指すという出自そのものが、研究とは相性が悪かったと思います。社会学学科が評価されるべきは、卒業生一人一人が、いかに個性を發揮して、それぞれのやり方で社会へ貢

献するかであり、論文引用件数や学会での評価ではないと思います。学生だった頃、熊田先生から「君たちはプランナーになるのだ」と指導されていたことを思い出します。社工卒業生を全体として俯瞰したときに、こんなユニークな成果を残している集団だと評価してもらうことが、私にとっては社会学学科卒業生として一番の誇りに繋がると思います。

そこで、ひとつ夢があります。東工大から学科の名称として社会学学科が消えても、その作品である我々から思想であり行動指針でもある社会学学科が消えてしまう訳ではありません。いつか再び大学が教育機関としての役割に目覚め、社会学学科再興の必要性を認識する日が来るまで、それまでの間は細々とでも草の根ネットワークで卒業生が意欲ある後輩へ何がしか自分の伝えられるものを伝えていく、そういった自主活動が続けられないものかと考えました。それが、私の「ニュー社会学」への期待です。



きている。誰か詳しい方、教えてください。
《この質問に対して、出席していた中井検裕・教授が「私なりの印象」として以下のように説明された。》

社会工学はなぜなくなったのか 私なりの解釈

中井検裕教授：第11期生の中井です。いま東工大で教員をしています。80年石原研の卒業で、そのあと修士、博士にいて、途中でやめて海外で5年ぐらい過ごし、94年に大学に戻って25年ぐらいになります。

なぜ社工がなくなってしまったかという話は、やり始めるととても大変で、また人によって多分解釈が違おうと思うので、私なりの解釈をお話させていただきます。

まず背景として、大学はどういう組織であるべきかが、この十年ぐらい、特に国立大学が国立大学法人の形になって、自主・独立性とか、それぞれの特徴をどう出していくかを求められたときに、相当シビアな議論を各大学がやらなければいけなくなったと思います。

そのときに大学は研究と教育という二本柱、プラス社会貢献、国際貢献があるわけですが、やはり研究と教育が大学の二本柱であることは間違いない。では、そのとき研究でどういうことができるか、それから教育ではどういう人を育てることができるかという、この二つが大学に問われたと思います。

東工大もそういう大きな波の中でいろいろな議論が当然あって、そのときに、では研究で大学としてどこが頑張れるかっていうことがありました。



今日配布された社社会監事の渡辺美衡さんの文章にも書いてありましたけれども、もともとインターディシプリナリーなところは、研究はあんまり頑張れないのですね。簡単に言えば、例えば世界レベルのアカデミックジャーナルにどれだけ論文が出されているかが基本的には指標になるので、そういう面ではどうしても弱くなってしまふ。これはしょうがない。これは社工以外の学際的なところは同様です。無くなったのは社工だけでなく、もともと45あった専攻は再編で19まで減りました。例えば、すずかけ台の方は完全にガラガラボンなどで、すずかけ台で学んでいた人は帰るところが基本的にはないという状況なんですね。

研究の方では、社工は大変ユニークではあるけれど、ユニークだけだとなかなか外からの評価が追いついてこない。現場で活躍されている方や、私もそうですけど現場指向型の研究をしている人は、かなり沢山いる。そういうことは理工系の大学では、やはり評価は低くならざるを得ない。これが一つです。

もう一つは教育です。教育は、私は今日たまたま前にいる5人はよく知っている方々ですけれども、社会でプロジェクトのマネージャーとか、そういう形で活躍されている方がとても多い。これは社工の特徴で、

そういう意味では卒業生が非常にユニークな集団であるという認識は大学として当然あるわけです。しかしながら、それを教育としてそういう学生たちを出してきたかを問われたときに、やはり社工はなかなか応えられにくかったというか、応えられなかったのです。

なぜか。私もそうですが、皆さん、今日、「社会学で薫陶を受けた」と言われましたけど、私なんか先生から知識を直接教えてもらった記憶なんてあんまりないですね。で、皆さんも多分自分の中に元々持っていたものを、たまたま社工の中で得られたことをヒントにされながら、社会の中で大きくされてきたっていうのが、ほとんど実態ではないかと思います。そういうことからいうと、先生からの薫陶は確かに受けていますけれども、体系的な教育が社工はあまりできてなかったと思います。

教育は、やはり大学で学科を持っている限りは、ある意味体系的にできていないと評価が低くなる。それは当たり前で、出ていった人が優秀だったから教育が良かったというようにはなかなかならない。私も社会学の教員でしたので責任はある訳ですけども、体系的な社会学という教育をなかなかつくり上げられなかった。例えば都市計画だったらつくれたかもしれないし、環境工学だったらつくれたかもしれないけど、社会学っていうことでやると、教育の体系ができなかったというのが僕の評価です。

いまの大学には体系的な教育をどうするのか非常に問われていて、体系的な教育がしにくいこうした学際的なところは今回の教育改革で大きくばっさりとなくなっ

た。で、残ったのはかなり古典的な体系教育があるところ。そこはきっちり残って、全部で大学院に社会学専攻あわせて45専攻あったのが、いま19かな、そこまで結局減らしたわけです。そこが大きな流れの中で、社工がこういう形で、少なくとも名前はなくならないということになったというのが私の解釈です。

同窓会の役割はより大きくなっている

力不足だったことは確かなので、批判は甘んじて受けたいですけれども、社工会へのお願いは、自分もメンバーだから「今後の社工会」ということで言うと、学科はなくなるし、教育はそういう意味では社会学の教育体系はなくなるのだけど、大学としてこういった人材へのニーズは依然としてもものすごく高いんです。それは間違いなしだと思います。ですから、実際に社会に出たらみんな蛸壺型の中でやっても、社工的なところに直面するわけですよ。そのときに社工会のようなところとネットワークを繋ぎながら、東工大の卒業生のそういう人たちを助けてあげるとというのが、私は社工会の非常に大きい役割だと思っています。

卒業生はこのあといくら待っていても入ってこないから、社工会に自己再生産能力はないけれど、他が生産したものを社工会として取り込んでいくことを是非考えていけばいいのではないかな。そういう意味では、例えば同窓会の中で社工会は蔵前の理事でご活躍の方もたくさんいらっしゃるから、結構大きな一勢力なのです。だから、学科がなくなっても同窓会がなくなる必要はなくて、むしろ同窓会の中の役割はより

大きくなっている、学科がないだけに、より大きくなっていると考えた方が、同窓会としてはいいのではないかと思っている次第です。勝手を申し上げて申し訳ありません。以上です。

角田：はい、中井先生、ありがとうございますました。

会場からの意見

《このあと、会場から越智さんと高橋章さんが発言する。》

越智：中井さんが言ったように、OBが実務でやっていく中で日々ぶち当たっている問題を集めて、ある程度のノウハウにしていくことが、ものすごく重要。科目がどうだとか、専門知識がどうだとかいう問題ではなくて、何を原理にして考えるかということからをもう一度考え直す。それに向けての意見の交換をしていくのがよい。

高橋章さん（73卒、鈴木忠義研）：以前、内田和夫君（70年卒、鈴木光男研）が中心になって新橋で「二水会」という月一回の集まりをやっていた。蔵前工業会の談話室を使って二水会を復活させる形で、「そこに行ったらいろんな話ができるよ」ということをやり始めたらどうか。私の出身校で福岡の修猷館の卒業生は学生会館で月一集まっている。昭和22年くらいから延々と年10回。そういうディスカッションの場を作るのを提案します。80代くらいの蔵前OBもずっと活動やっている。簡単な話などで検討をお願いしたい。

■登壇者からのメッセージ

角田：ありがとうございますました。会場からも意見、提言もいただきました。時間はあと残り5分。折角並んだんですから、また

登壇者からひと言ずつ頂いてそれで締めくくりにしましょうか。それでは、改めて小林さんのほうからよろしく申し上げます。

小林：社工での思い出は強いものがあると思います。自分でも社工はどうしてなくなってしまったのか、今中井先生の話聞いて、なるほどなという気がしました。ただ、このなんといいか、良い言葉が見当たらないんですけど、こういったDNAをどう残していくのか、どう継承していくのかということは非常に重要なことだと思っています。卒業して考えてみると、確かに勉強はしなかった、きちんと教えてもらっていなかったといわれて、学問体系として発展途上で確立していなかった社工には確かにそうした面があったかもしれないけど、やっぱり華山研に入って、先生から現場主義は非常に重要なんだと教えられた。

私は市街化区域農地の宅地並み課税が当時卒論テーマだったので、何百軒かの農家を歩き、抵抗感もある人（農家）も一杯いたと思うんですけど、そういうことをやらせていただいたことは、私にもDNAがあるとしたらそのひとつだと思っています。何らかの形で社工的なものが、メンバーが限られてくる世代かもしれないですけど、残っていくことに貢献したいと思いますし、またいろんなディスカッションを経て、これからも価値を高められる可能性はあると思いますので、改めてそういった意味で、社工を考え直して、皆さんと共にやっていきたいと思っています。ありがとうございました。

本田：社工がなくなっても、私の関連でいうと国際開発の学科はあるようですし、国

際開発のことをやってるサークルもあるようなので、そういうところを通じて経験をシェアできたらいいなと思います。特に国際機関って文科系の人が多くて国際関係論をやっていたとか、経済とかの人が多くって、エンジニアが非常に少ないので、もっと増えたらと思っています。どこの国際機関でも、日本はお金の割に人がまだ少ないので、もっと増えて欲しいなと思います。

西村：私も卒業以来社工会とは全然縁がありませんでした。去年社工がなくなるというんで初めて総会に出て、今回が2回目です。中井先生からお話がありましたけれども、社工会が社工を卒業したという肩書きだけの集まりではなくて、一番大切なのはこれからそういうDNAをもった人たちが集まる会であるべきだ。そういう意味では今話があったように、社工でなくても、そういったDNAを持つべき分野の、持てる人が集まれるようなプラットフォームが必要だと思います。だから、齋藤先生も十代田先生もここにいらっしゃいますけども、建築だとか土木とかあるけれども、逆に、そういうDNAをもつ人が新しい括（くく）りに移られて、新しい社工がいくつもの分野にできつつあるんだなと思いますので、これから他とどう繋がるかという前向きなイメージを持ちたいと思います。

中田：私からは若い方に申し上げたいのは、人とのつながりは大事にして欲しいということです。私は銀行に入って、デベロッパーやゼネコンとは違う世界に入ったつもりだったんですけど、今は不動産金融という世界で、いつのまにか繋がってくる。社工というつながりがいつか、いつのまにかつながってくることもあると思います。そん

な機会は必ずありますので、幅広く頑張っ
て欲しいなと思います。

白川：とにかく全ての話を聞いて思ったのは、本当にみなさんいろいろ考えていることが違うので、こういう会がないとそれがわからないというのがわかりました。すみません。私の責任もあると思いますが、なかなか参加が呼び込めなくて、多分これは若手が来てくれたらまた違った意見が出てくると思うので、そういう機会をどういうふうにつくっていくかというのを考えなくてはいけないのかというのが今日の感想です。

角田：ありがとうございます。いつも司会進行をするときに、「思う存分話して気持ちよく帰ってもらおう」と心掛けているのですが、「思う存分」という時間は取りきれなかったかもしれませんが、社工が今に至った現状についても、大学の中井先生からお話もいただきましたし、また、こういう機会を持つことを考えつつ、このディスカッションを締めたいと思います。5人の参加者に改めて拍手を送っていただきたいと思います。

きょうは会場に61人の方がお集まりになった。新聞・テレビで広報したわけではないんですけど、志のある方がこれだけいる。あとは西村さんの話にもありましたが、ミッション、伝えるという気持ちを持っていく。高橋章さんからも学生会館で行っている高校同窓会の話も出ましたけれど、そういうことを続けていって新たな展開へ繋がりたいと思います。2時間にわたりましたディスカッション、これにてお開きということにいたします。どうもありがとうございました。

「お帰りなさい」。笑顔とVサインとともに

「きょうは『お帰りなさい』といった看板が学内に出てます。久しぶりにキャンパスに戻られ、どんな思いでしょうか。時計台や桜、イチョウ並木、スロープに思い出が多いと思います。『社会学』という実家の玄関はなくなるということです」とあいさつした佐藤会長。2017年5月20日、快晴の土曜日。「ホーム・カミングデー」に合わせて開いた社工会総会前のディスカッション「ニュー社会学への道」。この春からは社工に進級する学部生はゼロとなる「廃科」の知らせに、何十年ぶりに母校に駆け付けた社工OBの姿も目立った。

第50期生が卒業する2019年3月に「社会学」の看板が下ろされる。1970年に第1期生以来およそ2500人が巣立った。国内外で活躍している卒業生たち。この日もアジア開発銀行の本部があるマニラから本田恵理さんが駆けつけた。私たちの財政事情を知ってか、東京に「何かの出張仕事」をつくって飛んできてくれたのである。「お帰りなさい!」。



海外での開発の仕事といえば、2016年度の社工会役員最初の任務は、7月1日にバングラディッシュで起きたテロ事件への対応だった。つまり、その犠牲となった7人の日本人の1人は大学院社会学専攻のOGで、民間開発会社の社員、下平瑠衣さん（当時27歳）であった。事件の衝撃性に戸惑いつつも、彼女が所属していた土肥真人教授の研究室を通して同窓会として弔意を表した。

ディスカッションの前に土肥先生があいさつに立った。「私たち、当時、身も心もボロボロでしたけれども、その際に社工会のみなさまの御心をいただいて、少しだけ癒やされたように

思います」と。土肥先生によると、タイの小規模スラムに直接入っての現地調査や丁寧なヒアリングなどを踏まえた下平さんの修士論文は圧巻だった。タイでできた多くの友人に協力してもらい、住民にはまるで娘のように愛されたという。

「太陽のような、ヒマワリのような笑顔しか思い出せない素敵なお学生、女性でした。下平さんのタイでの研究や多くの活動の結果は、宿題として私の研究室に残されています」。彼女を連れ去った世界の歪みを正す使命を与えられたという土肥先生。「いつの日か僕の研究室の関係者もこの宿題を果たしたい。その際は社工会

のみなさまにもご協力をお願いします」。

社工会事務局長の十代田朗准教授は「痛ましいこのような事件は起こってはいけないが、このことを大切に私たちが生きていかななくてはならない」と話した。ディスカッ



ションの司会進行役、角田光男さんは、50ccのバイクに乗って後ろを向いてVサインをしている下平さんの最後の写真を見て、「あれは東工大の社工の同窓生、同士たち、それからもっともっと多くの世界の子供たち、大人たちに対するVサインなんじゃないかなと思いました」と彼女の遺志を推しはかった。

「途上国での問題解決に向かって飛び込んでいる後輩が何人もいます。同窓会とは恩師を偲び、懐かしく再開する仲間の集いの場であるだけでなく、やはり若い人たちに、何らかの形で応援していく場だと突きつけられました。きょうの集いによって、新しい社会学、卒業生が本当に帰ってくるができる同窓会を考えるきっかけになれば」と、佐藤会長はこの日の成果に期待を寄せた。（編集担当）

「ニュー社会工学への道（続）」

2017年の総会時に行ったディスカッション「ニュー社会工学への道」の続編として、2018年も各分野で活躍されている4人をお招きした。社工で学んだことやこれからの社会工学または同窓会への期待について、ざっくばらんに話をいただき、会場の参加者と意見交換を行った。司会は、昨年パネラーとして登壇し、現在社会会拡大役員会メンバーの西村真さん。



日時：2018年5月26日（土）総会後
場所：東工大西9号館933教室

【登壇者（年次順）】

室田 哲男 氏（82卒、84M・華山研/総務省、防災・危機管理）

水野 雅男 氏（83卒、85M・渡邊貴介研/法政大、住民主体のまちづくり）

松本 香澄 氏（88卒、肥田野研/東京都、都市開発・インフラ整備）

長田 啓 氏（95卒、堀研/環境省、自然環境保全）

【司会】

西村 真 氏（84卒、86M・渡邊貴介研 / 鹿島建設、都市開発・地域開発）

face to faceで聞き、話す機会に —司会の西村さん

西村真：西村です。よろしくお願ひします。総会では、次の活動をどうやればいいのか？「社工フォーラム」というような考え方についても佐藤会長から話がございました。私も社会工学科が無くなると聞いた2年前にこの社会会総会に初めて出て、1年前に声をかけられ企画メンバーの一人に加わっています。それまでは卒業以来30年ぐらい、社会会の活動にはほとんど縁がなかったのですが、無くなると聞いてからにわかに、

「社会会に2000人のOB、学生がいて、この人材は宝だ、その経験は宝だ」、「その火種、その宝、財産を生かすも殺すも、これからのわれわれ自身の意識次第、工夫次第だ」、



そして「社工の我々のメンバーが、何をやってきて何を思っているかを、一回でも一人でも多く、face to faceで話を聞き、話をし、という機会を作るというのが基本で、それが全てかもしれない」と思っております。今日はそれぞれの方のご経験なども踏まえながらお話をいただいて、それを元に皆さんとの間でも意見交換ができればいい、今日は短くてもこういうことが次回、また皆さんと会える場につながり、いろいろな活動につながっていけばいいとの思いです。

では、最初に室田さんから順番によろしくお願いいたします。

自治体の防災危機管理の体制見直し — 総務省・室田さん

室田哲男：総務省の室田と申します。私は1982年に学部、そして1984年に修士を修了し、その年に旧自治省、現在の総務省に入省いたしました。当時華山研究室で地方財政の統計分析を研究テーマとしていた関係で、旧自治省を志望しました。今年で役人生活も35年目になりましたが、約半分は地方勤務で、茨城県庁、富山県庁、福岡県庁、そして昨年の7月まで広島市の副市長をやっておりました。残り半分の17年間は旧自治省、総務省それに国土交通省等で、霞ヶ関勤務をやっております。今日は、主に霞ヶ関勤務の話をさせていただきたいと思っております。

旧自治省というのは霞ヶ関の中では制度官庁、制度を守っている官庁として、理科系出身の私も、ほとんどのポストで法学部出身者と同様に法律や制度作りに関わって参りました。霞ヶ関勤務のうち前半は、地

方自治財政制度の企画立案をずっとやっておりまして、特に地方財政制度、地方分権、あるいは平成の市町村合併等に関わって参りました。そして後半の10年間は、ほぼ防災危機管理の仕事になっています。

防災関係の仕事は、10年ほど前に国土交通省河川局水政課に出向した時が最初でした。水政課というのは、河川法をはじめとする河川局内の法令を所管するところです。当時、河川法あるいは土砂災害防止法といった法律の改正作業に従事いたしました。その後、総務省地域政策課に戻りまして、第二回のOB&OG懇話会で地域おこし協力隊の方の話がありましたけど、そういった地域おこし協力隊等の地域振興政策の制度設計や、各地の地域づくりのお手伝いをしていましたが、その地域政策課在職中に3.11東日本大震災が起きました。

東日本大震災は甚大な被害をもたらし、沿岸の市町村では、庁舎が倒壊する、職員の多くが被災する、そして住民データが流出するなど、ヒト・モノ・情報全てを失ってしまいました。市町村は被災者支援の拠点でもあり、また復旧復興の中心になければならないということを考えますと、まずは市町村の行政機能の回復が先決問題だということになり、総務省内の行政機能回復



のための支援策の取りまとめに従事しました。その後、総務省消防庁に異動し、消防庁の防災対策を総括する立場になりました。その時には、例えば伊豆大島の土砂災害、広島の高雨災害、御嶽山の噴火災害等の応急対策を指揮しました。また、これらの災害を教訓に市町村の危機管理体制の強化あるいは地域防災力の強化等に取り組みました。

その後、平成27年の7月に広島市副市長に就任しました。副市長として幅広い分野を担当しましたが、防災危機管理も担当の一つでした。私が行った前年の平成26年に広島土砂災害が起きており、それを教訓に危機管理体制の大幅な見直しをしました。昨年の7月から東京に戻ってきております。

そのような経験を基に、会場でチラシを配らせていただいています。『自治体の災害初動対応』という本を今年3月に出版いたしました。もしご興味のある方はご覧になっていただきたいと思います。

以上が、これまでの34年間どういう仕事をしてきたかということでもありますけれども、次にこれまでやってきた仕事と社会工学の関わりについて少しお話をしたいと思います。

現場主義の帰納法的なアプローチ

まず地方自治制度というのは、当然地方自治の現場にかかわる制度ではありますが、一方で国の統治機構のあり方にかかわる制度でもあります。憲法に規定される地方自治の本旨を実現するという、まずはそういった理念哲学から出発して、それを現

実の社会の動きに合わせて制度を変えていくということで、まず哲学から出発する。どちらかといえば、演繹法的なアプローチで議論がなされます。

他方、社会工学というのは、私の解釈では現場から出発した帰納法的なアプローチが主体ではないかと思っています。特に私の恩師である華山先生は、徹底的な現場主義を唱えられておりました。そういった意味で、地方自治制度の立案と社会工学の手法というのは全くアプローチ方法が間逆でありますので、地方自治制度の議論に社会工学的発想を入れるのは非常に難しかったというのが正直な感想です。

一方、後半ずっと関わっている防災危機管理につきましては、現実にかかる災害にどう対応して、いかに被害を少なくしていくかということでもありますので、まさに現場主義です。防災制度も大災害が起こるたびに、その経験や教訓を踏まえて改正され、充実強化されてきています。例えば、災害対策の基本になる「災害対策基本法」は昭和34年の伊勢湾台風を契機に昭和36年に制定され、平成7年の阪神淡路大震災、そして平成23年の東日本大震災、そういった大災害を経るたびに改正され、現在に至っております。まさに帰納法的なアプローチで制度が作られておまして、社会工学的な発想が入れやすいのではないかと個人的には考えております。

もう一つ、防災減災対策というのはハード対策とソフト対策の組み合わせ、ポリシーミックスであります。災害から命を守るためにはどうするか？ 一つは防潮堤とかダムとか、防災施設の整備、すなわちハード対策であります。それで十分でない場合

にはソフト対策として、例えば土地利用規制をして危険な所に住まない、そして災害時には逃げる、もし逃げ遅れたら救助する。そういったハード対策とソフト対策の組み合わせであります。今後の防災対策を考えると、個々の対策を強化するだけではなくて、ハードとソフトの対策をどう組み合わせるかということを、国家レベル、地方レベルでも考えていかなければならないと考えております。

例えば、東日本大震災のような千年に一度ともいわれるこの大津波、最大クラスの津波が来た場合に、それを防潮堤のみで防ぐというのは不可能です。巨大な防潮堤を作ってもまだ防ぎきれない。しかもそういった巨大な防潮堤をつくると海と人間の生活が分断され、環境にも影響があるということもあり、現実的ではない。ではどうするかというと、やはりソフト対策でやらなければならない。その場合の最大の鍵は避難対策ではないかと思っておりますが、実際に人に逃げてもらおうというのは非常に難しいです。

そこを考えていくというのがこれからの課題ではありますけども、考えるに当たってやはり社会工学的な発想、学際的な発想というのが非常に大事になってくるということで、社会学を生かす道が非常に大きいのではないかと考えております。役人生活も残り短くなりましたけれども、これからは南海トラフ巨大地震、スーパー台風、富士山大噴火等の巨大災害、NHKではメガディザスターと言っていますが、これらにどう備えるか今後も考えていきたいと思っておりますし、また防災危機管理人材の育成に関わっていきたいと考えております。

す。その際には、現場主義の帰納法的なアプローチ、そして学際的な発想を持って取り組んでいきたいと思っております。

ただ、これまで社会学について語ってきましたが、実は社会学は何かということも自分でも本質的に理解しているかどうかあまり自信がありません。社会学というのは学問分野なのか、あるいは思想なのか、あるいはツールなのか、その辺を考えてみると自分でも正面から定義づけができないという状況です。先ほど佐藤会長から社会学フォーラムという提案がありました。私もそういったフォーラム等で社会学は何かということを追求していきたいと思っておりますし、またみなさんがどういう風に活かしているのかということも勉強させていただければと思っております。

個人的にどういうことをやりたいかといいますと、例えば災害の分野では群馬大学に災害社会学研究室というところがあり、立派な成果を上げておられます。学科は無くても社会学を冠している研究室などが全国にどれだけあるのかは分かりませんが、災害社会学などの先生方と意見交換してみたいと考えております。私からは以上です。

西村：有難うございます。水野さん、よろしく申し上げます。

「まちづくりの市民活動家」を自認 —法政大・水野さん

水野雅男：室田君と入学は同期ですが、学部で一年間余分に学費を払ったので、卒業は一年遅れました。渡邊貴介先生の研究室

を卒業しました。現在は法政大学の教員になっていますが、教員というよりもまちづくりの市民活動家と言った方が自分自身しっくり来ます。

私は今の仕事が5つ目になります。最初、小さなコンサルタントを2カ所経て、34歳で会社を辞め、地元の金沢に戻り、水野雅男地域計画事務所というコンサルタント会社を起ち上げました。そのときに作った名刺がこれです。四角と丸と三角の穴が開いています。これは、地域それぞれの資源を活かして地域に新しい風を吹き込もうという意味のオリジナルロゴです。計画書を積み上げていだけじゃむなし、やっぱり街を動かさなきゃ面白くないってことで、新たなプランナーを目指す意味合いを込めてあります。今もその型抜きを使っていて、現在は大学教員ですが、気持ちは同じです。街を動かしていくことをやりたい。

本日のパネリスト4人の中で私だけが役人ではなくて「市民の立場」で街を動かそうとしています。コンサルタントに勤めていたときは、クライアントの役所からの委託業務で調査して計画を作ることに取り組んでいたのですが、「市民が主体に動かないと本物ではない」と感じるようになりました。仕事は転々としましたが、歴史的な建造物あるいは空間をどう保全していくか、そしてそれをどう活用していくかということに一貫して取り組めたのがラッキーだったなと思います。

この場に出ることになり、社会工学科で学んだことはどういうふうに使われているのかということ振り返ってみました。私は鈴木忠義先生の研究室に入ろうとした



時に先生が東京農大に移られたので、渡邊貴介先生に教えを請うことになりました。鈴木先生も渡邊先生も、『研究室に籠もっていないで、現場に行きなさい、街に出なさい』ということをお口酸っぱく言われてました。資料室で文献見るよりも、街に課題が転がっているということです。教員となった今でも、教室で講義するよりも、学生と一緒に、あるいは自分一人で街に出て調査をしている方がずっと楽しいです。卒業後30年間ずっと、フィールドにはどういう資源があるのか、どういう課題があるのかということをお把握して、解決方策を導き出すことに取り組んできました。

まちづくりというのは時間がかかります。最初に取り組んだまちづくり活動は、金沢市大野町、江戸時代から醤油の産地として栄えた街で、町内に点在する遊休化した醤油蔵を修復しカフェやアトリエとして活用するものです。96年から活動を始め、20年余り続いています。最初の10年間主宰者として取り組みました。行政主導でなく市民主体で進めた活動は当時先駆的だったため、2004年に地域づくり総務大臣表彰をいただきました。

災害に関連したまちづくり活動は、2007年に発生した能登半島地震直後に始めまし

た。以前から輪島のまちづくりに関わっていたので、被災した現場へ入ってボランティア活動を始めてみると、土蔵がどんどん取り壊されている状況を目の当たりにしました。住宅の再建については国の手厚い支援制度があるものの、住宅以外の土蔵などに対しては一切支援の制度が無く、逆に取り壊すために税金を使えるという、矛盾した制度があります。そのために輪島市だけで1年間に約600棟の土蔵が解体されてしまいました。土蔵が無くなり景観が壊れるということ以上に、土蔵の中で地酒とか輪島塗を仕上げている、地場産業の根幹が揺らぐという危機感がありました。それでNPO法人を創設し、全国の左官職人に呼びかけて、土蔵の修復活動を10年近く取り組みました。この活動は、ティファニー財団から伝統文化振興賞を受賞しました。

金沢で地域資源と技術の 伝承活動を続ける

京町家が有名ですが、金沢にも町家が6千軒あまりあります。年間100軒近く消滅している状況に危機感を覚えて、NPO法人金澤町家研究会を設立し現状調査と啓発事業に取り組んでいます。さらに、設計技術者、大工、左官などの職人の修復の仕事を創り出すためのLLP(有限責任事業組合)金澤町家を組織したりして、建築技術を伝承し活用していく活動を続けています。

3つの市民活動を紹介しましたが、いずれも現場で「何が課題か、どう地域資源を活用したらいいのか」ということ見つけ、将来ビジョンやプロジェクトをプランニングして、市民主体で活動をマネジメントす

ることをしてきました。今振り返ると、社会工学科で学んだことが活かされているんじゃないかなと思います。

そして、大学の教員になる前、46歳のときに社会人向けの博士課程(ノンプロフィットマネジメントコース)が開設された時に、一期生として招いていただき、毎週土曜日に金沢から大岡山に通いました。途中、先述した震災復興活動に専念し、研究活動は途絶えてしまいました。現地調査で収集したデータを基に、10年かけて博士論文にまとめることができました。私みたいな研究者としては傍流にいるような者でも、引き上げてもらったことも社会工学科のありがたみと感じております。

現在、八王子市に住んでいますが、金沢の市民活動を続けており通っています。金沢には社会工学科を卒業し大学で仕事をしている仲間が私も含め4人もいます。後輩達からとても良い刺激を受けられます。そのようなネットワークの意義を感じており、今後の社会工学フォーラムにすぐ期待しています。

西村：水野さん、有難うございました。では次、松本さんよろしくお願いします。

まちづくり事業にどっぷり、 体験重ねる 一都庁の松本さん

松本香澄：東京都都市整備局市街地整備部企画課長をしております松本です。室田様も水野様も面識が全然ない状態でしたが、今日お話を伺って仕事上でたくさんお聞きしたいことが出てきたので、ここに来て良かったなと思っています。長田さんは環境

の方でいらっしゃるから、この4人のメンバーでまちづくりの勉強会ができるなと思っていました。

東京都の都市整備局の中には、交通の分野やまちづくりの分野などいろいろありますが、私自身は市街地整備部というところで区画整備事業や再開発事業等の事業をやっていく部署で課長をやらせていただいています。今年の4月に異動したばかりで、管轄範囲の中には事前復興の復興訓練も担当しておりますし、まちづくりを地元に入って東京都の立場で区市町村の背中を押ししながらどこまで応援ができるか、そのつなぎで国から金を引き出せるかみたいなことをやらせていただいています。私自身は地方公務員ですし、女子枠というところもあるので、経歴をお話することで、皆様の部下の女性や仲間うちで参考になればと思います、参加させていただきました。

公務員としては幸いなことに、希望していた都市計画局に配属してもらえました。就職前には、一年前の社工会ディスカッションで登壇された小林清さんが東京都庁の先輩でいらしたので、私は小林さんのところへ都庁の話の伺いに行き、都庁へのイメージを作りながら入庁しました。幸い、私の後に社会工学科から都庁に入った人間が20人ぐらいいます。都庁の中では、東工大という塊で同窓会活動を少しずつはしていますが、まだ社工会としては立ち上がってないので、若い職員の背中を押しがいかなきゃいけないかなというところなんです。

都庁での最初の仕事は区画整備の許認可。それから事務所に出て開発行為の許認可のところに行きました。昇格していくにつれて、部署が変わるため、水道局にも異動



しました。その中でも統計の知識を活かせるような水需要予測の部署や多摩水道の組織改編の部署に置いていただいて、仕事の幅が広がり、非常に勉強になりました。私は修士に行っていないので、学部4年の時に一年間研究室にいただけの生活ではありますけども、2年3年4年生で専門として学んだことが仕事で少しは生きるので、「社会工学科でやってよかったな」と思いながら、実践でちょっとずつ活かしながらやってきたというのが実情です。

ここ15年くらいは、まちづくりの事業にどっぷり浸かっていました。東名高速道路と中央環状新宿線が交わる大橋ジャンクションは、再開発事業で用地を確保したのですが、その事業の立ち上げの時期に関わらせていただきました。「地域の方が住み続けられるまちづくり」ということで、大局的な観点では公共施設であるジャンクションも必要ですけれども、地域の方の生活も守らなければならない。では再開発事業でビルを作って収益を上げることと、その地域に住み続けられることをどう生かすか、という観点で。また、区画整理事業にもどっぷり浸かり、都施行の区画整理を担当したり、民間開発の渋谷や品川も担当しました。今日も渋谷の埼京線は止まっている

と思うのですが、あれは渋谷の再開発の関連で、埼京線が移設されている影響です。

都会ばかりではなく、郊外の多摩ニュータウンの関係の仕事や、あるいは稲城市への読売ジャイアンツの二軍球場の誘致の関係にも関わりました。武蔵村山市役所に出向で3年間行き、多摩モノレールの延伸について一生懸命活動させていただきました。地方自治の本当に基礎的自治体の経験を積ませていただいたことで、今の自分があると思っています。

土木技術者女性の会の運営もこなす

それと同時進行で非常にしんどかったのは、子育てや家事です。子供が2人いるのですが、私自身がそれほど身体も強くないですし、残業がガンガンできる立場でもなかったの、「東工大を出ている」「社会工学科を出ている」と語るのがとてもおこがましいくらい低空飛行で、公務員を続けさせていただいていた時代がずっと続いていました。実は今年4月にやっと下の子が大学に入ったので、これでやっと残業を気にせず思いっきり仕事できるぞ、というところにたどり着いた次第です。

以前に比べるとよい時代になってきて、保育園も入りやすくなりましたし、育児関係で周りの方のご理解もいただけるような時代にはなったと思います。ただ、やはり子供の関係、家族の関係は難しいです。主人は同窓で違う学科卒で民間に勤めていますので、なかなか簡単に協力を得るわけにも、彼の足を引っ張るわけにもいかなかったり。人生、低空飛行で来たところで、

私自身「本当にそれでよかったのか」という点については、白黒つけられない心持ちです。せめて現代のお母さん方は、健康を維持しながら、子供の心の健康も維持しながら、いい形で仕事を進めていただけるといいな、と思っています。

在学中、公務員を受験するとき、社会工学科の授業カリキュラムでは非常に受験しにくい状態でした。私は土木職という形で公務員試験を受けることにしたので、当時土木工学科の水理学と土質学、木村（孟）先生の土質学と日野（幹雄）先生の水理学は取り、それから森地（茂）先生の交通はもともと好きだったので取りました。本当は構造力学も取らないといけなかったのですが、そこまではできず、4類と一緒に材料力学をとって公務員試験に臨みました。

残念ながら、国家公務員試験はやっぱり無理でしたが。同じ研究室で公務員を目指している同級生と一緒に、土木学科の講座を、学科を飛び出して取っていました。彼は大学院まで行ってから国家公務員になって国土庁に入りましたし、研究室の肥田野先生も、当時、公務員になることを非常に勧めていたのですが、学科の体制としては結構厳しい状態があったと思います。もっと若い時に声を上げて「公務員になるならこういう講座を取れ」と言ってあげれば良かったなあと、いまさらながら思います。というのも、実は都庁で採用担当もやりましたので。

土木職で都庁に入ったことで、土木職のレッテルが予定外に貼られました。実は、全国の土木技術者女性の会というのが存在し、その活動もお手伝いさせていただきました。土木職だったおかげで、お声がけい

ただいたという展開です。子育てが終わってからのタイミングですが、ここ数年は事務局長として定款とか事務的なまとめ、総会の取りまとめなどをがっぶり四つでやらせていただきました。最近、そういう事務的なお手伝いはだいぶできるようになってきたので、少しでも社工会のお手伝いができるといいなと思っております。

実は現在、高校の同窓会と、大学の女子卒業生の会の「くれない工業会」、大学のバドミントン部の仲間と社工と、そういうところで顔を出して、いろんなところで顔つなぎをさせていただいています。そういう意味では、私の知り合いをつないでいけば、人材バンクができるのではないかと、作ればいいかなとちょっと思いました。何かあった時に「この人に頼むといいよ」というところが、お名前と専門分野があって、それが紹介できる状態がもし事務局で介できればそれだけでも違う。例えば、研修会の講師のお願いであったり、地元のまちづくりでのアドバイザーとして先生をお願いするということでの人のつながりができそうだなと、いろんなところで顔を出しててちょっと思ったところです。高校の同級生で弁護士の友達や税理士の友達等は仲良くしなくちゃいけないな、と思っているのも正直なところです。

東京五輪の選手村の再開発に奔走

ところで、私はちょうど55歳で2020東京オリンピック・パラリンピックを都庁職員として迎えられることを、立場的に非常に幸せに思っています。オリパラ整備の一環

で、晴海地区に再開発事業を使って選手村を建設しています。選手村として使った建物、選手が住んでいたお部屋をちょっとリニューアルして、その後マンションとして売り出す予定になっています。もしかしたら、金メダリストが住んでいた部屋とか、有名な人が住んでいた部屋が改装されて売り出されることになります。晴海地区は、元々は見本市会場でしたが、今から2、3年前は何にもない状態で、遠くにポツンと晴海ふ頭が見えるような状態でした。今は選手村工事をガンガン進めています。

その選手村にBRT（新交通システム「バス・ラピッド・トランジット」）のステーションを作る仕事と、水素エネルギーを試験的に配置するために水素のパイプラインを作って、水素ステーションを作って、という仕事が自分の管轄に入ってきています。久しぶりに化学の知識を駆使しなければいけないので頭がぐちゃぐちゃになっています。水素ステーションで水素ガス、あるいは水素自動車に水素を供給すること、あるいはマンションや商業棟に水素エネルギーを供給することになります。水素からの発電ですべての電気エネルギーを賄う、とはとてもいかないのですが、既存の発電に混ぜ合わせる程度にはなります。

実験的な試みで、例えば北九州や山口でも市街地において水素を活用しているところがあります。現在は実証実験ということで「水素を使い続けることにより、どのように管に影響が出るか」といった知見を蓄積しているところです。また、福島県浪江でつくる「福島水素」というのがありますが、この福島水素を活用して選手村のエネルギーを供給しようとしています。東北

復興の一環のオリンピックという位置づけなので、知事がとても力を入れています。

私はそもそも社会工学科に入りたくて東工大に来ました。他の学科は見えてなかった状態です。幸いなことに私の所属した学年は、6類の中での競争は土木と建築とがほとんどで、社会工学科を希望している者は大体そのまま入れたと聞いています。とにかく1年生に入って、その年の学年主任らしかった中瀬先生の特別授業で、「社会にとって、こういうことに君たちは役に立ってるんだよ」というお話があったことなどを覚えています。2年生になって、社会工学科でいろんな専門授業を受けていた時に、こういう分野が私たちのエリアなのかなと思ったりしていました。そのときは、受身の学生だったので、「社会工学が何か」ということは自分で考えることはできませんでしたが、そういうエッセンスをいっぱいいただいたと思っています。

残念ながら研究室生活は短く、すぐに社会に出ていったわけですがそれでも、今思えば社会工学科で幅広い知識というか入り口を教えていただいた。また、それを生かしていくのは自分よ！そのセンスを磨くことを頑張りなさいね！と言われていたのかなとも思います。さまざまな感度を身につけて、いろんなところに首を突っ込んで、「自分ができないことはないかな？」と探ししていくのが社会工学科の人間だよ！ということを知らず知らずに教えていただいていた。先ほど帰納的何とかという話もありましたけれども、あんまり固定的なことは思っていないくて、社会工学科の先生方はおそらく学生にフリーな場を与えてくださっていたのだと思います。後は、学生がそれ

ぞれの興味あるところに突っ込んで行って、それが一人ひとりの社会工学だと言ってくればそれでいいのかな、という気持ちでいたように思います。

家の本箱をひっくり返していたら、1990年頃の肥田野先生の『入門社会工学』という本が見つかりました。計画数理等の数式がいっぱい載ってるような感じでちょっとしんどい内容でしたが。研究者の方たちは、数式などで社会の裏づけを取って、「社会工学」が有効な学問だということを証明していかなければならなかったのだろうな、と思います。これはまだまだ社会工学の入り口のところであって、今後、社会工学科の卒業生だからできること、学際領域にいた人間がやっていくこと、あるいはちょうどニッチになっているところを埋めていくこと、そんなことを少しでも後輩たちにも伝えられればよいなあ、と。社会工学科の卒業生として、社会全体のレベルや質を上げていくために、さまざまな部門の隙間を埋めていく立場で活動していけたらよいな、と思っています。

西村：ありがとうございます。では、長田さんよろしく申し上げます。

国立公園と霞が関を往復 —環境省の長田さん

長田啓：私は堀研究室を1995年に卒業しています。堀先生はもともと東大の森林風致の先生で、一時環境省の職員もされたのですけれども、96年の3月まで東工大に4年くらいおられたと思います。そのご縁もあって、環境省に入ることができました。そう

申しますのは、私は国家公務員の当時の試験区分で言うと「造園職」という職種で環境省に入ったんですが、そもそも造園職という職種があることも自然保護という行政の区分で環境省での採用の道があるということも全く知らなかったので、先生にお会いすることがなければ今のような形にはなっていなかったと思います。

もともと環境問題に関心があって、これからの社会の問題の中での大きなもののひとつが環境問題になるだろう、環境問題に関わっていきたくて、と考えていた矢先に自然保護行政の技官の愛称であるレンジャーという仕事があるということを知りました。半分は霞が関で政策をやり、半分は現地で国立公園の管理と称して山に登ったりする素晴らしい仕事があることを教えていただいて、それ一本で行こうと思ったのを覚えています。

環境省には社会工学科出身の先輩が何人かいらっしゃいますが、私と同じ造園職の先輩は、今日もいらしてます名執さんと私の2人しかいません。その他の方々は行政職や土木職で環境省に入られて、皆さんそれぞれ違った経験をされてきています。

日本中にいろんな学部学科がありますけれども、一つの学科でいくつもの職種を入り口にして国家公務員になっているというのは非常に珍しいと思います。これはまさに社工らしいと思っています。私自身は役所に入って20数年になりましたけれども、現地の自然環境行政と本省霞が関での自然環境政策と概ね交互に経験をしながらやってきました。結果的には今まで地方勤務は北の2つ北海道、青森と南の2つ鹿児島、沖縄を経験することができまして、その他に



2010年から2013年まで、非常に印象に残っている、佐渡のトキの野生復帰の仕事をすることができました。

野生復帰の訓練をしている大きなトキの訓練ケージの中にテンが入って一晩でトキが9羽くらい死んでしまった、という事件が2010年の3月にありました。その再発防止策を講じるために、「ちょっと臺の立った現地担当の責任者を一人置き」みたいな話があったようで佐渡に赴任することができました。現地勤務が好きだったので非常に嬉しかった半面、嬉しい顔をして赴任できない立場で、非常に複雑な気持ちだったので覚えています。頭の中ではこれは「テンの恵みだ」と思って喜んで仕事をしました。たまたま運がいいことに、私が駐在していた2012年にそのトキが自然界で孵化して巣立つという大きなニュースがあり、連日メディアで取り上げていただいたり、蔵前工業会誌にもトキの話を紹介していただいたりしました。

現地へ行けば、例えば国立公園の計画管理や希少野生動物の保護、本省に来れば制度設計や新たな政策の推進、予算の確保、そういう仕事をやってきたわけですが、いろんな業務を経験してきたわけですが、いろいろな業務を経験してきた社工でよかったなと思ったのは、専門性が無いということ

を引け目に感じたことが一度もなかったことです。造園職で入ってきた人っていうのは林学とか生態学とかそういう学問をやってきて、もちろんその分野については彼らの方が圧倒的に詳しいですけれども、専門的なところを深く知らないから困るということはあまりなくて、逆に幅広い分野について様々なことを、勉強はあまり熱心ではなかったんですけれども、ある程度触ってきたということで、例えば自治体の首長さんと話をするとか、地域の方々と話をするとか、あるいは全然違う専門分野の先生に初めて会いに行くとか、そういう時にあまりプレッシャーを感じずにコミュニケーションを取ることができたのかなと思います。

同じ自然保護行政でも価値観のぶつかり合い、例えば今までは守るということが中心だったんですが、自然は手を付けないといった価値観であったものが、最近では増えすぎた鳥獣を減らすとか、里山の二次的自然環境をどう保管理していくかというのが大きなテーマになってきたりしています。国立公園も、保護しながら利用するというのもその目的な訳ですが、残念ながら、例えば国立公園の地方の中核的な利用拠点が衰退して廃墟化しているところも少なからずあつたりします。今インバウンドで外国人観光客をどう増やすか、というのが新たなテーマになってきているので、自然環境行政でも複数の価値軸がある中で新しい課題がどんどん出てきています。それに対応していく中で、例えば自然の価値を経済学上のサービスとしてみるという生態系サービスという概念が出てきたり、最近はナチュラルキャピタル、自然資

本というような考え方が出てきたりと、次から次へと新しい考え方が出てきます。ただ、そういった話もどこかで触ったことがあるなあと思えるのはやはり社会工学科出身だったからなのかなあと思ったりすることがあります。

みなで1つのプロジェクトに取り組むのが社工？

私はこの中で一番若いので、これから社会工学がどうあるべきかということについては“無邪気担当”として思うことを好き勝手に言ってみたくと思うのですが、このお話を頂いた時に思い出した学生時代の話があります。当時、私は割とピュアで、学科というものがもっと組織としてオーガナイズされているものだと誤解をしていた時がありました。その時に堀先生に「いろんな分野の優れた先生方がいるんだし、社会問題を解決するのが社会工学ですよなと、先生方が集まってどこかひとつの地域で何かプロジェクトをされたらどうでしょうか」なんていうような無邪気すぎる提案をしたことがありました。先生は一瞬止まって、「それは学生のみんなからの意見として先生方に提案してみたらいいんじゃない？」と言われてそこで終わったんです。

この話を思い出して今改めて社工のこれからどうあるべきかを考えてみると、一つの考え方として何か一つのプロジェクトに社工会として取り組む、好き勝手に無責任に言っているだけです。聞いて流していただいて構わないですが、ということが一つあるんじゃないかなあと思っただけです。私自身が社会工学をどう理解していたかとい

うと、肥田野先生だったかもしれませんが、どなたかが「さまざまな社会問題に対して工学的手法によってアプローチする学問なんだ」と説明をされて、すごく腑に落ちたことがありました。あるいは「経済学の先生も都市計画の先生も社会学の先生も、みんなひとつになって社会工学的な観点から、とある社会問題を解決するというのはすごく美しいよな」と、その時思ったんですね。改めて今考えてみると、ここにいらっしゃる皆さんが、まさにひとつの学科であるのにも関わらず、これほど幅広い職業を経験されてきて、そしておそらく社会を良くしようという面ではある程度共通の価値観を持ってている方々なのかなと思った時に、例えば、小さなまちの地域おこしのプロジェクトだったり、特定の社会的問題を解決するための提案だったり、そういうことを誰か求めてないかな？と。社会学の旗印として、何かに取り組んでいくということではできないだろうか、とちょっと思ったりしました。

おそらく社会学の定義というのは卒業された年次によっても変わってきていて、聞いてみたら面白いかなと思っているんです。それぞれの方に「あなたは社会学をどう考えてますか？」と聞くと、何となく年次的傾向、やっぱり所属した研究室によって違ったりもしますので、傾向というのが出てくるのではないのかなとも思いますし、私たちの年次もものすごく幅広い分野で働いている人がいます。例えば「人口減少時代の地域のあり方」みたいなものを検討するのは、まさに社会学にとってうってつけのテーマであると思うんですけども、一方で社会学という分野は必ず

しも確立していないだろうとも思います。社会学について語る自信がなかったの、今朝「社会学科」をインターネットで検索してみたら、私が受験したときと同じで、筑波と東工大に社会学があるという程度ですね。一方で「環境社会学」なんていう名前を冠しているところは建設系の学部でたくさん出てきます。残念ながら社会学科は無くなるまでに社会学という概念を世間に植えつけるということではできなかった。あと一年ではできないと思うんですね。

ただ、社会学というのは私の理解では、複雑な、多様な世界を、その多様な専門的分野からアプローチすることによって新しい解決方策を見出す、ということだと思えます。そういう意味では、社会学が社会学という名前にこだわる必要はないし、新たな学問分野に対していかに屈託無くアプローチをしていくかというのが社会学の本質なのかな、と勝手な個人的な思いですけども、そういうふうにも考えます。

もう一つは私が学部を選ぶときにやはり社会学という名前は非常に光って見えたんですね。社会という言葉と工学という言葉がくっついているということ自体が、その当時は非常に珍しかったと思うんですが、いまは学部や学科の名前なんていうのはものすごく幅広くなっていて、一つしかない学科の名前って日本中に数多くあると思うんです。その中で、社会学がどこまで自分たちのアイデンティティを確立できるのかというのは、正直に考えればかなり難しいだろうと思いますが、それで社会学の視点に対する社会からの必要性が損な

われるということではないだろうと思います。

最後に、社会学のもうひとつの魅力として、私たちの頃は少なくともマイノリティとしての魅力があったと思います。社会学は非常に珍しかったし、いろんな会社に入られた多くの方が多分新しい仕事を任されたり、その人の属性ではなく、ポテンシャルで職業を任せられ、担当業務を任せられることがあったんじゃないかと思います。少なくとも損をしたことは一度もないな、と思います。これから「社会学フォーラム」ができていく時に、社会学という名前がいいのかどうかということはありませんが、ここが私たちの新しいコミュニケーションのプラットフォームになることを期待したいと思いますし、先ほど申し上げたように新しい学問分野、あるいは新しいコミュニティ、新しい人たちとどう繋がっていくかということが、多分これから重要になってくる。そう考えると、やはり新しい学生さんたちが入ってこない形でのフォーラムはなかなか先の発展というのは見込めないと思っております、社会学科卒業ではなくても何らかの形でネットワークを維持できるような工夫が必要になるのかなと思いました。

質疑応答

西村：どうも有難うございました。

4名の方からそれぞれ大変刺激に富んだ、幅も深みもあるお話が短い時間の中でいただけたと思います。各論で言うとは時間も時間をとっていろいろとお話を聞きたいとみなさまお思いだと思います。この社

会工学で縁のできた我々ですが、今回この4人の方々に出ていただいて話を聞いていろんな刺激を受けました。こういう活動はこれから続けていくことに意味があると思いますか？いかがでしょう？（拍手）

有難うございます。スピーカーの方々からも社工フォーラムというのができたらかような工夫、ああいうこともできるかなとかというお話もありましたけれども、こういう活動を今後していくと非常に面白いな、顔出してみたいな、あるいは自分もちょっと手を出して、チームを組んでもいいなというようなことありますか。無責任発言で結構。「ここで発言したからやれよ」ということではなく、何かご意見を頂けたら有難いと思います。

▼東工大に限定しなくてよい

高橋章さん（73卒）：

最後に長田さんがおっしゃられたことは、非常に大事なことだと思うんですね。

社会学フォーラムをどんな形でやるのか。これを東京工业大学社会学科関係に限定する必要はまったくなくて、むしろ東工大から分かれていった筑波大の社工系、あるいは全国に点在している社工的な考え方を持っている同志や、その若い人材に



つながっていくような、目指すのは全国的な新しいフォーラム、全国会議を作るくらいの将来目標で組織を拡大していくことを最初から謳ったらと思うのですけども。

西村：有難うございます。とても大切な、私も共感するご意見だと思います。新しい卒業生が入ってこない、残されたOBだけでクローズされた会なんていうのは、全然発展性がないと思います。次の意見は？会場に20代の方はいらっしゃいますか？

▼OBに応援してほしい、アドバイスを 北島拓也さん（14卒、16M）：

貴重なお話、有難うございました。土肥研究室の博士課程の北島拓也と申します。現在28歳で、修士までは社会工学科がりましたが、博士課程では環境・社会理工学院という所属になりました。今お話を聞いていて、松本さんが話されていた人材バンクや、長田さんが話されていた特定の社会問題を解くというようなことができるのではないかというお話がすごく素晴らしいなと思いました。私自身は現在、実際に東京のホームレス問題について研究し、アドボカシーをするARCH（アーチ：Advocacy and Research Centre for Homelessness）というチームをつくり活動しています。ホームレス問題は、日本だと福祉の問題として扱われることが多いですが、海外では住宅や都市の問題として扱われていることが多いです。まさに社会工学で学び、どういう都市がみんなにとって良いのかを考える中で、それをフィールドとして、今アクションしようと思っています。そのときに行政や民間、研究者の方などたくさんのOBの方に助けてほしい、応援してほしい



こと、アドバイスをいただきたいことがたくさん出てきたのです。

自分がいざこういうことをやろうと思った時に助けをお借りしたいと思っており、そういった人材バンクだとか社会問題に取り組むというお話はととてもありがたく思います。まだ力が無いので助けてほしいですし、一緒にやってほしいと思っています。ぜひよろしく願いいたします。

西村：有難うございます。いろんな先輩がいますのでぜひ名刺交換をたくさんしてください。

▼活躍している社工の人はここに来ない 上原高志さん（95卒）：

Japan Digital Designという、MUFG本体からスピノフした会社でCEOをやっている上原です。今日は同期の長田君が登壇するというので久しぶりに来ました。

私は銀行にいた頃はほとんど社工の出身の人はなくて、そんなもんかなと思っていたんですけど、最近AIとかテックのほうをやっていくと結構、社工の人がいます。

僕の知っている社工ってこの会で議論している社工じゃなくて、おおよそこういう会にあまり出てない人とか、マーチャンやってたりとか、それが私のイメージして

る社工なんですね。結構、そういう中で活躍してる人も多いと思うので、そういった人達が繋がって、たまたま聞いた話で発想が豊かになっていくというのが社工コミュニティの強みなのかなと思います。専門がない専門、いろんな専門が集まってる専門みたいな感じがいいのかなと思うと、さっきの社工フォーラムも、多分堅く作るとエッジの尖った人って多分入ってこないと思うので、例えば社工フォーラムっていうロゴか何か作り、「Collaborated with 社工フォーラム」ということだけ作って、あとは勝手にやってもらう。2、3人が「社工フォーラム的でいいんじゃない？」となったらそのロゴを貼っておくみたいな感じで、大きくなったコミュニティにおいて存在が目立ってるくらい感じでもいいのかと思ったんですね。

僕の周りの活躍してる社工の人は多分ここに来ない。地道にやる人もあるし、学問的にやる人もあるし、実践的にやる人もいるし、それでなんか目立ってきたコミュニティ同士がたまに「なんかあそこのシール貼ってるから、多分同じ集団なんだよな」ということで、年に一回とかで、「実は聞いてみたかったんだけど、あれって何なの？」とか、その位の方が社工らしくて、



すごいバラバラなんだけど、たまに一緒になると気兼ねなく話せるくらいだと、それっぽくていいのかなあと率直に思った意見だけ申し上げます。

西村：有難うございます。今のご指摘は、私を含めて皆様も共通で持っておられると思います。私自身も2年くらい前まで全然こういう場には出てきてなかったです。今のお話にあったようにこういう場に出てこないし、連絡網にもつながっていないような方々とどうネットワークを作るのか。一堂に会するこういう場に出てこないといけないうことではなくて、どうしたら情報が共有できて、頭の片隅にでもこの社工の、いざとなったらつなぎ合わせられるキーがあちこちに残せるかという、その工夫ですよ。

いまの社工フォーラムのロゴのこともそうだし、ネットワークの作り方で、「社工の事務局、社工会で作ってるネットワークに必ず載せないといけない」というと「そんなのかったるいよ」というのであれば、エッジの尖った連中のネットワークがあって、その中の誰かがつながっているとか、いろいろな工夫の仕方があって。そうするとすごく面白くなると思います。

ご意見を頂いて今日でおしまいではなくて、むしろ頂いたご意見を次にどう具体的に埋もらせずに生かすかというのが、社工会コアメンバーの課題だろうし、そこにもっと意見を言いたいよという人が加わり、アメーバのようにメンバーが増えもし減りもし入れ替わりながらも続いていくといいのかな、というイメージがございます。

他にご意見頂ける方いらっしゃいます

か？実は特に20代、30代が連絡網からごっそり抜けてるんです。そういった意味で貴重な20代の方は？

▼研究室同士の関連を知りたいが…

齋藤貴子さん（19卒）：

十代田研究室の学部4年の齋藤貴子と申します。社工に関しては私もまだ分かっていない所が結構多くて、それぞれの研究室でやっていることはわかるんですけど、経済系とか特に未知の領域だし、今私たちが属している都市空間デザイン系に限っても、それぞれの研究室同士がどう関連しているのか、それぞれで行われている学問がどう関連しているのかというのがよく分かっていないのです。そのあたりを明確にして体系づくりをするとか、「こういう分野はこういうところでやればいいよね」みたいなことをいろいろ関連付けられるような、そういうシステムがあれば参加しやすいと思いました。



西村：貴重なご意見、ありがとうございます。これは現役の大学関係者の方の課題でもあるということですね。どういう分野をやっている研究室が何十年、どう変遷してきたのかという年表は基礎資料として整理しようと、課題として挙がっております。

現時点でどうなっているのかということも若者たちみんなが共有し合える、共通認識を持ち合える工夫が現時点でも必要ということですね。

では、30代の方はいらっしゃいますか？

▼出身者とのコネクションをつくりたい

嶋村和隆さん（04卒、06M）：

35期の幹事になった嶋村です。私は社工の齋藤研究室を学部で出て、大学院で真野研究室という新しくできた研究室を卒業しました。今は、日立製作所から派生してできた日立コンサルティングという会社で、コンサルティングをしております。もともと日立コンサルティングでやりたかったのがスマートシティという、都市をIT技術で良くするという概念の実現でした。スマートシティという単語自体は5、6年前に出てきたワードです。私の入社当時、日立コンサルティングではスマートシティをテーマにした組織を作り、一生懸命採算が採れる部門にしようとしていたんですが、今はもう組織もワードも消えてしまいました。

当時私は「多分、社工の出身者で都市計画をしている人や、東京都や横浜市などに勤めている方とつながっていけば何か案件が出てくるのでは？」と思ってはいました。しかしOBとのコネクションがなく、うまく繋がれないでいました。そして、そのままスマートシティの組織も消えて行きました。その後、たまたま私が英語が出来たという巡り合わせで、グローバル企業統合の案件を中心にコンサルティングをしています。現在はスマートシティとは全然違う仕事をしていますが、今回のようなフォーラ



ムなどで社会学出身者のいろんな分野の専門家が集まれば、都市や街をテーマにした活動ができると思ってるので、社会学出身者の方々とのコネクションをもっと持って行きたいと思っています。そのためにも、まずは同期の皆にこの社工会の案内を展開しているところです。

西村：有難うございます。では若い人に一言でもコメントをいただきたいと思いません。

▼発想が似てしまう職場を離れ

倉澤知久さん（11卒、13M）：

2011年に十代田研究室を卒業した倉澤と申します。現在横浜市役所に勤めておまして、まだ仕事を始めて6年ほどしか経っていない状況になります。自分が学生をやっていた頃を考えると、社会学ということを特に意識しないで、いろんなことを学べるということがすごく良かったと思っています。働き始めてから、やはり同じ組織の中だけだとどうしても、頭が固くなる場合や、みんな発想が似てきてしまっているということ、業務の中で感じることもありますので、こういう場でいろいろな方の話が聞けるというのは、私としてはとても嬉しいなというところがあります。

ただ一方で、フォーラムになって、その後どういう活動をしていくのかということに関していまイメージがつかめていないところがあります。皆さんのいろいろな経験やお話を聞けるという貴重な機会をいただけるのは嬉しいのですが、それを何かにつなげていくというのが、現時点ではどのような方向性があるのかがまだ分らないです。

西村：有難うございます。誰も分かっていません。それを佐藤会長が試案として出されました。私も何回かいろんな意見を言いましたが、どうやったら実際に動くのか分からない。だけど、とりあえずこういう機会だけでも増やして会話をするだけでも少し道筋ができないかなとか、手を上げる人が出てこないかなとか、まずそこからかな？といった感じです。

▼ハブとなると面白い

寺本中さん（02卒、04M）：

2004年宮嶋研卒業の寺本と申します。私は今ぎりぎり30代です。もともと私は東工大や社会学科に入った理由も「一番勉強なくていいところはどこだろう」と大学や研究室を選んだりしていた学生でしたが、東工大の社会学がなくなるということを知って、今更ながらかなり愛着心があったんだなあとと思っています。東工大への愛着心とは裏腹に、今ほど社会を工学する時代はないと思っています。私は今ウォルマートという会社でeコマース事業に携わっておりますが、競合のAmazonとかGoogleとかFacebookとか、これほどテクノロジーを使って社会を作っている時代において、なぜ東工大は未来を捨てるような



ことをするんだと本当に癪に障って、何とかしたいということで、こういうところに足を運ばせていただいております。

先ほどお話にもありましたけど、社会工学科のこのメンバーだけで何かを改善するというのは少し違うのかなと思っています。せっかくある東工大の電子なんか科とか、物理なんか科とか、いろいろあるリソースを使って、それをつなぐ役割がどちらかという社会工学科なんじゃないかなと思っています。ハブになるというか、そういうことができると面白いかも知れません。社会を工学しなければいけない時代なのに、という話を前回社工会のOB & OG懇話会で発言したら、「では次回の第4回で講演してください」と言われたので、その時にお話をさせていただきたいと思いません。

西村真：有難うございます。今のご指摘も、とても重要だと思います。東工大の社工にクローズしない、他の大学と、という話もありましたけれども、まずは東工大の足元にいっぱいいろいろな材料がある。それをつなぎ合わせマネジメントしていく、コーディネートしていく。世の中全体を解決していくという視点で発想し、社会をどうするといいいのかという哲学も根底にもつこと

が重要であると思います。そういうことをできる集団であり続けたいですね。

このディスカッションは時間になりましたので終わりますが、次もOB & OG懇話会でお話を伺う機会をつくりたいと計画しています。予算が無くなる中で、工夫していろいろな発想で続けていきたい。何十人も火種を持っている人たちが今日もいらっしやる。ここにきていないが、そういう人たちがいることを忘れずに、それが消えないようにそれぞれがネットワークでいろんなことを発信していただければと思います。今日はどうもありがとうございました
十代田事務局長：皆様、有難うございました。もう一度盛大な拍手をよろしくお願いします。最後に一言今日のまとめとして佐藤会長にお話しさせていただきたく、よろしくお願ひします。

多様で小さな核が生まれることから

佐藤年緒会長：昨年につき、今年のディスカッションを通じて、いくつかのヒントをいただいた気がします。松本さんが「人材バンクになる」と言われたことになるほどと思いました。一人ひとりがそれぞれに活躍して、またいろいろな場で必要とされる人の集合体として。この場からは遠く離れているという「エッジのある人」も確かに多いと思います。そういう方があちこちにいることが分かれば、「こういうところで活用できる、お役に立つ」と紹介ができると思いました。「社工は皆でプロジェクトをやってない」という長田さんの指摘は、僕も学生時代から思っていたことで、一つ

ぐらひはみんなで力を合わせ、研究室の壁を越えてやるのが本当の社会工学科じゃないかと今でも思います。

それから、社工に若い人が在籍しなくなった時に、社工にはいないけれども東工大の学生はいますし、環境・社会理工学というところにもいるでしょう。途上国教育をやっているところもある。去年のディスカッションに登壇したアジア開発銀行の本田さんはそういう学生に伝えたいとおっしゃっていました。東工大に限らず、若い人たちに私たちの経験を伝える仕掛けができればいいわけです。旧来の社工会の会則の中でそういったものを仕掛けるということは制約があって難しいわけですが、東工大に限らず広い関係の中で作っていければいいと思います。

その際に、いきなり大掛かりな社会工学フォーラムという大規模なものを作らずに、2人、3人、「私はこういうことがやりたい」という人のグループがあちこちにあれば、そういった方々がつながっていけばいいのではないかと思います。多様性の時代ですから、いろんな多様な思いを持ってやっていただければと思います。別に「社工フォーラム」という名前でもなくてもいいのですけれど、名乗りを上げて小さな核になっていただく方が1人でも2人でも出てく



れば、社工会がひとつのプラットフォームになると思います。

今日はゲストの方には本当に現場でお忙しい中をお越しいただきました。社工の卒業生がこれからの社工会に、いやそれに限らず社会のために、皆様の培った知見が生かされればと思います。会場のみなさん一人ひとりにその点をお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。

〔佐藤会長のプロフィール〕

1975年華山研卒。時事通信編集委員を経て科学技術振興機構（JST）の科学教育誌『Science Window』初代編集長。現在、環境・科学ジャーナリスト。日本科学技術ジャーナリスト会議会長。東工大生には蔵前ゼミ（すずかけ台、2017・10・13）で「疑問を持つこと、現場を見ること＝科学ジャーナリズムの経験から＝」と題して、学生時代や仕事について話した記録が「東工大生命理工系News」（https://educ.titech.ac.jp/bio/news/2017_11/054861.html）に掲載されていますので、ご覧ください。



東工大本館やキャンパスを望む風景（蔵前工業会館談話室から）

社会工学科OB&OG懇話会 第1～5回の記録

社会工学科としての在籍期間が残り少ない現役学生に、卒業生が社工で学んだことをどう活かしながら現場で活躍しているかを伝えようと、2017、18年度にあわせて5回、「社会工学科OB&OG懇話会」を開いた。学生だけでなく卒業生も参加して盛り上がりを見せた。講師招へいと司会進行役は副会長の池野朋彦氏が担当。講演の詳細は「社工会」のホームページ (<https://syakoukai.weebly.com/>) をご覧ください。

第1回 2017.10.25

「市民とともに創り、育てる地域まちづくり」

額田樹子さん (82卒、石原研、横浜市泉区長)

初の女性土木職として横浜市に入庁されて以来、多くのまちづくりの仕事に従事されてきた額田樹子さん (現在は横浜市泉区長)。密集市街地での防災まちづくりや地域交通サポート事業、ヨコハマ市民まち普請事業など、市民自らがかわっていく地域まちづくりの実例を紹介し、高齢化社会でのまちづくりの課題も提示しました。女性の活躍できる職場に後輩が続くことを大いに期待していたのが印象的でした。



第2回 2018.2.28

「地方創生って一体なんだ? ～限界集落からの報告～」

渡邊泰治さん (85卒、原科研、地域おこし協力隊)

新潟県魚沼市横根地区で地域おこし協力隊として活躍する渡邊さん。電通を退社し50代にして農山村へ活動の場を移した経緯、集落の魅力を売り出すために、どう創意工夫をしたか。地元の人たちと「よこね米」のブランド展開に奔走した経験談などを語った。「東京の引力」とは違ったモノの考え方や、「地方創生」という政策や概念に対する思いを話されました。



第3回 2018.4.25

「まちづくりをする鉄道会社での多様な仕事を体験して」

藤田浩明さん (93卒、95M、熊田研、東急電鉄)

副題は「現場 (顧客、従業員) と経営の“つなぎ役”としての役割」。2018年は東急グループの源流である田園都市(株)の創業100周年にあたり、大岡山の歴史も触れながら、田園都市づくりの創業精神を紹介。仕事では財務や鉄道、パスモを経験する中で、技術の現場に財務や経営の仕組みをわかりやすく伝え、そして経営側には現場の状況を伝える役割を担ってきたという藤田さん。社工出身らしい組織「つなぎ役」の仕事ぶり。母校アメフト部の監督という人柄にもじみ出ていました。



第4回 2018.7.25

「社会を工学するチカラが、世界を変える」

寺本 中さん (02卒、04M・宮嶋研、合同会社西友)

Google、Facebook、Samsung、Amazon、Microsoft、Apple…。これらの会社はテクノロジーを駆使して、社会や文化、ヒト、まちを作っている。しかし、技術が支える時代になっても、対話を通して社会をつくること、人間がリードしなくてはならない。「テクノロジーだけでは解決できないことが山のようにある。東工大が世界に発信しリードできる国際的な教育機関になって欲しい、中でも社会工学という考え方が果たす役割が大きい」と熱く語ってくれました。



第5回 2018.11.7

「次の社会を工学的にデザインする」

上原高志さん (95卒、宮嶋研、Japan.Digital.Design) ※写真右

金子大介さん (09卒、11M・武藤研、みらい創造機構) ※写真左



2人の対談も盛り込む新趣向の回。上原さんは、三菱UFJ銀行にて日本電子債権機構を設立、MUFGイノベーションラボ初代所長を経てJapan Digital Designを設立。一方、金子さんは経営コンサルタントを経て2014年に「みらい創造機構」を共同創業し、東工大と提携して東工大関連ベンチャーへの投資を実行している。2人は金融世界のIT化の最先端、大学発ベンチャーの動きを紹介。会場の参加者とは、社会工学の理念であった「公益性」「社会解決課題」との関係などをめぐって質疑が交わされました。



コラム

講演の後は学生とワイワイ

西9号館3階の教室で懇話会が終わると、司会の池野副会長(写真右端)の案内で参加者は6階の社工会事務局のある十代田研究室近くの談話室に移動。そこには飲み物やつまみが用意され、懇親の時間に。緊張感から解き放たれた



講師や駆けつけた社会人たちと学生との賑やかな交流の場になる(写真左)。学生の就職相談に乗る親切な先輩も。いつも懇話会の会場設営や受付、議論の記録を文字起こししてくれた学生の皆さんには感謝。感謝。



社会会の現状を乗り越えるには 社会会役員会

現役員会の3年間の運営を通して、社会会が直面している厳しい現状が幾つかあります。「ニュー社会工学への道」を進むうえで、ぜひ、一緒に考えていただければと思います。状況を説明します。

1) 評議員制度は成立せず、廃止

第1～50期生まで年代によって、卒業生や教職の間で「社会工学」や「社会会」に対する意識が大きく異なっています。このため、期によって評議員が選ぶことができず、総会に先立って評議員に諮るという仕組み自体が機能していませんでした。

⇒これに対応して、2017年総会で規約改正し、評議員制度を廃止しました。

2) 名簿作成・配布は困難

渡辺前会長の努力で、各期の幹事、連絡役などに名簿情報の収集をお願いしてきましたが、今後、このような形で名簿情報の収集をお願いするのは困難である。個人情報保護の観点からも全会員を対象に職業や職場、自宅などの連絡先を明記した名簿の作成や配布はできないと認識しています。

2019年2月現在、会員資格のある卒業生や教職関係者は約2850人。このうちメールアドレスなど連絡先を把握している会員数は約500人、捕捉率は17.5%です。総会開催を再開した2012年時の捕捉率36%（2150人中777人）より低下しましたが、現在、事務局へのEメールや社会会ホームページを使っの自主的な登録を呼び

掛けています。

3) 会費徴収は停止中

ホームページの整備や登録者のデジタルデータ化によって、名簿冊子の作成や送付の経費が不要となり、会費の徴収制度は廃止されています。2018年度当初の残額は162万円。この資金によって継続できる年数は限られます。

⇒今後、会の経費は「その他の収入」として「寄付」に期待されます。

4) 学科内の事務局設置が困難に

社会会会則で定めた「事務局を大学の社会工学棟内に置く」ことは、学科消滅で不可能になりました。現在の事務局の十代田研究室も改組された環境・社会理工学院の下にあります。今後、事務局の業務は、できれば学内の他学科の教職会員か、または大学外民間や団体会員にお願いせざるを得ません。

⇒そのために事務内容をスリムにする。会員の連絡網も現在のを維持しながら、会員から要望で登録を受け付ける。HPの管理、年に1回のホームカミングデーに総会を開催するといった程度にシンプルにし、対応できればと考えています。



以上の厳しい現状下で、今後の社会会で「ニュー社会工学への道」を目指すには、社会会に連なる自主活動に期待します。旧来の同期会や研究室での活動に加えて、会員有志が関心のあるテーマで集い、それら多数の自主的活動グループが社会会に登録するなどつながりを持つ。社会会はそれらグループの「つなぎ役」、プラットホーム役として存在する。経費は団体からの寄付などによって支えられる—。そのような方向性を持つことではないかと考えています。3・9の総会で「これから」に向けた議論を期待しています。（文責 会長・佐藤 年緒）

〈第3部〉 卒業生はいま

■ 「50年に寄せて」 35人からの便り

「学科の思い出」「50年に寄せて」「一言」など、自由に書き寄せてください、と呼び掛けました。寄せられた文には卒業後、会っていない同窓生から思いがけない思い出話や近況、そして社工への思いが…。35人の「便り」と、90歳を超えた鈴木光男先生から届いたお手紙もこの欄で紹介いたします。

「計画解」の創造

宇治川 正人

(1970卒、原研、72M・谷口研)

かつて、評論家の大宅荘一氏は、高名な経済学者に、「あなたたちがやっているのは『経済学』でなく、『経済学学』ではないか」と問うた。経済学とはどういうものかを考え、教えるのは「経済学学」で、本来の「経済学」は、経済の問題にどのように取り組み、どう対処したらよいかを考え、教えるべきだという指摘であった。どんな学問でも、生まれた時は「〇〇学」であっても、やがて「〇〇学学」になってゆく危険性を秘めている。

さて、ものづくりの世界では、技術、経済、文化など多くの前提条件を踏まえて、どのような物を作るべきかを設計図として示すが、全体像から部分部分の設計図に示した方策を「設計解」と呼んでいる。私は、社会工学は「設計解」というよりは「計画解」を創造する方法を考え、教えることが根幹的な使命と想っている。

およそ半世紀前に卒業してゼネコンに就職し、殆どの研究員が建築や土木の専門家という技術研究所に配属された私には、企業が未開拓の領域に挑むための課題が割り当てられてきた。新交通システムの経路選択（沖縄海洋博）、社会環境のアセスメント（秋田湾大規模工業基地開発）、超高層都市構想（バブル期の東京プロブレム）、リゾート施設の魅力評価（リゾート開発

ブーム）、ユビキタス社会の都市・建築像など社会経済環境の変化とともに扱ったテーマも移り変わった。

ところで、科学史家の村上陽一郎氏は、文明の発展に伴い、人々の主たる死因も変化してきたと述べている。文明の初期の不衛生な段階での主たる死因は消化器系の感染症、産業化が進むと呼吸器系の感染症、さらに社会が成熟した段階では生活習慣病、そして現代では社会との不適合によるもの、つまり精神疾患や自死の割合が大きくなっている。もちろん、死因には、人々の価値観も生活様式も連動している。

私が扱った課題は、産業化の進展や社会の成熟期の課題であった。村上氏の指摘を前提にすると、これからの建築・都市空間や社会計画は、心の活力や安寧につながる解が必要なのではないだろうか。例えば、パイロットやCAなど様々な職種を含む某航空会社の施設では、従業員の共同体意識を促すオブジェの設置、小児病院の改築では、「こども元気会議」と名付けた長期に渡る職員と設計サイドの綿密なミーティングなどは、いずれも設計サイドからの提案であったが、竣工後に建築主から高く評価されている。いろいろな計画解の出現を期待したい。

それでも社会工学？

斎藤 誠治

(1970卒、鈴木忠義研)

私は昭和45年3月に社工1期生として期待に胸を膨らませて卒業し、自治省に入りました。自治体の地域開発のような仕事を

してみたかったからです。それ以来、平成15年1月に退職するまで、自治省、岐阜県庁、国土庁、千葉県庁、消防庁、宮内庁、住宅都市整備公団と実に多くの職場を経験しました。公務員を退官してからは、消防科学総合センター、万国博覧会記念機構、消防団員等公務災害補償等共済基金、地方公務災害補償基金等と転々とし、最後に昭和聖徳記念財団で専務理事兼昭和天皇記念館長をして現在に至っております。

これらのやってきた仕事を振り返ると、入省当初は、岐阜県で市町村計画の策定指導をしたり、国土庁で三全総や長期展望を作ったり、同大阪事務所で関西圏の開発構想に関わったり、また、千葉県では県の総合開発5カ年計画や、SDモデルを使った長期予測を試作してみたりして、社工で学んだ知識を役立たせて、それなりのことをやってきたのではないかと考えています。私を自治省に紹介してくれた鈴木忠義先生のおかげですが、残念ながら1年前に天国へ行ってしまわれました。ご冥福をお祈りします。

ところで、32年間の公務員生活のうち、半分の16年間は宮内庁におりました。晩年の昭和天皇に侍従として4年間お仕えしたのち、再び皇太后さま（香淳皇后）のお世話をすることになり、その後は、式部官として、新年祝賀、国賓接遇、園遊会などなど宮中の諸儀式に携わり、それから最後に京都事務所へ転勤して、御所・離宮の維持管理や関西以西の陵墓の財産管理をつとめて退官しました。従って、私は本来、自治省（現在の総務省）の人間なのですが、宮内庁のOBのような顔をしております。

このように、実に様々な経験をしてきたわけですが、社会工学とは私にとって何で

あったのか、今更、考えさせられます。初心のとおり、地域開発に関わったときには、自分はまさに「社会工学をしている」と思いましたが、宮内庁で皇室に仕えるようなことも社会工学なのか、分からなくなります。しかしながら、社会を工学的に見る、即ち、「社会の諸問題に工学的センスをもって対処すること」が社会工学なのだと考えて、わたしの人生は「それでも社会工学」なのであると自分を納得させています。

若き社会人として学科の目的 や理念を模索していたころ

高梨竹雄
(1970卒、林研)

平成31年3月、社会工学科50期の学生が卒業し、これを最後に学科が消滅すること。単独専攻学科としての存続に疑問符がついたのかもしれませんが。総合化することは難しいことなのだと思います。

社会工学科創立まだ日の浅い昭和56年、都市計画学会が「大学における都市計画専門教育の現状」という特集を組んで都市工学や社会工学の卒業生から寄稿文を募集しました。社工の一期生としては、私といまは亡き宮城健一くんの2編が掲載されました。社会工学の理念というか軸を模索していた若き日のペーパーです。

学科の専門性ということに関して、私は『プラズマのようなものでなんとなく凝集してみえるが、その中心を追いかけると既存の分野に消えてしまう』、宮城くんは『オリジンは殆んど外部に存在していたものであり、それらをまるでラッキョウの皮のよ

うに取っていくと中は何もない』と二人とも同じことを言っています。学科の理念について私は『社会と係り合う姿勢、視点』、宮城くんは『公共倫理とそれを支える道徳的行為』と言っています。

二人とも共通する価値観を共有しているように思いました。宮城くんは、ひょうひょうした雰囲気の人でしたが、よく天下国家を論じていました。言葉おだやかにです。熱い気持ちは胸の内だったのでしょう。彼の言う「公共倫理とそれを支える道徳的行為」を体現したのは、菅直人さんが厚生大臣の時代に宮城くんが政務秘書官として活動した時だったと思います。1980年代にエイズウイルス (HIV)に汚染された非加熱濃縮血液製剤が流通し、これを投与された血友病患者に感染が広がりました。回収など適切な措置をとらなかった国と製薬会社の責任が問われる刑事事件に発展したのです。(エイズ薬害事件)

1996.2月 菅厚相、国の責任を認め正式謝罪

3月 製薬会社も和解を受け入れ謝罪

この厚生省決断の背景で宮城くんが動いています。詳細は知る由もありません。社会工学科での4年間or 6年間、あの空気を吸ったことが、後に世の中に出て、軸をぶらさずに来れた大きな要因だと思います。社工の当時の卒業生が共有していた空気をお伝えしたく私と宮城くんの1981/2/25『都市計画』114号を投稿いたします。(2人の論文は本記念誌の125ページと126ページに掲載しています)

社会工学科は消えても

中山 幹夫

(1970卒、72M・鈴木光男研)

今はなき第3新館奥右側の教室において当時の鈴木光男教授の講義で産声をあげた(と私は記憶している)社会工学も50年余の生涯を終えようとしている。私自身も昨年3月で46年間にわたった「大学生活」を終えた。助手の3年間を除けば43年間は経済学部には属していたが、経済学部では経済学科がなくなることはない。いうまでもなく、経済学が学問領域として歴史的にも国際的にも確立しており経済学部の土台となっているからである。構想されていた社会工学部がもし実現していたならば、社会工学科もその基礎に位置付けられていたであろうが、工学部ではそれはもともと無理なことである。独立した学問領域として学界や一般社会に認知されることは場合によっては可能だったかもしれないが、それも叶わなかったわけである。

とは言え、私は社会工学科がなくなることとを特別に残念だとは思っていない。卒論以来、私は「ゲーム理論とその応用」を研究の専門領域としてきたが、これは私自身の「社会工学」の実践でもある。助手時代の実際のデータを使った「水資源開発の費用分担」という工学的な仕事に始まり経済学部に移ってからの公共財供給メカニズムの設計や情報財の取引などの仕事は、既存の市場では実現不可能な資源配分を達成する配分メカニズムの理論的可能性を意図したもので、社会的制度の設計という範疇に属する研究である。今日、経済学におい

てゲーム理論の応用としてのメカニズムデザインやマーケットデザインと呼ばれている研究領域は、一定の目的を達成する社会システムやメカニズムを設計するという意味で工学と発想を共有している。1994年度のノーベル経済学賞がゲーム理論研究者に与えられて以来、今日に至るまで少なくとも8人のゲーム理論研究者がこの賞を獲得している。なかでも2007年度の受賞はメカニズムデザイン、2012年度はマーケットデザインの研究であり、後者はとくにマッチングゲームの理論とそれを現実の研修医対病院のマッチングや臓器移植ネットワークの構築に道を開いた研究である。これらは社会工学的研究の一つの典型と言えるものであり、「社会工学」はこのように現代経済学の中に確固とした位置を占めているのである。

鈴木光男研出身のゲーム理論研究者だけでなく、社会工学科出身の各研究者もそれぞれの分野で各々の「社会工学」を実践しているのではないだろうか。東工大ではゲーム理論やマーケットデザインの研究体制がこれまでと同様に存続しており、社会工学科は消えても「社会工学」は東工大から消え去ることはない。

異議申し立ての大合唱を

浜松 誠二
(1970卒、林研)

団塊の世代の私は、ほぼ半世紀前（1970年）に社会工学科を卒業し、「計画の科学（社会工学）」の知識を活かすため、国の経済計画、総合開発計画を担当していた経済

企画庁に入った。しかし、当時、国土の基盤施設整備はそれなりに進んでおり、既に全国総合開発などと言って国で旗を振る時代は終わっていると思われた。そこで、行政の諸計画を担うために9年後(1979年)に富山県へ転職した。幸い、富山県では、主として企画関連の職につき、県政総合計画、テクノポリス計画、商業振興計画等々の策定に携わった。

ただ、地域のあるべき姿、あって欲しい姿を理屈で描いても、必ずしも実践されるわけではなかった。例えば1980年代当初の県民総合計画の策定の中で、人口が頭打ちから減少へと変化することが予測された（1980年国勢調査の人口から30年後の2010年の人口を予測し、結果としてはピタリ一致していた）。知事も人口予測を与件として受け入れ、一旦は、ダム、道路等の各種基盤施設の整備計画を見直していくべきということになった。民主党の事業仕分け（2010年～）で指摘された計画の見直しは、既にこの時点で自覚されていたということである。しかし、基盤施設整備事業は地域の産業の重要な一翼を担っており、実際に既存の計画を見直すには至らなかった。仮に富山県が主体的に見直しても予算的にはそれに代わる事業が展開できる訳ではなく、国から富山県への補助金が削減されるのみといった仕組みがあり、見直しを躊躇させる。その他、土地利用計画の運用、外国人労働力の受入れなどでも、小生の考える本来あるべき姿とは相容れない仕事を展開してきた。人口ばかりでなく、これらについても近年になって問題が混乱を極めていっているのは周知のとおりである。しかし、仮にこれらの仕事で筋を通せば次回の選挙で知事が危うくなることは目に見えており、

課題を先送りし続けざるを得なかった。

他方、国全体でも社会保障、財政再建など多くの課題を先送りしてきており、動きが取れなくなってきたことは明らかであろう。

結局、団塊の世代は、必要な社会の転換を实践せず課題を先送りし、それなりの年金を得て逃げ切ることとなり忸怩たる思いである。

社会工学で学んだ者の役割として、諸般の事象について事実に基づく判断をし、必要に応じて異議申し立ての大合唱をすることが求められるのではなからうか。社会的な組織としてはそれなりのシンクタンクを機能させる必要があるだろう。

小生自身は、公務員を退いた後、約10年間勤めた大学も終え、現在は富山地域学研究所と称し（非法人）、私なりに地域の分析を続けWebでの発信を続けている（ホームページ「富山を考えるヒント」を1996年から継続）。

社工OB会～それぞれの勉強会・情報交換会

三宅 勲
(1970卒、石原研)

他大と比較して東工大卒業生は、良くも悪しくも「群れない」とよく言われる。私も仕事を通して東大や慶応大学卒業生の振る舞いから、何度か実感したことがある。そのような「校風」に輪をかけて、我々社工1期生には当然学科の先輩はいないし、昭和45年卒業時大学紛争真っ只中の東工大は、ロックアウト状態で卒業式もなく、

OB会設立どころではなかった（東大入試がなかったのは昭和44年）。社工の名簿すら作られて無いのは、OB会の価値問題や昨今の個人情報問題に合わせて、このような背景もあるように思う。

総じてあまり活発ではなかった「社工会」活動とは別に、卒業年次毎や研究室単位でのOB会・交流会は幾つかあった。卒業10年後くらいになるが、私も社工1期生を中心とした「勉強会」に参加していた。この会は、当時の建設省主管の(財)都市経済研究所(新橋)・上妻理事長の支援の元、そこに勤務していた1期生の宮城君・内田君を中心に発足、2ヵ月に1回ぐらいの勉強会であった。「社工の梁山泊を作ろう、東大・都市工何するものぞ」といった意気込みだった事を覚えている。

その後、拠点を私の関係していた(株)シグマ開発計画研究所(当時一番町)に移し、管直人国会議員秘書に転身した故・宮城君の政策論・政界裏話、日銀勤務森田君の金融論、NTTデータ山下君の情報社会論、日本工営高橋君のODA論、肥田野教授の地域経済論・・・、各参加者が自分の領域の現状や抱えているホットな課題等を発表、酒を片手に議論した事が懐かしい。5～6年続けたと思うが、1期生中心だけでなく、また現役学生の参加を促したり、参加者を広げようとしたが、なかなか・・・、社工らしい？

もう1点、これは肥田野教授からだったと思うが「社工生にOBが実社会でどのような業務に従事しているか教えてやって欲しい」の呼びかけがあった。社工のカリキュラム、そこでの勉強が、ビジネス界でどのように役立っているのか、学際的な社工が現役学生には掴みにくかった様である。平

成12年から卒業生数人で、それぞれの業務分野(官庁・銀行・不動産会社・ゼネコン・設計事務所等)での実務を説明した。年1回の各自90分講義を5年ほど続けた。

私は、建設会社での実務を紹介したが、当時のゼネコンは従来の「請負業」だけでなく、土地の有効活用方法やその開発手法、施設運営方法・採算性などを一括しての「提案型営業」を重視しだしており、そこは社工生の活躍の場である・・・といった講義をしたように覚えている。コンプレックスな大型プロジェクトを初期の段階で幅広く見る総合的視野、起こりそうな問題点を早めに掴んで対応策を検討しておくリスク管理等は、まさに社会工学的アプローチと思っていた。

社工誕生から50年、学科名称は変わるが、より複雑化する建築・都市・環境・経済等の学際的・業際的領域への勇気ある取り組みは、今後も益々重要となってくるものと思う。

Social Engineeringの運命

高橋元美

1971卒、73M・阿部研

東工大では社会工学を英語でSocial Engineeringと表現してきました。というよりも、50年前にSocial Engineeringを社会工学と訳したのかもしれませんが。いずれにせよ、社会工学イコールSocial Engineeringということについて長い間何ら疑問を感じることはありませんでした。ところが、IT時代になってSocial Engineeringは、例えばソーシャルエンジ

ニアリング攻撃のように、「ネットワークシステムへの不正侵入を目的として、情報通信技術を使用せずに社会的な手段によりセキュリティ情報を入手する手法」という意味で使われていることを最近になって知りました(engineeringには「工学」のほかに「策略」という意味もある)。世の中ではSocial Engineeringと言えば、今やサイバー犯罪行為を思い浮かべる人の方が多いのでしょうか。この50年間で私たちのSocial Engineeringが社会に浸透しなかったのは残念というほかありません。

参考までに、社会工学がある筑波大学と名古屋工業大学のホームページを見ました。それぞれPolicy and Planning SciencesとArchitecture, Design, Civil Engineering and Industrial Management Engineeringという名称を使用しています。Social Engineeringを避けたために、このような表現になったのでしょうか。

社工会としては、社会工学の元祖として50年の歴史を有するSocial Engineeringを使い続け、守るのが筋と思います。しかしながら、悪貨が良貨を駆逐するように、私たちが意図してきた内容とは全く異なる悪い意味が社会で一般的になれば、英文名称の見直しが必要になるかもしれません。この場合は、「社会システムをデザインする」という社会工学の基本的な考え方を踏まえると、新しい英文名称としてSocial Systems Engineeringが考えられます。ただし、これは既にさまざまな意味で使用されているようですので、学際的という意味も込めてSocio-economic Systems Engineeringの方がよいかもしれません。社工会は“Tokyo Tech Alumni Association of Socio-economic Systems

Engineering” となります。なお、現在の東工大ホームページにはShakoukai (Department of Social Engineering alumni association) として登録されています。

学科はなくなってしまいましたが、社会工学のDNAが学内に残っているはずです。社会の活動を継続して社会工学の火が消えないようにすれば、社工的なものが再評価される時が来ると思っています。もう終わった話として捉えるのではなく、未来志向でこのような名称論議をしてもよいのではないのでしょうか。結果として、Social Engineeringという言葉は数奇な運命をたどるかもしれませんが、その精神はこれからも変わらないと確信しています。

社会工学を学ぶのは大変だ

阪本 一郎

(1973卒、75M、80D退、石原研)

私は、1970年に社会工学科に所属して以来、助手時代・助教授時代も含めて計20年間にわたり社会工学科に属する人生を送りました。

学生時代は、社会工学科で何を習ったのでしょうか。授業科目が系統だっていないため、これを学んでいないと次の科目が分からないというようなこともなく、麻雀ばかりして授業を休んでいたのはそのせいだったかもしれません。卒業論文や修士論文は苦勞しましたが、所属研究室の価値観と技術を学ぶことはできました。博士時代は、ようやく自分で勉強する内容を選ぶようになりましたが、研究室にはない学科図

書室の蔵書にずいぶんお世話になりました。小さな図書室で、誰がそれらの蔵書を選定してくれたか知りませんが、多分野の教員が社会工学科に居たおかげです。

私は助手時代を経て、できたての放送大学に移りました。当時の放送大学は、文学から医学まで本当に多様な分野の教員の混合体であるため、他分野の教員と親しく話す機会に恵まれていました。しかし議論をしていると時々話がかみ合わないことがあります。そのうち気づいたのは、当然だと思っていることが人により異なるのです。当然だというのは議論するまでもないということです。大部分の教員が、自身の専門分野の価値観の範囲で語っていることを意識していないようでした。しかし議論するまでもないという部分にこそ問題が隠れている場合も多いように思えました。私も工学の価値観にとらわれているでしょうが、もともと工学は理念より現実を重視することから、理念の相対性ということに慣れていくかもしれません。特に社会工学は、対象が融通無碍なところがあるので、よけいその傾向が強くなるのでしょう。この時、自分は社会工学で学んで良かったと納得しました。

もう一つ良かったことがあります。現実を把握するために、自分でデータを取り、分析することを繰り返し体験したことです。データの作り方や分析の仕方によって結果の見え方が大きく異なることはご存知の通りです。しかし既成のデータや集計値を用いていると、結果のゆらぎに鈍感になりがちです。データを大事にするのは社会工学で鍛えられた気がします。

社会工学のやっかいなことは、学んだことだけでは一人前になるのは足りないとい

うことです。これは他分野に較べてとりわけ顕著に思えます。社会工学を自分で咀嚼しながら、自分で学び、領域をつくる必要があります。その意味で、学生に能力・資質を要求している学科であったとも思われます。

私の原点としての 「社会工学科」

石井望

(1973卒、75M・熊田研)

社会工学科が半世紀でその幕を降ろすということは、古希を迎える私にとっては感慨深いことです。

私は社工4期として大学2年の時に社会工学科の学生となり、熊田研究室に所属しました。修士課程では、アジア開発銀行ファイナンス案件である韓国の農業開発計画の社会開発面での評価のデータ収集のため、韓国に4回出張しました。ある時、データの依頼に地方役所を回り現地の事務所に戻ったところ、KCIA（韓国中央情報局）のチェックにかかりスパイ容疑で逮捕される可能性がある、とのこととなりました。しかしながら、今は亡き熊田先生（当時助教授）の深謀遠慮で、私はアジア開発銀行の正式スタッフとしてのアサインメントを受けており、逮捕を免れました。

修士卒業後、日本債券信用銀行（当時は不動産銀行）に入りました。建設省に出向させてもらったり、40代半ばでは思いがけずシンガポール支店勤務があったりしました。そして、50歳を前にして、銀行は公的管理となりました。不良債権を管理する本

部で自ら希望して働いていた私は、普通のサラリーマンでは経験できない様々な経験をさせていただきました。

その後、縁あって務めていた銀行とは全く関係のない中堅メーカーに転職、財務部長として定年を迎えました。

定年後、64歳で東邦音楽短期大学声楽専攻に入学、現在声楽家を目指し修行中です。

自分の人生を振り返ってみれば、自分の人生の原点には常に「社会工学科」があった、と今強く感じています。どんなところに行っても、どんな状況にあっても、しっかり考え行動していけば必ず道は拓ける。そして、それを最初に教えてくれたのが、「社会工学とは何か」という結論が出ない社会工学科の仲間との議論だったのではなかったかと思います。

現在、世界は「一国主義」の傾向が強くなり、軍事・経済両面で大きな軋みが生じており、軍拡競争の再燃ということも起こっています。一方、音楽を含む芸術は、あっさりと国境を越えるものとして人々の共感を形成します。今音楽の世界に身を置く人間としては、音楽の社会に与える影響はいかなるものか、そこに未来の世界のヒントはないのか、とふと考えることがあります。そして、インターディシプリナリーな学問領域として設立された「社会工学科」の中に、もし音楽系の講座があったとしたらどういうものになっていたか、という妄想のようなシミュレーションをしてみるのも面白いかな、と考えています。

社会工学科で学んだこと

鈴木利徳
(1973卒、華山研)

大学入学（1968年）の約1年後、東工大でも学生寮問題（寮の規則改正問題）を契機に大学紛争が勃発、全学ストが実行された。小生は何度か学生のデモに参加したものの、中核派と革マル派などの内ゲバなどに嫌気し、自らの生き方を模索していた。

そんな折、東工大の教授であった文化人類学者の川喜田二郎先生（社会工学科創設のメンバーの一人）が大学を辞して新しい大学（移動大学）を創るという行動に出た。先生の講義を熱心に聴講していた小生は早速、琵琶湖で開催された移動大学に参加した。その後、移動大学に何とも言えない可能性を感じたこともあり、大学を休学し、移動大学運動に参画、若いエネルギーをその活動にぶつけた。

1年間の休学が終わり、大学に復帰したときに、選択した研究室が華山研であった。先生の公害問題等に取り組む姿勢に共感していたからである。ある時、先生に「社会工学とは何ですか」と質問した。華山先生は「たとえば高速道路を作る技術は今の日本にある。しかし、そこに高速道路を作ることが正しい判断かどうか、それを見極める技術が確立していない。そのような技術を創り上げる工学が社会工学です」と語った。当時の私にはその言葉が妙に腑に落ちた。

華山先生の研究は驚くほど学際的であった。社会工学というのは工学・理学・法学等の粋を統合して現実の問題解決に迫る学

問なのだろうと想像した。華山先生は“頭がいい”のに現場重視であった。理論的研究とフィールドワークを両立させていた。小生は社会工学を極めることはできなかったが、社会に出て、もろもろの問題に直面したとき、学際的でありたい、現場視点を大事にしたいと思い続けて生きてきた。社会工学科で学んだことはそのような、問題に対処するときの「姿勢」である。

社会工学的素養の出番

渡邊文雄
(1973卒、75M・阿部研)

昭和50年に阿部研で修士を修了し、自治省に入省しました。公的な仕事をしたいということと、特に地方行財政に関する仕事に携わりたいという気持ちが強くありました。その意味では、都道府県や市町村に入るという選択肢もあったかもしれません。

今、社会工学とは何かと問われると、曖昧模糊としてうまく答えることができません。ただ、社会の課題に真摯に向き合い、現実を踏まえ、分析し選択肢を提示し、（決断する）という考え方は、他の学問にも増して、底流にあったと思います。

しかしそれが私の公務員生活の仕事の中で実現できたかという点と甚だ疑問です。点数をつけるとすれば、社会の課題に真摯に向き合うということは合格点、80～90点ぐらいつけてもいいと思っていますが、現実を踏まえの部分には及第点には届かずせいぜい50点、分析し云々の部分は社会工学の理想とは相当かけ離れていてまあ20～30点、明らかに落第点です。

後半の部分は私の努力の不十分さもありますが、構造的な問題もあります。弁解ととらないでほしいのですが、私の場合、約30年の公務員生活の中で25のポジションを経験しました。国レベルでは地方財政、地方税、公務員行政、ふるさと創生などの地域振興、地域の国際化、防災、沖縄振興、北方領土問題などを担当しましたし、地方でも予算、税のほか、観光、保健衛生、環境などの仕事をしました。

それぞれ興味深く仕事はできたのですが、相当に多忙な業務の中で1～2年という短い在任期間では実際の現実の把握や深い分析にはなかなか至らなかったというのが実情だったと思います。

こうした頻繁な人事異動のほかに、日本の役所には科学的分析などを重視しない風土、伝統があったような気がします。私はそれを打破したいと思っていましたし、入省前に自治省の採用担当者に熱く話した記憶もあります。ただ私もそれに溺れました。関係省庁との調整、利害関係者との応接、国会議員対応などは、分析より交渉術という側面も強いものです。

もう一つ、政策決定過程の不透明性ということもよく言われます。過去の政策決定がどのように行われたのか、役所の中でもわからない。まして国民には分からない。こうしたことも政策決定を科学的、合理的に行うことを妨げてきたと思います。

ただ最近では、役所でも次第にデータやそれに基づく分析を重視する傾向が強まっていると感じますし、政策決定過程もできる限りオープンにしていこうという努力もなされていると思います。その意味では”社会工学的素養”の出番は増えてくると思います。我々社会工学を学んだ者も、社会へ

の洞察力を一層深め、分析力に磨きをかけるとともに、政策決定に積極的に関与していく強い意志力を持つことが必要だと感じています。

社工選択の一人の回顧

鈴木純夫

(1974卒・菅原研、

76M中村英夫研・鈴木忠義研、

2003D・肥田野研)

社会工学科へ進んだときは4回生、卒業は5回生です。大学に入学した年は1969年ですから丁度50年、歴史になってしまいました。社会工学科を選んだのは、当時の社会情勢で、東工大の中で一番世の中に近い学科に思えたからでした。学園紛争が無ければ、全く世の中と関係なさそうな物理のような学科を目指したかもしれません。

あまり熱心に授業に出る方ではなかったので、取得単位が少なく、英語の単位などを3年生になってから取得し、ギリギリの単位数で4年になって研究室に所属したと覚えています。技術系の学生の海外研修を行うイアエステの活動もしていましたのでその研修生に応募し、4年になってからフィンランドのヘルシンキ市交通公社で3か月、ドイツのエムシェル川管理組合で2か月間手当をもらって研修をさせていただきました。当時1ドル308円の固定相場に移行したところで、360円からは円高に切り上げられたところでしたが、物価がとても高いと感じたものです。英語が出来ないことを自覚し、イギリスに行って語学学校に入ったり、ヨーロッパ一周旅行をしたり

で、結局4年は休学しました。

一年遅れで卒業しましたが、あまり授業に出ていなかったのも、修士課程でもう少し勉強させてもらうことにしました。社会工学科は研究室によって全く分野が違い、経済学の研究室から都市計画、環境、ゲーム理論、社会学、観光、交通などで、共通軸は何も無かったように思います。学会も違うので、研究室の違いは学科の違いというより学部の違いくらい大きかったのではないのでしょうか。

結局、土木系で運輸省に就職しました。技術系と事務系の区別の激しい職場でポストはかなり差別がありましたが、仕事の内容は各種法律を読みながらの計画、予算、調査、企画など、そのうち営業や調達などまで加わりましたが、社会工学卒の意識だけはありました。人事院の研修制度でロンドンの国際海事機関に派遣された縁で、バンコクにある国連アジア太平洋経済社会委員会に勤務する機会があり、海外協力の仕事に携わるようになりました。さらにその縁で、社工の博士課程で勉強させて頂くことにもなりました。

社工を選んだこと、運輸省を選んだこと、今はもっぱら途上国でのフィージビリティ調査に参加していること、「塞翁が馬」のようです。会社でも官庁でも同じ学科の卒業生が集積して先輩、後輩の関係を作ることが多いと思いますが、社工はバラバラ過ぎるので各人が独自の道を歩んでいるのではないのでしょうか。組織は作るより解散する方が多大の労力を要するものです。50年間続き、解散してしまうのは社工らしいと思いつつながら回顧を書かせて頂きました。

社工会のこれから

野木 政宏

(1975卒、77M・原研)

私は6期生です。つまり社工に所属したころはまだ1期生の方が院生だったり研究室を訪ねて来たりしていました。そして今や50期の方が卒業する時期となりました。半世紀がたったのですねえ。そしてまさにその時に社工は独立した科としてはなくなるわけです。そう考えていくと確かに感慨はあります。

しかし一方で、社工に所属した時から社工というのが独立した科として他の学科と並列に存在しているのには違和感がありました。そもそも学際的という言葉についても様々な分野を統合して社会的な問題に対処するという趣旨だったと思うのですが、当時すでに専門性とは何か、つまり何を学ぶのかとか、いろいろ学んでもその専門の方にはかなわないのであぶはち取らずになるのではないとか、では社工卒というアイデンティティは何なのかとか話し合ったような気がします。

その意味では科としては解散しても、各分野の課題解決フレームワークのバックボーンとして当たり前にかかされていくのであれば社工の意義が定着したと考えることができると思います。たとえば災害社会工学というのが群馬大学にありますが、〇〇社会工学という言い方が通るといえるのはその一例ではないのでしょうか。

社工は一つの科ではありますが卒業生は、まるで総合大学の全学部卒業生名簿みたいに幅広い分野に行き、そこで活躍され

ています。経済界や行政、マスコミ、教職・研究者のようないわゆるメジャーな分野だけでなくNPO/NGOの分野、さらに芸術の分野に行かれた方もいらっしゃいます。その各分野での開拓者としてのご経験はそれぞれ貴重なことだと思います。

私はすでに社会の第一線からは退いた身ですが、一方でこの3月に新卒として社会に出て来られる第50期の方がいらっしゃるわけです。その方々にしてみれば同窓会を通じて様々な分野で活躍されている方とコミュニケーションする場があることは意味があると思います。そう考えると社工会はまだまだ同窓会として存続し、幅広く発信していくことは大いに求められていることだと考えます。

インテグレータ人材としての先駆

西田 宏

(1976卒、78年M・華山研)

私は当時6類就職先分野ではマイナーな電機業界、その一大手に入社しました。爾後41年、転籍等を経るも某官庁向け業界ビジネスを一貫し続け得ていることに一定の誇りを持っています。(最近では日本技術士会枠で小中高生向け理科教育支援のボランティア活動に軸足を移していますが…)技術・学問専門特化へのアンチテーゼたる「学際」という立ち位置に魅力と将来をかけ、スペシャリストよりジェネラリストの資質を5年の学窓で磨いたつもりの私にとり、社会工学のDNAはプラスにもマイナスにもなりました。

この41年は全世界大変革の時代、私のい

た企業は今年度末決算を含め数千億円の赤字計上を3回もなすも、なお世界ブランドを保持し続けています。何故ここ最近の危機回復を図れたか、これも外国からの外部招聘ではなく、社内プロパの経営者をもって何故なしえたのでしょうか。

私の診立ては、現会長、社長の出身部門が、多業種工場群の調整役、社内横断で社会システムのアセンブリを行う「インテグレータ」の役割を担う工場だったからです。当該企業内には、技術畑でのインテグレータ役の組織があと2つ、研究所と本社に各1つありました。後者は私の出身組織であり、以上3つとも今はありません。

組織論として、社内部署間の調整を実効することは、パワハラ・セクハラの一部署の問題や組織コンプライアンス・BCP問題程ではないにせよ、ガバナンスをも手にする可能性を秘め、脇役ぐらいには大切なこと。ですが、平成(今や?)、インターネット、クラウドの時代の中、ISO品質マネジメント等の普及、1企業枠に留まらないエコシステムやSNSコミュニティの浸透などで、企業内専任のインテグレータ組織は、もはや不要となったのかも知れません。それが叶う仕掛けをどこにでも自在に用意できるようになったのですから。

ただ、私の半生として、当該企業を離れて後、某官庁向け契約(金額は少ないが)で競合IT大手7社を下請けとする恐らく最初となるプロジェクトマネージャの任を、制度設計に数年準備の後、7年程務め得たのは、喜びとするところです。この経歴は、自らの専門技術基盤を第一義とはしない、問題発見・解決型、泥臭い現場も厭わないという社会工学で培ったインテグレータの気質に拠っていたものと疑いません。

そう、インテグレータという言葉には自らと違う考えや自らの不得手な学術・知識をリスペクトする、ダイバーシティを好む性向もあるようです。これを忘れずに、今も多面的に続く当該企業や技術士会とのチャンネル、そして今後は歴史となる社会工学のOB/OG皆様との間で紡いでいきたいと思えます。

振り返って今思うこと

上 関 克 也

(1978卒、80M・阿部研究室)

学んだこと

1974年に入学したときは、社会工学科の存在を全く知りませんでした。2年次に進むとき社会の構造やその変化をシステムとしてアプローチしていくという理念に興味を持ち社会工学科に進みました。結局、大学院修士まで5年間緑が丘の社工棟で過ごしました。

学部3年後期から阿部研究室の一員となるとともに社工の各研究室の皆様と知り合うことができました。その間、コンサルタントの手伝いや各種調査への参画、阿部教授が中心となって実施していた過疎地の調査に従事しました。実際、全国数か所の過疎地域に滞在しその地域の状況や行政の対応、特に住民が生き生きと生活できるためには何が必要かについて考える機会を得ることができました。このような中で地域特に地方の行政を担う自治省に昭和55年入省しました。

仕事を通じて

自治省入省後は、秋田県、愛媛県（両県

とも過疎市町村だらけ）、香川県の他交流人事で兵庫県警の地方勤務始め、国土庁、国土交通省などの他省庁などの業務にも従事しました。全国総合開発計画を始めとする国土計画や国鉄改革に関与したり、警察では、交通管制システム、国土交通省では土地基本調査（肥田野教授にご指導いただきました）さらに地方公務員の年金運用など社工で得た知識がいろいろと活かされたようなこともありました。

本来の仕事としていた地方行政は、各層にわたる多くの複雑な主体が絡みあっており、それぞれへの影響を十分考慮して最良（多くに受け入れられる）な施策を講じていく必要があります。社工で学んだことについては、いろいろな課題に対し多様なアプローチの仕方があり、それらの手法に触れることができたことが有益ではなかったかと思えます。それよりも社工という場を介して5年間にわたり、大学だけではなくいろいろな組織の方々と知り合いいろいろな経験ができたことを感謝しています。

また、防災、消防関係に携わることもあり、退官後の現在は消防設備の検定に従事していますが、火災を防ぎ迅速な避難を行うための消防システムも人間の行動の自然な行動に対応したものでなければならず、在学中に学んだことが少しは役立っているのではないかと思います。

これから

社会工学科が無くなるということは、そこで学んだ者として残念なこととは思いますが、しかし、どのような組織でも社会情勢の変化に伴い改変されていく必然性もまたあるのではないのでしょうか。50年にわたり多くの卒業生を送り出し、多くの分野で皆様が活躍されていることは確かです。東京

工業大学の社会工学科に少なからず関わった者は、今後ともそれを誇りにしていくことがその存在の証になるのではないのでしょうか。社会工学科設立の理念と育んできた実績は生き続け、さらに引き継がれていくことを期待します。

社会工学科での思い出と卒業後

岡田真晴

(1981卒、石原・平井研)

社会工学科に携わってきた方々お疲れ様でした。建築、土木、経営などに分散されたようですが、名前がなくなったのは寂しいですね。僕は建築学科を目指していましたが漏れてしまい、土木に行こうかとも迷いましたが、都市計画にも興味があり、また建築設計にも近いので社会工学科にしました。

学科所属するなり、先輩が2食で開いてくれた歓迎会は、はちゃめちゃでこれが社工？とびっくりしました(笑)。このノリがその後のマルチューディスコにつながったと思います(若い卒業生は信じられないかもしれませんが社工棟1階ロビーで大学祭の時ディスコをやっていた。結構盛り上がったが、本部から遥かに外れたところでやっているのでマイナーな意味でラジオの深夜放送でも取り上げられ僕も偶然聞きました)。

製図や模型作りが好きだったので当時まだ未開発の市が尾(本当になにもない野原でした)でのニュータウン設計図面や夏休み夢中で作った鎌倉駅再開発模型などは楽

しい思い出です。また環境の実習で仙川を上流(亜細亜大学?)から下流(二子玉川までたどり着けなかった?)まで歩いて水質調査したり、鎌倉の極楽寺駅で一日中乗降調査したのも懐かしいです。3年末の進路では好きな和風建築の夢が捨てきれず、卒論は建築学科の平井聖先生のところに席を置かせてもらい、石原研名義で江戸時代の日光街道宿場町集落の研究で卒業させてもらいました。

大学院は建築を受けて合格し、そのまま平井研の修士課程に行くことができました。社工から建築方面に行く人はいても建築史に行った人は僕くらいかも?大学院では東大寺南大門などの大仏様の研究を個人的にはやっていましたが修論にするとなると別で、結局民家の研究で取りました。実家が群馬で寺院だったこともあり、今は寺院建築を主とする建設会社で神社仏閣の設計をしています。ちなみに学生時代の夏休みに増上寺や知恩院で修行をして僧侶の資格もとってあります。夏休みになると僕の頭が坊主になると話題でした。余談ですが増上寺では社工の先輩(1期生の北条氏)がいらっしやっただけには驚きでした。

東工大で社工と建築の両方を出たことになりましたが、ある意味両方に呼び捨てできる仲間がいることが今となっては一番の財産です。また、社工は建築より人数が少ないせいか同窓会も頻繁にあり仲間意識が強いのが嬉しいです。同級生で何人か亡くなっている人もいますが、そのたびにみんなが集まってくれて、社工は結束硬いなと思います。

最後に社工卒業生の今後の活躍と益々の発展を願ってやみません。

大学における人材育成を 考える

佐野 郁夫

(1981卒、華山研)

私は昨年度末で37年間の環境省勤務を終えて退職しました。おりしも、巢立った社会工学科が本年度末で幕を閉じるという報に触れ、感慨深いものがあります。「新入社員が定年を迎えるまで、一つの産業がずっと花形産業であり続けることは難しい」ということが言われますので、学問分野にも似たような面があるのかもしれない。

この間、新入社員を採用する立場、大学で学生を送り出す立場、さらには研究費を配分する立場と様々な経験をすることができました。サラリーマン生活を終える機会に、自らの職業人生とこれらをと重ね合わせて、社会工学科の目指したものを振り返ってみたいと思います。

私は環境行政に進んだので、おそらく社工の卒業生の多くあるいは世の平均的な学生に比べれば、ここで学んだことが職業人生の中で生かされている度合いが高い方と思われ、その点大いに感謝しています。

もちろん華山先生はじめ先生方の環境問題や都市問題の基礎的な知見なども役立ちましたが、その後の強みとなったのは、数理分析などの手法、というより、そのような分析手法が存在すること、さらにはデータを集めて、その分析を意思決定につなげるというスピリッツのようなものであったと思います。

最後に勤めた独立行政法人では、新人採

用にもかかわりましたが、数少ない環境系の公共機関ということで大変応募が多く、特に環境に関連する学科を卒業し、とにかく環境に関連する仕事に就きたいという学生の駆け込み寺となっている感がありました。

環境と言っても上下水道や廃棄物処理といった工学分野であれば、関連のメーカーなどの技術者になる道があるのですが、環境を標榜していても、卒業生がどのような分野で活躍できるのか、その目算はあるのかよくわからない学科もありました。

世界的メーカーの環境担当の部長とお話しした際に、「当社ではたとえ環境関連の学科を出て希望したとしても、新入社員を環境部に配属することはない。会社の各部門の現状と課題を理解していなければ適切な対応ができないからだ。」とおっしゃっていましたが、そのようなことがこういった大学関係者に理解されていたのか疑問です。

北海道大学では公共政策大学院の特任教授として、逆に学生を社会に送り出す立場でした。公共政策大学院は念頭に置く学生の進路は明確で、カリキュラムもそれに合わせて組み立てられています。生じていたのは教員の研究分野とのミスマッチとの印象を持ちました。

この度役目を終えることになった社会工学科に代わってどのような体制が用意されるかはわかりませんが、今後の我が国の大学が有効に機能して生き残っていくためには—

「教育」に関しては、「一定の範囲の学問の基礎を身に着ける」「研究者を育てる」「専門職を育てる」といった、社会に送り出す人材を明確にして、そのためのカリキュラ

ムと、それを実施できる教員の編成を行うこと。

「研究」に関しては、その分野で求められている研究の方向が、「教育」で求められているものと一致するとは限らないので、「教育」の体制とは切り離し、どちらかがどちらかに引っ張られることによって、その目標の達成が犠牲になることがないような組織を作っていく必要があるのではないのでしょうか。

平松登志樹さんのこと

横目 順

(1981卒、83M・華山研)

華山研・同年生だった平松登志樹さんが、5年前に急逝しました。彼は社会工学科を卒業後、某企業に就職したのですが、会社を辞めて、ある日、研究室にひょっこり姿を見せました。彼の卒論や修論は記憶にありませんが、数式をあれこれといじくり回していました。数学が苦手な私には、ちんぷんかんぷんでしたが、柔和な物腰で憎めない人柄に研究室はいつも和やかな空気に包まれました。(以下、敬称略)

平松は91年に東工大大学院博士課程を終了。社会工学科の助手を務めた後、93年、豊橋技術科学大学に工学部助教授として迎えられました。2010年、同大総合教育院準教授に昇進しています。

最後に会ったのは、12年夏の終わりでした。当時、私は大阪勤務で、大阪にふらっとやってきた平松と梅田の居酒屋で話に花を咲かせました。互いに議論好きなので、

政治、経済、社会、趣味など話は尽きませんでした。家族の身の上話もしました。大学を中退し、職にも就けない私の長男のことを相談すると、「俺のところへ寄せよ。面倒を見てやるよ」と言ってくれました。

絶筆となった「躍動する社会工学」で、彼はパワハラに遭ったと告白しています。「君は何かの間違いで大学教官になった」「大学を辞める」等々。パワハラについて「性悪の便益が存在する」と指摘。性悪の便益を「弱者をいたぶる行為自体に愉悦を感じる」と定義し、「地位や権力を獲得すれば、誰しもの心に生じるかもしれない」との見方も示しています。パワハラやセクハラに関するニュースを目にしなない日はありません。平松は自らをさらけ出すことで、ハラスメントという「社会悪」に闘いを挑んだのだと思います。

教育者としては、「将来像のシナリオ」「好きな空間作り」などとテーマや名称だけを与え、発表やレポートはすべて学生に任せました。学生たちは様々な研究結果を発表しました。

・布団が大好きな女子学生は1日の布団の働きをビデオに撮って紹介した。

・サラリーマンの1日を水の音で表現した。ラッシュ時は滝の音-などなど。

教え子の弔辞を聞いて、学生の信望が厚く、慕われた教官だったと実感しました。

「生物発電」。人間や生物の多面的な活動から電気を取りだそうというアイデアだそうです。実際、自転車発電で開催された野外コンサートはあります。さらに、靴に仕掛けがあり、歩くと発電する靴なども考案されているといいます。梅田では、発電靴の実用化により、競技場やコンサート会場で観客が発電し、温暖化対策に役に立

つのではないかなどと、盛り上がりました。

外交・安全保障にも触れています。何があっても軍事的な報復はしない。軍事的な抑止も計画せず、報復もしない日本になってほしいと言います。平松は、常に弱い立場、恵まれない人や地域が目線に立って、社会のありようを見ていたのだと思います。沖縄出身の私にとって、共感できるもので、何事も腹を割って話し合える友人の一人でした。社会工学とは何か？社会に何が貢献できるのか？まじりっけのない心で熱意をもって研究を続けていたと思います。まさしく、私たちの記憶に残る社会工学者の一人でしょう。

霞が関での仕事と社会工学

室田 哲男

(1982卒、84M・華山研)

1984年に修士を修了し、同年旧自治省(現総務省)に入省、昨年7月に総務省を退職しました。34年余りの公務員生活のうち、半分は地方自治体での勤務、残りの半分が総務省など霞が関での勤務でした。

霞が関勤務のうち前半は、地方財政や地方分権、市町村合併など、地方自治制度の企画立案に携わりました。地方自治制度は、地方自治体の現場に関わる制度ではありますが、一方で、国の統治機構に関わる制度でもあります。制度を企画する場合は、憲法に規定される「地方自治の本旨」を実現するという理念・哲学から出発し、あるべき制度を考える演繹的アプローチがとられます。このため、まず現場から出発し、帰納的アプローチをとる社会工学を活かしづ

らい分野でした。

一方、霞が関勤務のうち後半は、主に防災・危機管理に携わり、防災制度の企画立案や東日本大震災をはじめとする数多くの大災害の応急対策に従事しました。

防災・危機管理は、想定される災害に地域の現場でどう備え、現実には災害が起こった場合にどう対応し、いかに被害を少なくするかがテーマです。恩師である華山先生から叩き込まれた現場第一の発想方法が役に立ちました。

また、防災・減災は、防災インフラの整備などのハード対策と、土地利用規制、避難対策、救助活動などのソフト対策のポリシーミックスです。個々の対策を強化するだけでなく、これらの対策をいかに効果的に組み合わせるかが大事なのですが、縦割り行政の問題もあり、残念ながら議論が進んでいないのが現状です。学際的な学問である社会工学を活かす余地は大きいと考えられます。

公務員生活にピリオドを打ちましたが、今後も現場主義、学際的という社会工学の発想を活かしつつ、ライフワークとして防災・危機管理の問題に取り組んでいきたいと思っています。そのためにも、社会工学とは何か、またどう活かすかについて、自分なりに考えていきたいと思っています。

社会工学科はなくなっても、社会工学という学問がなくなるわけではありません。卒業生の有志で、社会工学について一緒に学び議論する場ができることを期待しています。

華山先生の「社工的」教え

木村 敬三
(1983M・華山研)

今から40年程前、建築学科で学んでいた私は、当時社会問題となっていた土地問題に興味を持ちました。そこで、その頃、新聞等で度々発言をされていた華山謙先生の研究室に是非入れていただきたいと先生をお尋ねし、「試験をパスすれば入れてあげる」という言葉をいただき、無事試験にパスし、大学院の修士課程に入れていただきました。

それから2年、出来の悪い生徒である私をご指導いただき、修士として卒業させてくださった先生には感謝の言葉しかありません。

私が、先生の授業で印象に残っているのは「私は、農学部を出て、工業大学で、経済を教えています」というお言葉でした。当時、学際的という言葉が先進的な響きを持って語られ、異なる学問分野の枠を超えて社会の問題の解決を図ろうという潮流を、先生はまさに体現しておられたのだと思います。

環境問題、土地問題、資源問題、水問題等々、複雑に絡み合った問題を広い知見から読み解き、解決の道を探ろうとされていた先生が、研究室で多くの文献・資料に囲まれながら論文を書かれていた姿を今でも思い出します。

一方、ハーバード大に留学された経験がおありになるのに、ごみ問題の現況把握のためごみ収集車に乗って現場を知ろうとされたことや、農地の宅地並み課税の問題で

様々な脅迫や嫌がらせを受けながら凛とした姿を崩されなかったことなど、現場を見、正しいと思ったことを主張される姿勢は、当時でも高い評価を受けられておられたと思います。

卒業後私は、横浜市役所や民間企業の現場で、約30年余り不動産、土地関係の部署で、原点である「土地問題」と関わりのある仕事に携わってきました。もちろん、実社会では学校で学んだようにことが運ぶわけではありません。しかし、その中でも自分なりに心がけてきたことは、物事を多角的・長期的に捉え、できるだけ将来的な問題発生を摘むということでした。今思い返せば、それが華山先生から教えていただいた「社工的」思考であったかもしれません。

現在、会社を（半）卒業し、現場からも離れてしまいましたが、これからは時間的な余裕もできそうです。そこでもう一度先生の本を読み返し、現場で得た様々な知見を何らかの形で発信できないか、と今考えているところです。

社会工学への思い

西村 真
(1984卒、86年M・渡邊貴介研)

高校三年のあれはいつだったか。たまたま「都市の景観」という本を手にした。それからだ、「都市」という言葉に敏感になったのは。「都市」の文字のある本を乱読し、都市社会学、都市心理学、都市経済学などのラジオ講座シリーズを聞いた。あらゆるものが総合的に組み合わせられている都市に

ついて学びたいと思い、社会工学科を発見し入学した。

入学するとどうも体系だって総合的にバランスよく学ぶような感じではなく、先生方がそれぞれの得意分野をバラバラに教えているようだったが、元があやふやなのでまあ良い。こちらも好きにしていた。一年のあるとき石原舜介先生に飛び込みでお会いし、まず何を読んで何を学べばよいか、とお尋ねしたら、「歴史の都市 明日の都市」という大きな本を渡され、これを読めば次どうすればよいか分かる、と言われた。

とにかく狭い専門分野に閉じこもるのではなく、様々な視点から総合的に物事を見ることが大切、ということとその頃から今に至るまで変わらず意識させられている。この世にはどのような視点や利害関係があるのか、何が理想なのか、どうすれば改善するのか、到達するのか。世の中に正解はない、見る視点で正解は変わる。そもそも何が取り組むべきテーマと考えるか、何がより善い方向と考えるか、という価値観にもかかわる。

正解がないだけに悩む、迷う。学問体系にはならない。社会経験も少ない学生がわがことのように取り組むのは難しいかもしれない。社会工学は二十歳前後の学生ではなく、社会経験も積み、様々な問題意識を持った大人が集まり、侃々諤々やる分野なのかもしれない。しかしまだまだ柔らかな年齢のうちに、柔らかな視点や価値観を育むこと、多様なこの世の事例や考え方を知ること、何をすればよいかどうすればよいか正解がない中で、粘り強く自分にも周りにも問い続け、雑草のように生きていくこと、これらを経験するのはとても大切

なことだ。

自分はゼネコンのデベロッパー系計画・事業・営業部門で都市開発・地域開発系の仕事をしてきた。行政、住民、民間企業などの多数の目標と利害が交錯する分野で、自分のポジションでできることは何か、他人でないとできないことは何か、利害関係者がお互い暴走せずにバランスの良い着地点を探る方策は何か、ミイラ取りがミイラにならないか、など日々考え試行している。

社会工学科・専攻という看板はなくなるが、その精神はこれからますます重要になる。そういう時代に、柔らかく粘り強く活動する人脈をつなぐプラットフォームの一つとして社工会も続いていけばよい。昔話だけでなく、今の、これからの話をする場として。

街を観察する愉しさ

水野雅男

(1985M・渡邊貴介研究室)

『研究室や資料室に籠もってないで、街に出て、直面している課題を把握しなさい』鈴木忠義先生から度々聴いた言葉。そのおらかな人柄に憧れて大学3年の終わりに鈴木研究室を希望。ところが希望する学生が定員の2倍を超えたのでじゃんけん勝負。運良く勝ち抜けたと喜んでいたら、忠義先生は東京農大へ行ってしまわれた。そんなことから、後任の渡邊貴介先生の研究室一期生として研究室生活が始まった。

その当時、中村良夫研究室、肥田野登研究室と一つのチームとして資料室を共有し、研究活動や研究室での生活を共にして

いた。学部と修士の3年間で最も印象に残っているのは、運輸省から研究室が受託した業務で、先輩方と一緒に瀬戸内海の歴史的な港町づたいに一週間近く調査して回ったことだ。現地に出向き、つぶさに踏査し、写真で記録し、街の人々から話を聴き取る。写真撮影のコツを学び、カメラの手入れも教えてもらい、現地調査の楽しさを味わった。街をじっくりと観察して、何が課題となっているのかを掴み、どういう地域資源があるのかを探る。地域の課題と資源性を掛け合わせることで、解決策を導き出すプランニングの面白さを味わった。

その経験が忘れられず、同級生は大手ディベロッパーや都市銀行など大企業に就職する中、故郷金沢の小さなコンサルタントで働きだした。その後、34歳で独立しプランニング事務所を開設、大学教員となるまでの25年間、数多くの現地に通いながら調査し計画をまとめてきた。ただ、計画書作成だけの空しさを感じてからは、地域住民とともに街を動かす市民活動に取り組んできた。醤油蔵などの遊休空間をアーティストのアトリエやサロンにコンバージョンするまちづくり、能登半島地震で被災した土蔵を修復し左官技術を伝承する活動、金澤町家の保全活用に向けた啓発活動やシェア活用事業など、いわゆる市民主体のNPO活動であり、いずれも10年近い年月を要した。

今振り返ると、大学研究室で出会った歴史的な資産を保全することにずっと携わり、そのために現地に足繁く通ってきた。研究者となった現在でも、住民意向調査など現地調査を継続している。社会工学の原点は、地域社会の現場を観察することにある。

わたしの履歴書

池野朋彦
(1985卒、華山研)

50周年を機に、自身の大学卒業後を振り返ってみた。1985年4月に東京急行電鉄(株)に入社。渋谷駅で駅務係、その後、東横線の車掌、運転士を経て、1988年1月から、駅が多機能化を進めるNSP(New Station Plan)に携わる。「駅総合サービスセンター」と称する店舗の出店、新サービスの企画等を担当した。

1991年11月から、鉄道路線計画やバス路線の再編等に従事。2000年、2010年の首都圏の鉄道路線網をどのように整備すべきかを検討した。神奈川東部方面線がもうすぐ開業するのは感慨深い。

1995年3月に人事課へ異動し、採用、個別人事等を担当。(余談だが、なぜか社会工学科卒で人事に携わる人は多い。)その後、2000年1月から、鉄道事業部門の人事労務担当となり、教育、安全衛生、賞罰等を担当した。2001年7月に運転課長を拝命。着任後すぐに、田奈変電所の落雷事故があり、十分な電力が供給できず、しばらくの間、田園都市線のラッシュ時に全列車を各駅停車で運行せざるを得なかったこともあった。

2002年12月に伊豆急行へ出向し、伊豆急グループの再編や鉄道事業の収支改善に携わる。

2005年4月にリゾート事業部に配属され、タイムシェア事業の推進を担当。新しいパッケージスタイルとして、伊豆今井浜や那須、金沢、沖縄などでの直営施設の開業

に加え、北海道から沖縄まで、提携施設の拡大に向け、文字どおり飛び回った。

2007年11月からOOH（Out of Homemedia）事業とフィルムコミッション事業を担当。広告媒体への新技術の活用などを検討した。2009年4月に再び、鉄道事業の駅部門の担当となり、駅のサインや深夜の訓練方法等を見直す。2011年2月から、OOH事業、カルチャー事業、学童保育事業、光回線事業等の担当となったが、5か月後には、東急ファシリティサービスというビルメンテナンス会社へ出向となり、ここでも人事労務を担当する。

2013年4月からは、東急グリーンシステムという造園会社へ出向し、造園事業特有の苦労やゴルフ場のグリーンキーパーの生きざまを学んだ。その後、2015年10月に東急グループのシンクタンクである東急総合研究所へ出向し、総務部門を担当。2016年12月に人事開発部へ復職し、現在、全社員面談や定年後再雇用等を担当している。

これまで様々な事業、業務に携わってきたが、いつもどこかで社会工学科で学んだことや御縁をいただいた方々に支えられてきた。東工大の社会工学科で学べたことに改めて感謝したい。

学科の思い出

堀 添 健
(1986卒、原研)

もともと学際領域の学問ということに惹かれ、社会工学科で学ぶことを目指し、東工大を受験しました。6類所属時の単位が足りず、1年遅れの3年次となってしまう

でしたが、無事、学科に所属できて喜んだことを今でも覚えています。

社工で学んだ3年間はあっという間に過ぎました。思い出の詰まった3年間でしたが、一番の思い出は、原研究室での学部卒業論文です。

原芳男先生は、とくに学生各自の自主性を尊重する指導方針で、とても居心地のいい研究室でした。私は、卒論のテーマは割合と早く決まったものの、なかなか手がかず、実際に論文を書き始めたのは、卒論発表会の4日前頃だったと思います。さすがに間に合わないのではないかと、との危機感から、緑が丘駅前にあった喫茶店に食事に行く以外は研究室にこもり、結局、一睡もできずに、もくもくと原稿用紙に字を埋めていた72時間でした。学部生は私を含め4名いましたが、皆さん同じような状況で、人間の身体って結構頑丈なんだね〜、と語り合っていました。もちろん、発表が無事終わると、そのまま研究室のソファで爆睡となりましたが、今、振り返ると、若いってすごいな（いろいろな意味で）と改めて思います。

授業で印象深かったのは、宮嶋勝先生の講義の一環で、地方自治体の予算編成を机上で行ってみる実習です。義務的な経費を積み上げていくと、結局、自治体の財政的な自由度はほとんどないんだな、と実感させられました。このこともあって、卒業後は基礎自治体である三鷹市役所に入庁し、今は生まれ育った川崎市で市議会議員を務めています。地方自治体で仕事をしていて感じるのは、実際には実習以上に財政上の自由度がないということと、その一方で、工夫の仕方で地域のあり方が大きく変わるといことです。

価値観が多様化し、社会が複雑化する中、理系的な手法や観点で社会の課題に取り組むことを学べる学科の必要性は、ますます増していると、私は思います。

未来志向で頑張りましょう！

前澤 新
(1987卒、原科研)

「社会工学科」がなくなるらしいという衝撃的なニュースは、同期の鐘ヶ江君からの電話で知りました。とても理不尽なことと思いました。卒業以来、大学時代の専攻は何かという問いに、「社会工学」と答えるものの、「何それ？」と聞かれ、説明するのは一苦勞でした。「社会工学科」が存在する間は、東工大のホームページを見れば「社会工学科」の説明はありました。それがなくなってしまうのです。「社会工学」の重要性は益々高まっているというのに、どうして廃止されるのか？復活を求め、署名運動でも行いたい気持ちになりました。

私は都立豊多摩高校3年の秋に、東工大の「社会工学科」の紹介を読み、その学科設立の精神に惚れ込んで、東工大第6類を第一志望に決めました。学際的な取り組みかつ工学的な手法で問題解決を図るということの重要性を自分なりに解釈、これが正に私の進むべき道と考えました。「社会工学科」がなければ、東工大を受験しなかったかもしれません。1年浪人して2度目のチャレンジでなんとか合格。そして熊田先生、原科先生に出会ったのでした。

卒業後の進路は金融機関（三菱銀行）を選択しました。この3月で勤続32年になり

ます。ディーリング業務やプロジェクトファイナンスの担当を経て、2000年からは、システムの企画・開発を担当しています。この32年を振り返ると、業務の内容は変わっても、一貫して行ってきたことは、Plan→Do→Check→Actionであり、利害関係者との調整、交渉、合意形成です。これは正に「社会工学」です。

「社会工学科」がなくなってしまうことは悲しいところです。然しながら、とあることから考え直すことにしました。それは銀行入社の同期から、ご子息の進路相談を受けたことがきっかけです。ご子息は東工大で「融合理工学」を学びたいから「環境・社会理工学院」を受験するそうです。私が高校3年の時に「社会工学科」の紹介を読み、東工大を第一志望に決めたように、今の高校3年生が学際的な計画系の「融合理工学」の紹介を読み、大岡山を目指す。頑張っただけで欲しいと思いました。そして、これを機会に東工大のホームページの「融合理工学系地球環境共創コース」の紹介を読みました。私からするとこれは「社会工学」そのものと思いました。

この4月から新しい学院の枠組みで、新入生が大岡山にやってきます。この新入生たちの活躍を東工大OBとして応援したい。「社会工学科」が取り組んできたことは、新しい学院という枠組みで東工大の中に生き続け、益々拡大していく、更に「社会工学科」で学んだOB・OGが、各界で「社会工学科」のDNAを拡散させていく。私は今年で56歳、還暦までもう少しですが、「社会工学科」で学んだことを礎に、より良い国家、より良い地球を目指し、頑張りたいと思います。社工会会員の皆様も、どうかそれぞれの目標に向かって未来志向で頑張

りましょう！

社会工学科の思ひ出

松本香澄

(1988卒、肥田野研)

社会工学科との出会いは唐突でした。確か高校2年ぐらいのときに、出張から帰ってきた父がボンと食卓に置いた機内誌(JAL?)を何気なく眺めていたら、景観工学について中村良夫先生が書かれていたエッセイが載っていたのです。もともと風景の写真が大好きで、旅行に行くたびに絵はがきやポスターを選んでいて自分にとって、大好きな風景の話が理論的に分析できて、将来の街づくりに生きる、というような文章の展開にそれはそれは驚きました。さらに、その筆者は東京工業大学の先生で、そういう分野が理系大学に存在することに飛び上がらんばかりに驚いた記憶があります。当時の自分は、とにかく国語が苦手で、やむを得ず理系に進み、もっと苦手な物理もやらねばならないのか、と暗い気持ちになっていたところ。実は大好きな社会(科目)に関われるかもしれない…という期待を持ったという大事なポイントでした。

紆余曲折の末、社会工学科に進学することができ、バラエティ豊かな授業についても「先生が組んだカリキュラムなのだから、きっと社会に出たら有益な内容なのだろうなあ…」と思いながら、出席はして、授業中爆睡していました…すみません。(泣)

印象的な授業は、入学時に6類全体に行われた中瀬先生の授業と、学部3年後期の研究室ごとのゼミ形式の授業です。やっと

大学生になれた喜びの中、中瀬先生が「ようこそ6類へ」という趣旨で、社会にて建築や土木の学問がいかに有益かをお話くださった授業では、「自分はどんな形で社会に貢献できるだろう…」と考える機会をはじめていただきました。3年の時は中村研究室の集まりに出席し、写真を撮ってレポートした際に当時の斎藤潮助手から「写真の構図がいい」とコメントをいただき、ものすごく自信になり、その後さらに写真を撮るようになったという展開があります。また、統計学や計画数理の授業で、世の中を数値的に眺めて、分析する視点を教えていただきました。(のちに、水道使用量の需要予測の仕事で統計学を駆使することになろうとは)公務員試験用に追加して、土木工学科にて水理や土質(木村先生)、交通(森地先生)の授業と取らせていただき、劣等生はついていくのがやっとのことだった記憶があります。(都の採用試験で土木職の試験問題を作る仕事にどれだけ役立ったことか)

学部卒で東京都庁に就職し、肥田野研で学んだ地価関数の感覚をもった状態で、配属された区画整理の部署で仕事を始めることができたのは、本当に幸せなことでした。その時の経験が、実は今の所属にもつながっています。

子育て期は、社会に具体的に恩返しができず、悶々とした日々を送っていましたが、最近やっと子供たちも手が離れてきたので、様々な分野において、自分ができていることを少しずつお手伝いしていきたいと思っています。社会工学科の卒業生が世の中に存在する限りは、その活躍を支援する気持ちを大事にして、これまでお世話になった恩返しをしていきたいと思っています。

ます。マツモトの立ち位置でお役に立てることがあれば、遠慮なくご用命くださいませ。

最近、同期の方とお話しする機会があり話題になったのですが、社会工学科の意図は、東京工業大学全体のリベラルアーツの展開につながるのではないかと。社会工学科はなくなったのではなく、東工大全体にその趣旨が広がったのではないかと、という話になりました。加えて、最初から社会工学科を目指して進学してきた奴ら（まあ自分たちのこと）は、世の中的には普通じゃないよね、と。（良い意味で）そういう奴らこそが世の中にイノベーションを起こしていく人材なんじゃないか、という話にも。自分もまだもうちょっと現役なので、その普通じゃない遺伝子をもうちょっと活性化させていきたいなと思っています。

これからも。

前田佳紀

(1991卒、中村良夫研)

卒業してから三十年が経とうとしている。いわゆる“バブル世代”だったので将来を楽観視する癖が身についてしまい、それがとうとう今日まで続いている。六類は、建築、土木、社工とあった。人生を心配する学生なら社工は選択しない（と思う）。そういう意味で、社工は、どれだけ明るい未来社会をプランニングし実現するか、が責務であると感じる。

私が社会に出てから様々なテクノロジーが進歩した。学生時代は携帯電話やインターネットはなかった。レポートを書く時

は「知恵蔵」「現代用語の基礎知識」といった分厚い事典を使った。“超”売り手市場の就活の時は、リクルートなど数社からダンボール箱ごと資料が送られて来たので、狭いアパートの押入れがすぐにいっぱいになった（ネットで何でも情報が入手できるいまから振り返ると、昔のなんと情報の重かったことか！）。

しかし、最大の変化は、computational powerの驚異的な増大だと思う（いまはAIと言ったほうがいいのかも知れない）。都市計画にも大きく影響する。例えばクルマにしてもシェアリングが進み、そのうち路面のキャパシティ以上の台数は必要なくなり、結果、駐車場も一切不要になる。自動化により道路利用は完全にコントロールされ信号が廃止される。自分でハンドルを握るドライブはかなりお金のかかる道楽になるだろう。これらの変化は私が生きているうちに起こると思う。もしいま自分が社工の学生であったらどんな論文を書くのか？

少々空想じみた話に聞こえるかもしれないが、五十年先、百年先には、レーザ核融合発電による無尽蔵エネルギーの獲得、さらには、ヒッグス粒子確認（ノーベル賞）に端を発する“質量が発生するしくみの解明と無重力化技術”が現実のものとなっているかもしれない。そうするとビル一棟ごと簡単に動かすことができるようになる。再開発の方法がまったく別次元のものとなる。

東工大全体でみればこのような夢の技術に詳しい研究者がいるはずである。いま気がついたが、社工は六類以外の研究にももっと関心を持つべきであり、例えば、その研究／技術があと何年後くらいで実用化されるかということについて幸運にも学内

の研究者にインタビューすることができるのだ。社会にもたらすインパクトについても（もしかしたら）ネット経由よりも確度の高い情報が得られるかもしれない。まちづくり／都市計画／国づくりに反映することができる。さらに意気投合して会社づくり（起業）することになるかもしれない（これはちょっと言い過ぎかも）。

generalistになれ！とよく教授から言われたことを思い出す。学科が廃止されるいま、もっと社工／東工大のネットワークを活用すべきだったことに気がついた。しかし決して遅くはないと楽観的に捉えている。本日の記念パーティーから始めたい。

社会工学個人メモレー

宮下賢一

(1995卒、中井研)

私と社会工学の出会いは、高校時代に見た放送大学での阪本先生の番組でした。そのため社会工学科について専ら都市計画をイメージして東工大に入りましたが、実際にはこれにとどまらず社会全般について幅広く学ぶことができ、知的好奇心を最大限に広げてもらいました。

我々 26期生が卒業した1995年はバブル崩壊後の就職氷河期元年でしたが、同期はゼネコン、不動産、公務員、商社、金融、IT、コンサルタントと多方面に首尾よく就職しました。その中で、私は鉄道会社に入社し商業施設現地事務所に配属。今思えば地域活性化の最前線、現在の花形部署ですが、当時は「なぜ工学部出身で商業を？」と疑問に思う日々でした。

30歳を過ぎた頃、父が突然家業の電気工事事業承継を持ち掛けてきました。これについて恩師の中井先生に相談したところ「電気工事も都市計画、商業施設運営も都市計画、みんな都市計画」と論され、また、肥田野先生の檄文「プランナーは意思決定者たれ。政治家、公務員、民間なら社長となれ！」を思い出し、若気の至りで退職してしまいました。とはいうものの職人になる気もなく、中小企業大学校の経営後継者コースに進み人生を見つめ直すこととしました。

結局修了時には家業に入らず、「不動産と金融の融合」を掲げる不動産投資ファンド運用会社に再就職しました。同社は設立5年で上場、8年で東証一部、12年で会社更生というスピード感で、前職鉄道会社との時間軸の違いと、そこに集う人生の多様性を楽しみました。当時開催された不動産証券化協会の講演会で中井先生が「まちづくりと証券化」のテーマで登壇され、「両立しない」と結論したことが印象に残っています。その後私は社会人大学院で「都市ビジネス論」の講師を務める機会を得ましたが、何度かこれを引用させていただきました。さらに、私は当初の商業施設ファンド運用に加え不動産運用システム構築も担当に加わりましたが、ベンダーから誘われ導入コンサルタントに転身、不惑を前にして「『SE』ははじめました」と看板を出すことになりました。講演会では数量化Ⅲ類による業務分析を披露したところ、来場した社工同期には大ウケでした。

厄年の夏、父が末期がんと診断され、最終的に家業を継ぎました。社会問題と化した事業承継を中小企業診断士として体感したいという好奇心もありましたが、原科先

生による環境アセスメント演習での「代替案Do nothingの採否」も決断材料になりました。現在は下請稼業の悲哀を改めて味わいながら、地元に戻った縁を活かし「身の丈地域貢献」として千葉市都市計画審議委員、同下水道事業経営委員等を務めています。

振り返ると、社会工学的な進路を一通り経験し、裏街道ながら「社工個人メドレー」の人生を歩んできました。無駄の多い器用貧乏人生と揶揄されることもあります。が、「それも社会学」。そのアイデンティティの母体が看板を下ろすことに、寂しさを禁じえません。

1995年の桃源郷デザイン研究室

長田 啓
(1995卒、堀研)

本棚から1995年の学位論文梗概集を引っ張り出して眺めてみた。当時は友人たちの論文テーマに関心を持つ余裕もなかったが、改めて眺めてみると、社会学科が対象とする事象の幅広さと、今も色褪せない興味深いテーマの数々に驚かされる。

私の所属した堀繁究室（1993年～96年）は、入口に「桃源郷デザイン研究室」と掲示していた。メンバーの卒論テーマは、「戦後における我が国の水田の消長とその空間的影響に関する研究（渋谷猛）」、「我が国に於ける自然風景立地型車道の計画・設計コンセプトの変遷に関する研究（持齋康弘）」、「風景学的観点から見た江戸期の名木の成立条件に関する研究（末広明信）」、

「斜面地の公園的利用とそのデザインに関する研究（皆川佳芳里）」など、景観・デザインに関するものだった。

かく言う私は、公務員試験を受けるならがんばりなさい、と夏まで試験勉強を優先することを許され、最後の追込みも不発に終わり、記憶の限りでは、私の「いけばなの伝書にみる我が国の自然の価値認識とその表現手法に関する研究」は、長いタイトルながら、学科で一番薄い卒業論文であったように記憶している。多くの方にご心配とご迷惑をおかけした。

社会学科の講義は面白かった。堀先生は、「講義に出るくらいなら、現場に出て、目で見て考えたものをレポートにしてくれば良い」とおっしゃったが、スライドを多用した講義に引きつけられた。熊田禎宣先生の講義には毎回各界の一流がお目見えした。のちに全国知事会長も務めた岐阜県知事の梶原拓氏なども講師だった。

堀研究室では、小石川植物園で植物のレクチャーを受けたり、「大人の空間」の見学で、駒形どぜうの柳川鍋を御馳走いただいたりもした。中村良夫研究室の先輩や同僚とフランスの庭園・公園の見学旅行に行ったのも楽しかった。

普段は製図室で麻雀をしたり、ロビーで卓球をしたりと、息抜きばかりしていたが、時折青臭く、社会のあり方を議論したりもした。

卒業して環境庁に入り、国土庁に出向したりもした。人数こそ少ないものの、霞が関でお会いする社工出身の先輩方は人間的な魅力を持った方ばかりだった。そういえば、社工の後輩に出会ったことはない。

私たち95年の学部卒業生が在籍した社会学科は、今になって考えてみると、結果

的に半世紀続いた社会工学科の歴史の中の、ちょうど中間地点だったということになる。仲の良い同期にも恵まれ、心地よい時代であったと思う。

時代に取り組む社会工学

高嶋 裕一

(1999 D・宮島研)

——大いなる事物は、それについて沈黙されるか、でなければ大いに語られることを要求する。大いに、とは、嘲笑的に、しかも邪念なしに、ということである——ニーチェ

〈社会工学〉が大いなる事物、しかもそれについて沈黙されるべきものではないとして、私のできる範囲で——30年前の個人的な体験に基づいて、思い違いを恐れずに——「大いに」語ってみたい。

およそ30年前（ちょうど昭和から平成に移り変わるころ）の社会工学科を取り巻く世界は混沌を極めていた（今日ほどではないにしても）。チェルノブイリ原発が爆発し、それからほどなくしてベルリンの壁が崩壊、東欧諸国がドミノ倒しのように崩れていった。これらの事態について社会工学は教室の中で語ろうとしたが、結局はその意味を解明するには至らなかった。

社会工学科は、建築工学科、土木工学科とともに工学部六類を構成していた。その意味で、社会工学は都市計画、地域開発計画などの計画学的側面が分離・拡張したものと認識されていた。当時は〈国土の均衡ある発展〉をキャッチフレーズとする「四

全総」が真っ盛りだった。この計画はキャッチフレーズを裏切って東京一極集中を加速させ、地価がべらぼうに上がっていった。ジェットコースターのように急上昇した資産価格がその後奈落の底に突き落とされることになろうとは誰も（社会工学も）予想はしなかった。都市開発の費用便益分析は極めて疑わしいデータに依拠して行われねばならなかった。

私自身が恩師、宮島勝先生から学びつつ修士論文で取り組んだことは、公益事業の規制緩和の論理（自然独占の消失）であった。（今日の状況とは反対に）当時は諸物価が——バブルの影響もあって——高騰を続け、特に産業界から公共料金の内外価格差是正が要求されていた（為替レートは原因ではなく、競争制限的な規制が原因である、と経済企画庁は頑として譲らなかった）。当時は電々公社がNTTに変わってまもなくであり（NTT株の売り出しは当然バブルを助長し、蓄積された財政投融资資金が地域情報化計画などに流し込まれた）、ドコモの分離が予告されていた。

私が社会工学から得たものでは、今日のデフレ経済を解明するには、確かに歯がたたない。しかしこの時期にこのテーマを与えていただいたおかげで、今の問題意識につながっている。

過去の社会工学、 未来の社会工学

寺本 中

(2004卒、宮嶋研)

昨年は第4回社会工学科OB&OG懇話

会で「社会を工学するチカラが世界を変える」というテーマで講演させていただき、多くの諸先輩方と社会工学について議論し考えるきっかけを持つことが出来ました。その中で強く感じたのは、1960年代後半の創立当時における「社会」と「工学」という言葉の持つ意味やイメージは、平成が終わろうとしている2019年現在と全く異なるのではないかと、もっと言うところの先に待ち構える未来の社会と工学の意味するものとは根本的に思想も考え方も違うのではないかとという違和感です。想像するに、過去の社会変化に対して社会工学という学問体系が時代の流れや変化を正しく掴み、その変化に対して大学組織として学問体系や教育カリキュラムをタイムリーに変更することが出来なかった。これこそが、50周年の節目に大学から社会工学という名前がなくなった最大の理由だと感じています。

社会工学科は、1960年代後半の高度成長の真ただ中、重厚長大な産業が生み出す公害などの劣悪な「社会」的な課題に直面する背景の中で生まれ、その重厚長大な産業の生み出す社会課題を「工学」する学問として産声をあげました。いま私も40歳という年齢になり、社会の最前線で働く一人の社会人として社会と工学について考えるにあたり、私を感じるリアルな社会はAIやIoTなどを基盤とした「社会」であり、高度に設計されたテクノロジー（＝工学）が社会を形作っている。この、テクノロジーを基盤にした社会の課題解決をする学問こそが現代、そして未来の社会工学だと考えると、いまほど社会を工学する力が必要とされ、社会工学を学んだ学生やOB／OGが社会で活躍できる時代はないと心底感じています。講演でも話題に出しましたが、

世界時価総額の上位にはテクノロジーで社会を作り変えている企業が並び、私たちの生活には医療や教育などのインフラからエンターテインメントなどの個人活動まで、高度なテクノロジーが働き方や暮らし方、引いては生き方を決定する重要なファクターとなっています。その流れは、間違いなく今後一層加速する。疑いの余地はありません。

この50周年という節目を新しい社会工学の始まりと捉えると、東工大が理系単科大学の優位性をいかんなく発揮し、学内に溢れる数々の研究やテクノロジーを一手に集め、たとえ名前は社会工学という名前を冠していなくとも、それに代わる新しい組織や機関が社会課題を解決する形で社会に発信し続けることが出来れば、東工大は世界でダントツ一番の国際的な教育機関として活躍出来ると思いますし、未来の「社会を工学するチカラ」がその鍵を握っていると信じています。

広告代理店における社会工学の目線

菅 裕紀

(2007M・十代田研)

社会工学科50周年、そして記念誌発行、誠におめでとうございます。卒業生として心よりお祝い申し上げますとともに、私が社会工学を通して学び得たものをここに綴りたいと思います。私は現在、博報堂という会社で、メディアやコンテンツ産業といわれる領域への事業投資や事業企画を行っています。具体的には、放送局や球団といっ

た人達やベンチャー企業と新しい“仕組みを作る”仕事。“仕組みを作る”というと、大それたことのように聞こえますが、番組イベントなどの娯楽コンテンツを、より社会に役立つ事業に仕立てることに挑戦しています。

そうした中で、“仕組み作り”や“仕組みへの投資”において社工で学んだ目線が活かされていることに気づきました。それは、うまくいく“仕組み”には、「複雑なステークホルダーを最適なバランスに再編集できる仕掛け」が組み込んでいるということです。

例えば、日本一有名な会議として、プロ野球ドラフト会議というものがありますが、そのインターネットライブ配信事業は、たった三時間の会議に数千万円が動く事業となっています。そこには、事業権益を持つ機構、制作著作及び放映権に関わる放送局、肖像権等に関わる各球団、学生を管理する高野連、協賛企業、そして野球ファンと数多くの利害関係者が存在しており、それら全ての最適な利益バランスを計算し、最終的にファンと選手が喜ぶ仕組みがあります。報道のため、視聴率のため、企業のマーケティング成果のため、来場客の満足度のため、だけでなく、そこで得た事業収益を競技人口拡大のために、野球教室事業や部活管理アプリを提供しています。全体としての利潤の循環が組み込まれているため、誰かが利益独占することなく、結果として、毎年風物詩として、清宮君や根尾君といった球児に熱狂できる“仕組み”が成り立っています。

また別の仕組み作りの仕事において、ある投資家にベンチャー企業への投資基準を聞いたところ、「Nice to haveではなく、

Must beかどうか」をみていると教えられました。その企業だけが儲かる仕組みではなく、社会全体が求める仕組みがあるか、という意味ですが、“関与するすべての人の利益を最大化する最適な均衡点を設計できるかどうか”と私は解釈しました。

これは、“社会的総余剰を最大化させるために、社会の課題を発見し、構造化し、その解決方法を探る”社会工学の目線と通底すると思います。公共経済学から都市計画や景観デザイン、私が研究していた観光学にいたるまで、対象となる事象が誰の効用を最大化していて誰が不利を被るか、あるいはどの立場の視点が欠けているか、を常に問う学問であったと記憶しています。

この実学にも活きる視座や、全体最適を見極める目線を養ってくれていた我が社工がなくなってしまうことは寂しく感じますが、最後の卒業生達も世の中の全体最適解を探る仲間になってくれることを願いつつ、私自身も、より社会に貢献できる“仕組み作り”に邁進していこうと思います。今、もう一度授業を受けたらもっと学べたのになあという思いは胸にしまいつつ。

一言欄

社会貢献としての取り組み

田中 敏夫 (1974卒、石原研)

ゼネコンに28年間在籍しましたが、建設業に見切りをつけ平成14年に不動産鑑定事務所を立ち上げ現役です。力を入れているのは、民事調停の仕事です。東京地方裁判所と東京簡易裁判所の調停員を兼務しているため、常時10件ほどの不動産・建築事件等を抱えております。民事調停は我が国独自の紛争解決手続きです。調停には、専門性、経験、調整能力等が必要とされ、内心、

社会学の応用実践だと思い取り組んでいるところだ。

おおらかな時代

南山 和也 (1983卒、華山研)

残念ながら社工で学んだことを殆ど覚えていません。私は入学と同時に将棋部に入りました。いきなり麻雀を覚えさせられ、あっという間にハマってしまいました。それからは暇さえあれば(暇がなくても)将棋と麻雀に明け暮れました。単位は最低限の出席で取れるものだけ取り、5年かけて無事(?)卒業しました。今の制度であれば絶対に卒業できなかったと思います。おおらかな先生方、本当にありがとうございました。

遺伝子の継承を

小林 清 (1981卒、華山研)

東京都で36年間実務をやっても、社会学と実社会の関わりは何かと問われれば難しいテーマです。今後は、自分の中に少しでも社会学的なDNAがあるとしたら、公共政策をフィールドとする実務家教員として、自治体の職員や議員、民間企業人、NPO、起業家など、実社会で奮闘する多くの人たちに、ニュー社会学への道に繋げるべく、遺伝子を継承していきたいと思っています。

鈴木光男先生から届いたお手紙

社工誕生とゲーム理論

社工が50周年を迎えたかと思うと感慨無量です。私は、昭和40年(1965年)3月1日付けで、東京工業大学の一般教育課程の人文系に着任しました。そして、そのころ人文系にいらした、後に文部大臣になられた永井道雄先生、川喜田二郎先生等と、「社会学とは何ぞや」という様なことを一生懸命議論したものです。昭和42年(1967年)、社会学が誕生し、私はそちらに配置換えになり、計画数理、社会システムの2科目を担当しました。いずれもゲーム理論を基礎にするものでした。社会学の基礎として、ゲーム理論は重要な役割を果たすものと信じていたからです。それは私にとっては、ゲーム理論を基礎にした学問を構築する大きな希望の出発点でした。

それから50年、社会学もゲーム理論も大きく飛躍し、今では、なくてはならないものになりました。これからもますます学問の重要な基礎として発展していくことでしょう。

2019年2月17日

鈴木光男 (91歳)



50周年パーティの案内に鈴木光男先生から「残念ながら出席できません。皆さまによりしくお伝え下さい」と上記の手紙をいただいた。光男研の卒業生は「先生は参加されたかったのだろう」と恩師を思う。この手紙を見て、およそ30年前に開いた「鈴木光男先生還暦祝賀会」の写真を中山幹夫さん(1期生)が提供くださった。「TIT SOCIAL ENG」のTシャツ姿。その先生を囲む卒業生たちの若き姿も並ぶ。

「昔といま」を未来に伝えるもう一つの場

昔ながらの大岡山駅のプラットホームの向こうに、奇抜なデザインの建物「東京工業大学百年記念館」が見える。1987年（昭和56年）に開館、いまでは博物館として館内でさまざまな発明品などが並び、東工大の技術の歴史を伝えている。

百年記念館の開設は、「先端科学技術に取り組む態度や係わり方について、実社会にて様々な役割を果たしている先輩方と直接対話して学ぶことく人からの伝承」と、創出された技術や研究成果にある背景を具体的資料を通じて学ぶことく物からの伝承が、実現できる場が目的

だという。

博物館の附属施設として「資料館」が本館内3階にある（p.110で紹介）。ここの「公文書室」は、大学で教官らがさまざまな制度を作り、学生らが活動をした歴史を伝える。蔵前から大岡山に移ったのちの現存する最古の入試問題（1924年）や、のちに社会工学科を生む背景にもなった戦後学内改革を押し進めた和田小六学長の思い出などを紹介した「とっておきメモ帳」もシリーズで発行し、〈人からの伝承〉に一役買っている。これらの場所を一度訪れてみませんか。



「東京工業大学博物館・百年記念館」のパンフレット表紙より。



「資料館」の入り口。そこに「とっておきメモ帳」シリーズが並ぶ。



貴重な文書が集められ、スタッフらによって閲覧可能なように保存されている。

〈第4部〉
これから

■ 見つけた「未来志向のキーワード」

「これらの卒業生こそが、社会工学が作り出した価値であり、社会工学科は、この人たちの成長とともに発展していくことであろう」—。「東京工業大学百年史」（昭和60年5月発刊）の「社会工学科」の章では、最後（p.512）に卒業生の就職動向に触れたあと、このような言葉で結んでいる。

その卒業生たちが50年を経て、社会工学をどう振り返り、これからの社会工学についてどう語っているだろうか。社工会の役員会での議論や今回寄せられた原稿から語られた「未来志向のキーワード」の幾つかをここに挙げた。



役員会のなかで名簿作成担当として各期へのつながりをつくるために地道な努力を重ねた前会長の渡辺孝さんは、社会工学で培った**現実への「総合知」を求めて活動**していくことが、同窓の社会的な貢献だと言う。監事の渡辺美衡さんは「いつか再び大学が教育機関としての役割に目覚め、社会工学科再興の必要性を認識する日が来るまで、それまでの間は**細々とでも草の根ネットワーク**で卒業生が意欲ある後輩へ何がしか**自分の伝えられるものを伝えていく**、そういった自主活動が続けられないものか」と考えている。

社工会を今後どうするか、運営しやすい規約への改正論議に参加いただいた拡大役員会では高橋元美さんが「学科はなくなっても**社会工学のDNAは残っているはず**。社工会の活動を継続して社会工学の**火が消えないようにする**」と社工会の役割を指摘した。

同じく拡大役員員の野木政宏さんは「社会に出る第50期生が同窓会を通じて、様々な分野で活躍されている方と**コミュニケーションする場**があることは意味がある。社工会はまだまだ存続し、幅広く発信していくことは大いに求められている」という。公務員生活にピリオドを打ったという室田哲男さんも「今後も**現場主義、学際的という社会工学の発想**を活かしつつ、ライフワークとして防災・危機管理の問題に取り組んでいきたい。**学科はなくなっても、社会工学という学問がなくなるわけではない**」と一緒に学び議論する場ができることを期待する。



次の世代に何を伝えるか。社工会総会パーティで、1期生、社工会の初代会長・林亜夫氏（右）と21世紀卒の寺本中氏は意気投合。（2018年5月、寺本氏提供）



「国境を越えて人々の共感を与えるのは音楽だ」と、いま声楽家を目指す5代目会長の石井望氏。

「ニュー社会工学への道」のディスカッションに連続登壇した西村真さんも「**柔らかく粘り強く活動する人脈をつなぐプラットフォームの一つとして**社工会も続いていけばよい」とこれからに向けた場づくりを提案した。

やはりディスカッションに参加した松本香澄さん（88年卒）は記念誌の編集委員に加わり、寄せられた35編から、社工を伝える「未来へのキーワード」を彼女のセンスで抽出してくれた。誌面の都合で以下の12人しか紹介できない。が、あとは皆さんで、別の道をたどった仲間たちのメッセージを味わってください。

筆者(敬称略)	社工を伝えるキーワード
宇治川 正人	これからの建築・都市空間や社会計画は、心の活力や安寧につながる解が必要。
斎藤 誠治	社会の諸問題に工学的センスをもって対処することが社会工学。私の人生は「それでも社会工学」。
高梨 竹雄	公共倫理とそれを支える道徳的行為。
浜松 誠二	諸般の事象について事実に基づく判断をし、必要に応じて異議申し立てる。
三宅 勲	コンプレックスな大型プロジェクトを初期の段階で幅広く見る総合的視野、起こりそうな問題点を早めに掴んで対応策を検討しておくリスク管理。
石井 望	どんな所、どんな状況にあっても、しっかり考え行動していけば必ず道は拓ける。教えてくれたのは「社会工学とは何か」という結論が出ない仲間との議論。
鈴木 利徳	社会に出て、諸々の問題に直面したとき、学際的でありたい、現場視点を大事にしたいと思いつけて生きてきた。学んだことは問題に対処するときの「姿勢」。
佐野 郁夫	数理分析などの分析手法が存在する、データを集めてその分析を意思決定に繋げるスピリッツ。
上関 克也	いろいろな課題に対して多様なアプローチの仕方があり、それらの手法に触れること。
木村 敬三	物事を多角的・長期的に捉え、将来的な問題発生を芽を摘む。それが「社工的」思考。
水野 雅男	社会工学の原点は、地域社会の現場を観察すること。
堀添 健	価値観が多様化、社会が複雑化する中、理系的な手法や観点で社会の課題に取り組むことを学べる学科の必要性はますます増している。

「50年に寄せて」には、87年卒の前澤新さんが文字通り「未来志向で頑張りましょう」とのタイトルで、「OB・OGが各界で社会工学科のDNAを拡散させていく。社会工学科で学んだことを礎に、より良い国家、より良い地球を目指し、頑張りたい」と意志表明している。「21世紀」に卒業したOB・OGたちも社会に挑戦し活躍中。記念誌にも積極的に「未来の社会工学」を語った一文を寄稿してくれるなど、未来につながるころざしを大いに読み取っていききたい。

(編集部)

■ 資史料館からのメッセージ

広瀬 茂久

(博物館 資史料館部門 特命教授)

混迷の世界の救世主は社会工学

私たちの母校である東京工業大学では、2016年（創立135〔= 2016-1881〕年目）に教育研究体制の大改革が行われました。同窓生や一般人に馴染みの深かった“学科”が消え、“系”として整理されましたが、見かけ上、廃止されたように見える学科もあります。その代表例が「社会工学科」でしょうか。ウキペディアには、「(…日本を代表する学科だったが)、環境・社会理工学院開設にともない、現在は改組し消滅」と書かれています。

大学には真理の探究という大切な役割の他に社会から期待されているもう一つの役割があります。それは、社会の成熟度と関係しますので、しばらく前までは“ものづくり”と“ひとづくり”でしたが、これからは“社会創り*”という難しい課題に取り組まなければなりません。あるべき社会とその実現に向けた方策を総合的に提案するのは確かに難しく、従来の社会工学の枠を超えるとみなされたのでしょうか、2016年の改組では社会工学が消え「融合理工学系」が登場しました。しかし傍目には、ビッグデータの集積と人工知能（AI）の高度化が驚異的なスピードで進みつつある現状を考えると、これまでが社会工学の助走期間で、ビッグデータやAIの力を借りることが出来るこれからこそが真の出番のように思えてなりません。さらに、私の専門だったバイオ系の進歩は、生命体が時々刻々と変化する外的環境や病原体の侵入に備えつつ、何十兆という細胞集団の活動を調和させる複雑精緻な仕組みを明らかにしています。この仕組みは、何十億人を調和させることになる社会の仕組み作りに大いに参考になるのではないのでしょうか。こう考えると、そう遠くない将来に社会工学は東工大に蘇ると期待できます。その日に備えて、これまでの社会工学科とそこで学んだ人たちの足跡をしっかりと残しておきましょう。ぜひ資史料館をご活用ください。

*2018年3月20日に“指定国立大学法人”になった本学では、その責務を果たすための方策の一つとして、「未来社会DESIGN機構」を学長室に設置し、2018年9月から活動を開始しています。

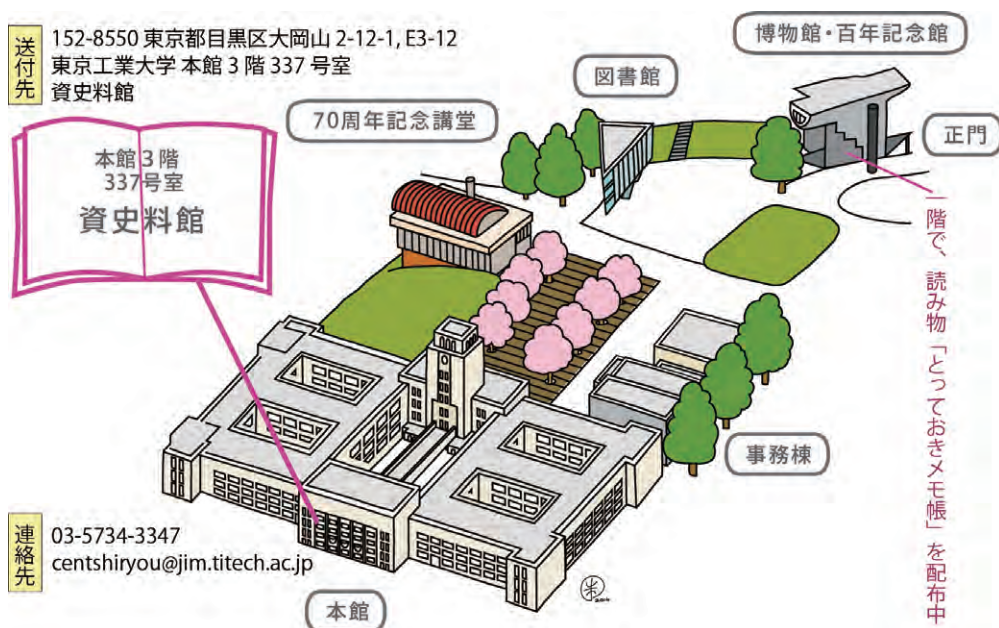
貴重な歴史資料を資史料館へ

2013年4月に、待望の資史料館が設置され、博物館と一体運営されています。本学の歩みと我が国の工業教育史をしっかりと記録し公開することにより、関係者の精神的な拠りどころにするとともに、明日を切り開く活力の源にもなるような施設

を目指しています。資史料館の活動としては、資史料の収集のみならず、寄贈資料等を読み解き、先人の仕事とそれに込められた思いを分かり易い形で伝承していくことにも力を入れています。

社会工学科に関しては、これまでに次のような書類が寄贈され、学科や同窓会の主要な活動を辿ることができるほか、第三の学部として社会工学部が真剣に検討されていたことが分かります：(1) 坂野達郎先生経由で寄贈された鈴木光男先生が保存しておられた書類（PDF化済）：「社会工学部設置案メモ」、「東京工業大学の改組拡充計画（案）—社会工学部〔社会工学科・情報工学科・経済工学科〕」など多数の文書類、及び(2) 社工会の佐藤年緒会長が寄贈された「社工会誌1～7」、「社会工学科設立過程の図解 & 展開」、「社会工学科設立20周年記念誌(1987年3月)(PDF化済)」など。

世界に冠たる地位を築き上げてきた本学の社会工学科の歴史とそこで学んだ人たちの足跡を後世に残すために皆さんの手元にある以下のような資料の寄贈をお願いします：アルバム・部誌・寮誌・文集・自分史・年史・学科等の改組や新設の資料・学内会議の議事メモ・キャンパスの写真・工大祭やすすかけ祭など各種イベントのポスターやパンフレットなど。それらは次世代を育む土壌を肥沃にしてくれます。下記宛に連絡の上、着払いで送付いただければ幸いです。



第50期の学部卒業生に贈る言葉

社会工学学科長 樋口洋一郎 教授 (第8期、1977卒)

社会工学は大学からは消え去りました。

確固たる教育カリキュラムも学会も残せませんでした。

しかし、社会工学はまだまだ生きています。

卒業生諸君がビジネス社会で幾多の問題に立ち向かっていくでしょう。

それを仲間と共に目標に向かって知恵を絞っていくことが

社会工学だと信じています。

目標達成が社会のどの部分に対してどのように役立つのかを

いつも考えていれば、

それこそ piecemeal-engineering 漸進的社会工学になっているはずです。

学者のように一途にならず広く社会に目を配りながらいれば、

きっとそうなると信じています。



終わりに 謝辞と「これから」

役員会事務局

2016年5月以来、社工会の役員会は十代田研究室が事務局となり、運営に当たり十代田、津々見の両先生をはじめ研究室の学生の皆さんにも多大な力をいただきました。各期を代表する評議員（2016年度まで）をはじめ、自主的に加わっていたいただいた拡大役員会の皆様にも、これから

の社工会の方向性をめぐる検討、総会や関連行事、規約改正、記念パーティー、記念誌発行などの打ち合わせに何度も足を運んでいただき、心より御礼を申し上げます。事務局の2人の先生に、3年間の振り返りを含む謝辞をここに掲載いたします。（編集部）

社工への愛や葛藤も伝わってくる

事務局長 十代田 朗（1985年、東工大准教授）

正直驚いた。今回の記念誌の原稿に関しては、期間が短かったこともあり、正直言って集まるかどうか非常に不安でした。ですが、蓋を開けてみると、非常に多くの原稿をいただきました。内容も社会工学の多様性を示すように、多種多様な角度から書かれていて、示唆に富むものばかりでした。また、皆さんの社工への愛や葛藤も伝わってくるものでした。

一社会工学科出身者として一言だけ。今回の50周年記念パーティーとほぼ同時進行で、「鈴木忠義先生を偲ぶ会」の企画に関わらせていただきました。ご存知のように鈴木先生は社工草創期のメンバーの一人ですが、その足跡を辿っていく中で、改めて鈴木先生の社会工学科に対するお考えにも触れることとなりました。

その基本的姿勢は、現場主義で、理論に支えられた研究者よりも既存学問の枠を超えた多くの実務者、計画技術者を育てること



を目標とされていたように思えました。こうした社会工学の持っている姿勢は最後まで貫かれていたと思います。ただ、現在の東工大が掲げている方向性とは少し異なるため、社工は一旦の幕引きとなりますが、その必要性が再認識される日は遠からずと考えている。

と同時に、この3年間、社工の事務局長として、同窓会関係の会議に出るたびに社工はネットワーク的なつながりが弱いと感じます。皆さんが社会で活躍する分野が多岐にわたっているためお互いに交流機会が少ないからでしょうか。社工会が心不全状態に陥ったのは、そのことが大きな原因だと思います。しかしながら、現代は社工が誕生した時と同様、あるいはあの時代以上にイノベーションが様々な分野で求められています。今こそ、形は変わるにしても社工OBOGのネットワークは何かを生み出し変えていく力があると信じています。

最後になりましたが、編集の労を執っていたいただいた佐藤会長をはじめ編集委員の皆様には、立派な記念誌を短期間で仕上げてください、大変感謝申し上げます。事務局としては頭の下がる思いであります。ありがとうございました。

日々、他流試合の精神を忘れずに

事務局 津々見 崇（東工大助教）

2016年の総会以来、会を盛り上げることにご尽力いただいた役員の皆様、また企画や編集の役を引き受けて下さった拡大役員の皆様には心よりお礼を申し上げます。

私自身、卒業以来事務局をお引き受けするまでのおよそ20年間、社会工学会活動にほとんど関わらないで過ごし、分科会や支部といった活動が盛んであった往時のことをイメージするのが



難しかったのですが、この3年間に役員の皆様のご尽力により実現したディスカッション、OB & OG 懇話会、そして50周

年記念パーティーに対し、毎回多くの卒業生の方々からご参加・ご注目をいただき、驚きの連続でした。皆様にはこうしたイベントを通じ、社会工学という学問の持つ価値を今あらためて詳らかにして下さったのだと感謝いたしております。

社会工学は現実社会と向き合う実学であり、またそれゆえ日々他流試合を続けることが求められる学際的な学問であります。これから身を置く新しい環境の中でも怯まずそれを続け、新たな“社会工学的なるもの”の芽を見つけ育てていくことが、社会工学を卒業した者の責務だと肝に銘じて進みゆきたいと思っております。

最後に、社会工学の50年を支えて下さった全ての皆様に、改めて一個人としてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

社会工学会事務局

〒152-8550 東京都目黒区大岡山2-12-1 W8-15
(東京工業大学 環境：社会理工学院十代田研究室内)
メール：syakoukai@sun.mei.titech.ac.jp

わたしたちは

社会工学会 — 東工大社会工学科・専攻同窓会
<https://syakoukai.weebly.com/>
のホームページで発信しています。

また、あなたをお待ちしています。

「社会工学会」でネット検索すると、すぐに見つかります。
この50年記念誌は、カラー版 (PDF) として社会工学会のホームページからも読むことができます。

〔役員会〕

会長・佐藤年緒、副会長・池野朋彦、監事・渡辺美衡、事務局長・十代田朗（准教授）、事務局員・津々見崇（助教）、名簿整備担当・渡辺孝

〔拡大役員会〕

林亜夫、高梨竹雄、和泉潤、高橋元美、青木陽二、角田光男、名執芳博、高橋章、野木政宏、上関克也、横目順、小林清、小川晃範、室田哲男、水野雅男、栗橋寿、西村真、松本香澄、長田啓、宮下賢一

〔記念誌編集担当〕

佐藤年緒、青木陽二、横目順、上関克也、室田哲男、西村真、松本香澄、宮下賢一

資料編

資料 1

社工会誌第1～7号で伝えてきた内容

社工会が1978年5月から1986年1月まで発行した冊子。東工大博物館資史料室に収蔵されています。表紙の写真はいずれも山田圭一教授（後に筑波大学社会学系教授）が提供くださいました。目次は以下の通りです。

目次

社工会誌創刊にあたって 会長 林 憲夫 1

社会学科の10年を顧て 石原 昇介 3

社会学科との係わり 渡辺 孝 6

谷田部町から社会学科卒業生の皆様へ 青木 隆二 9

社工「番外生」のその後 角田 光男 11

三度目の春を間近にして 名鉄 芳博 16

コンサルタントの適性について 安島 博幸 19

産原製作所商品営業部 松林 弘 22

この一年を振り返って 高田 和彦 27

地方自治体で社会学科をどうにかするか
すか（横浜市役所の職員として） 五島 哲男 28

卒業生の進路（会員の所属別統計） 22

社会学科学位、学士論文題目一覧 23

会員の異動 24

新会員の紹介 24

定款事項等 24

報告事項 25

10周年記念祝賀会 25

第1回総会の断片 26

53年度役員、評議員候補者 28

編集後記 29

（表紙写真：エベレスト 山田圭一教授撮影）

社工会誌1 1978.5

目次

＝ 特集・東工大教育の流れと社会学科の設立 ＝

東工大と工学教育 大山巖先生遺稿集
「社会学科の重鎮様」より 1

＝ 会員投稿 ＝

近 況 前 木 光 男 10

公務員になって 渡 辺 文 雄 10

よい母になるために 小 川 正 樹 12

＝ 昭和53年度総会議決より ＝

研究者の舞台裏 中 村 良 夫 14

＝ 博士論文紹介 ＝

博士論文感想 中 村 龍 二 郎 20

科学技術者の高等教育に関する研究 荒 井 克 弘 22

中心商業地の集約の構成と
歩行者の動きに関する研究 深 海 隆 恒 23

＝ 職場紹介 ＝

筑波大学社会学系について 林 憲 夫 26

＝ 海外報告 ＝

中国の都市交通 肥 田 野 登 28

報 告 事 項 32

編 集 後 記 33

表紙説明：前掲ゴジラの大型空（フランス）
撮影 山田圭一 元社会学科教授
現筑波大学社会学系教授

社工会誌2 1979.3

目次

◆ 特集 ◆

社会学科卒業生の就職状況について 林 憲 夫 1

シンポジウムとはこんなところ 宮 城 隆 一 8

◆ 講演会要約（昭和54年度総会より） ◆

計画資料館建設への誘い 45年卒有志 16

国際応用システム分析研究所に学んで 浦 谷 俊 18

◆ 雑 感 ◆

高 橋 芳 明 20

論文 ◆

昭和55年社会学科部修士論文題目一覧 22

大都市圏を対象とした宅地供給計画策定の
ための政策効果の計測方法に関する研究 新 井 健 24

A Study on green effects
and composition in urban
residential areas 大 森 基 26

都市河川における環境イメージの解析方法
に関する研究 北 村 真 38

◆ 会員の近況 ◆ 40

◆ 会員の移動、その他 ◆ 42

表紙写真：マッターホルン北壁
撮影：山田圭一 筑波大学社会学系教授

社工会誌3 1980.7

目次

社工会誌4
1981.9

◆ 特集 ◆

卒業生の意識調査について 社工会 林 憲 夫 1

◆ 会員投稿 ◆

◆ 十年を振り返って ◆ 齊 藤 誠 治 21

◆ 「中島川を守る」市民運動と出会う ◆ 佐 藤 年 緒 22

◆ 総合電機メーカに就職して3年目
ー忙しさに慣れて新たな視点ー 小 宮 隆 25

◆ 海外シリーズ ◆

◆ アジア工科大学校「人間居住開発学科」 ◆ 梶 秀 樹 27

◆ 留学感想 ◆ 小 山 良 夫 30

◆ 強烈な開拓精神 ◆ 菅 原 雄 32

◆ 論文題目 ◆

56年度博士論文 33


56年度修士論文 33

56年度卒業論文 34

◆ 会員の近況 ◆ 35

◆ 役員改選について ◆ 林 憲 夫 38

◆ 編集後記 ◆ 39



社工会誌4 1981.9

目 次		社工会誌 5 1983. 3
● 会長あいさつ	岡 部 聡	1
会員投稿		
● 実践の四季	青 木 陽 二	2
● アメリカに留学して	渡 辺 文 雄	3
● うるわしき愛社精神	吉 永 冬 彦	6
● “国際文化交流に関する体験的雑文”	柴 野 伸 幸	8
田島官だより		
● 林雄二郎先生		11
研究室だより		
● 原研究室		14
● 石原・保壽研究室		16
● 熊田研究室		18
● 華山研究室		20
● 中村・渡辺研究室		22
● 阿部研究室		27
● 宮嶋研究室		30
論文題目		
● 57年度		31
● 58年度		32
● 会員近況		35
● 編集後記		39

社工会誌 5 1983.3

目 次		社工会誌 6 1984. 3
● 巻頭言	阿 部 聡	1
総会議演		
● 問題解決学の本道	川 藤 田 二 郎	3
● 社会工学の方法論について	永 井 道 雄	19
旧教育を研んで		
● 谷口汎邦先生		27
● 菅原 操先生		28
研究室だより		
● 原研究室		31
● 石原・保壽研究室		33
● 熊田・原科研究室		35
● 華山研究室		37
● 中村・渡辺研究室		39・41
● 阿部研究室		44
● 宮嶋研究室		45
論文題目		
● 58年度修士論文		47
● 58年度卒業論文		47
● 会員近況		49
● 編集後記		55

社工会誌 6 1984.3

目 次		社工会誌 7 1986. 1
● 巻頭言	石 原 舜 介	1
特集「私の軌跡」		
● 人の顔が見える計画を	岡 松 誠 二	2
● リクルートマンへの転進	角 方 正 幸	5
● 自動車産業の「イノベーション」を目指して	藤 下 光 泰	6
ニュース		
● 部先生教授昇進		9
● 英語版「現代の土地神話」米国で出版		10
研究室紹介		
● 原研究室		11
● 熊田研究室		13
● 原科研究室		15
● 華山研究室		17
● 渡辺研究室		19
● 保壽研究室		21
● 中村研究室		23
● 肥田野研究室		25
● 宮嶋研究室		27
論文一覧		
● 59年度卒業論文		29
● 59年度修士論文		30
● 59年度博士論文		31
● 最近の動き		32
寄 稿		
● 中曾根首相会見記		34
● 阿山前での調査		34
● フクターコース登壇記		35
● 編集後記		36

社工会誌 7 1986.1

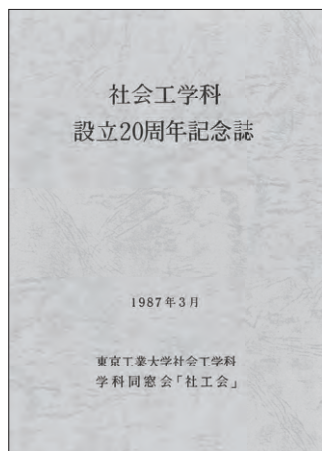


「社工会誌」の表紙は、山岳写真家でもあった山田圭一教授が提供くださった。創刊号の写真は「エベレスト」。7号まで本誌の裏表紙に掲載してあります。

社会工学科設立20周年記念誌

1987年3月発行、東工大社会工学科、「社会工」発行

東工大博物館資料室に収められ、内容はPDFとして保存されています。また、社会工のホームページからも閲覧ができます。<https://syakoukai.weebly.com/>



目 次

はじめに

- あいさつ 学科主任 熊田禎宣 … 1
 朋よ、祭の場に來たれ 社会工会長 角田光男 … 3

祝 辞

- 社会工学科の20周年のお祝い 学長 田中郁三 … 4
 社会工学科20周年を祝して 学部長 末松安晴 … 5

創設期から振り返って

- 創設前夜 永井道雄 … 6
 社会工学科への期待 阿部 統 … 8
 社会工学科の回顧と展望 石原舜介 … 9
 社工生はハイブリットか 鈴木忠義 … 11
 情報化の中で見落としているもの 林雄二郎 … 12
 生きている社会工学部構想 鈴木光男 … 14

学科はいま

- 社会工学科の昔と今 原 芳男 … 16
 新カリキュラムの紹介 原科幸彦・渡辺貴介 … 20
 論文梗概集におもふ 矢野真和 … 26
 社工卒業生の就職先 肥田野登 … 28

研究室紹介

- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| 社会工学講座 原 芳夫教授 … 31 | 資源・環境計画講座 渡辺貴介教授 … 40 |
| 社会工学講座 矢野真和助教授 … 32 | 地域計画講座 中村良夫教授 … 42 |
| 都市計画講座 深田隆恒助教授 … 34 | 地域計画講座 肥田野登助教授 … 45 |
| 計画数理講座 熊田禎宣教授 … 36 | 交通・経済計画講座 宮崎 勝教授 … 47 |
| 計画数理講座 原科幸彦助教授 … 38 | 華山先生を偲ぶ 原科幸彦 … 49 |

卒業生はいま

- | | |
|---------------------------------|----------------------------------|
| 情報化社会の中の「社会問題」 高井克弘 … 51 | 社工魂 西村 真 … 61 |
| 情報都市づくり 山本慶介 … 52 | 大蔵省と社会工学 池田 潤 … 63 |
| ソングレフ、耐えてCD-ROM 高橋幹夫 … 55 | 運転士を目指し特訓中 池野朋彦 … 64 |
| 全体を見る目 山田道雄 … 56 | 筑港運いの楽しみ 青木陽二 … 65 |
| 入省13年 熊谷 清 … 59 | ニューヨーク・国遊に戯れて 高尾直樹 … 67 |
| まちづくり最前線にて 木村敬三 … 60 | 「国遊」-スリムカから帰国して 野田健太郎 … 68 |

「専門家の倫理と学際」

(原科幸彦、東京工業大学大学院総合理工学研究科要覧
創設40周年記念特別号 p.113、2016.3)
http://www.igs.titech.ac.jp/outline/40th_20160329.pdf

7 歴代研究科長の言葉

専門家の倫理と学際

原科 幸彦

【専門家の責任】

本学は戦後、戦時中の反省に立ち新たな出発をした。社会の動きをよく理解し、専門家としての責任を果たせる人材育成を目指した。社会工学はその理念から生まれたが、総合理工学も社会との関係を考え、タコツボを排する学際的な教育・研究を行う大学院として生まれた。適切な判断力を持つ人材の育成が目標であり、教員にもその資質が求められる。

本研究科の教員が適切な判断をした一例に、東日本大震災直後の計画停電への対応がある。停電対策として各研究科で土日開講、連休返上の授業時間への変更が検討されたが、私は学際的に視野広く考えれば、変更は不要だと説明し、教授会で理解が得られた。判断は正しく、5月の連休にボランティア活動で東北に行った学生は本研究科が突出して多かった。

【学際大学院】

研究科の40年の歴史を振り返ると、前半は学際大学院の先駆けとしての確立期であった。学部とは直結させず、個々の学際専攻には大岡山の多様な学科の卒業生が進学することを想定し、加えて幅広く国内外からの優秀な学生も受け入れるという開かれた思想である。

独立大学院とは大岡山の各学部から全く独立という意味ではない。むしろ、学内の多様な学科との緊密な結びつきが前提であった。研究科の3領域、11専攻は学部生の大学院進学の際、その選択の自由度を高める受け皿である。

そして、学内の研究所等の支援も得られる組織構成とした。研究科固有の基幹講座と、研究所やセンター等の協力を得る協力講座からなる斬新な発想であった。専攻名からも学際的な学問領域を切り開く意欲が読み取れる。

個々の学際専攻は博士教育に重点をおき、通常、分野あたり博士入学定員は1名だが、2名という意

欲的なものとした。これは充たすべき定員ではなく、必要に応じ受入れても良いという人数であった。

【創造大学院】

後半は、博士課程教育に重点を置いた創造大学院へと転換し、1999年に完了した。その際、3領域の一つずつ置いた創造専攻は、博士定員を分野あたり3名とした。これは、3名までは受入れ可という弾力的な対応をする意味だったが、法人化後はこれが義務と解釈され、当初の意図とは異なってしまった。

研究科長就任前に、教員当たりの博士学生指導数を調べたが、本研究科は1.7名。大岡山は1名を切っていたので、大岡山のほぼ2倍であった。創造大学院の面目躍如の結果だが、3名という過大な数字には届かない。3名は、研究科設立時に各分野に課された義務ではなかったのだから、評価の仕方が間違っている。

例えば、大岡山から来た某教授は、すずかけ台で多くの博士を育てることができた。それぞれ14年ほどの期間だが、大岡山では10名の博士、こちらでは30名を超えたという。明らかに本研究科は博士教育の成果を上げてきた。

【専門家としての倫理教育】

だが、間違った評価でも批判があれば対応せざるを得ない。研究科長に就任した2010年には、創造大学院を発展させるため複合創造領域が設置された。重視したのは、グローバル人材としての国際性と学際教育による広い視野、そして、専門家としての倫理教育である。そのために、「科学技術者の倫理」という授業を作り、私が責任担当した。

東日本大震災と原発事故後、科学技術に対する社会の目は厳しい。職人気質のエンジニアを輩出してきた東京工業大学は社会の信頼を得てきた。その伝統の継承に、専門家としての倫理教育は特に重要である。大切なのは幅広い視野を持たせることであり、本研究科の学際教育は成果を上げてきた。

2016年度からは、総合理工学研究科も社会工学科もなくなる。積み重ねてきた多くの成果が、学内の各所で生かされることを祈りたい。

「社会工学と学際教育」

(中井 検裕、日本不動産学会誌・第28巻第4号、2015.3)

設立30周年記念特集 不動産学の30年の成果と将来展望【論説】

社会工学と学際教育

Social Engineering and the Interdisciplinary Education

Norihiko NAKAI : Tokyo Institute of Technology

中井 検裕*

1. 東京工業大学工学部社会工学科

「社会工学」という聞きなれない名称の学科が東京工業大学（以下、東工大）に設けられたのは、1967年4月のことであった。当時は、高度経済成長の真っ只中で、同時に、社会の多くの側面で、都市、交通、公害、環境などの問題が顕在化した時期でもあった。東京工業大学百年史によれば、この頃東工大では、単一学部（理工学部）から複数学部への拡充が検討されており、その1つとして、社会工学部の構想があった。

当時の資料では、社会工学部構想として、

(1)…理・工学の専門分野の調和ある発展をはかるためには、人文・社会科学と関連した総合的研究と教育をおこなうことが必要である。
(以下略)

(2)…理・工学と人文・社会科学と総括した概念をもって社会の機構を分析し、その上に立って社会の発展をはかるための理・工学的技術の研究開発をおこなうことである。そのためには人文・社会科学の分野から理・工学分野に近接する境界領域に開発研究が必要である。(以下略)

と述べられている。結果的には、学部ではなく工学部の一学科として社会工学科は誕生したが、その目的は、「社会生活の開発計画に活用しうる人材の養成を目的とし、専攻分野の学問的基礎を確立するばかりではなく、今日わが国が直面する都

市開発、公害対策、地域格差是正などの緊急課題の解決にも、関係する諸学科と協力して貢献しようとするものである」とされている。

発足時には、社会工学（基礎）、開発計画、計画数理、産業計画、地域計画、資源計画の6講座が設けられ、スタッフは8名で出発した。講座名のほとんどに「計画」が入っており、当初は明らかにいわゆるプランニング・スクールを意図していたと思われる。ちなみに第1回の学科所属は、定員40名に対して志望者73名と、建築学科や土木工学科よりも倍率は高かったと記録されている。

その後、50年近くが経過し、スタッフ構成はもちろんのこと、講座編成も大きく変わった。とりわけ大きな変化は、1996年の大学院重点化であり、この時に社会工学の大学院組織は、理工学研究科から新たに誕生した大学院社会理工学研究科へと移行した。社会理工学研究科は、理工系中心の東工大にあって、文理融合を看板に掲げた研究科であり、社会工学専攻のほか、人間行動システム専攻、価値システム専攻、経営工学専攻の4専攻によって構成されている。現在では専攻・学科紹介を、以下のように行っている。

社会工学は社会の問題を理工学そして人文社会科学の様々な知恵を用いて深く考え、最も適切な方法で解決する学問です。学問は対象と方法論、つまりどのような対象にどのようなアプローチを取るかで決まります。

「対象」は何でしょうか？ 社会学は社会を対象にしています。従って、人間、コミュニティー、会社、政府、NPOなどの組織、そして、自然、土地などの環境も対象になります。

「方法論」は何でしょうか？ 「社会学」は理工学だけでなく、人文社会科学も基本におきます。特に、人間と社会の関わりの方則性を厳密に把握し理解するために、理工学からは最適化理論、確率・統計、ゲーム理論、計算機科学などの数理科学が、そして人文社会科学からは経済学、心理学、哲学などがその基礎となります。

「方法」はどのようなものなのでしょうか？ 「社会学」は、人文社会科学や理学のように対象を観察して観察結果を抽象化し理論化するだけでなく、それを実験（被験者を用いた実験、そして計算機実験）や社会調査などを通して検証し、理論にフィードバックするとともに、工学

的に現実に切り込んで新しいものを創造していきます。ここで創造されるものの定義は広く、たとえば、地域や国の経済・社会制度、国内・国外の政策、法律、さらには景観など多くのものを含みます。

(http://www.soc.titech.ac.jp/info/cat42/detail_108.htmlより)

このように社会学は、それよりもやや歴史が長い東京大学の都市工学とは異なり、対象は社会、方法論は理工学だけでなく、人文・社会科学も含むという点が特徴である。

2. 学部教育

最も初期の1969年度のカリキュラムは、表1のとおりである。なお、東工大では伝統的に学部2年を第3学期、第4学期、3年を第5学期、第6学期と呼んでおり、専門学科所属は第3学期始め

表1 1969年度のカリキュラム

	講義科目			演習・実験・卒業研究
第3学期	統計学概論第1 計画数理第1 社会構造論	基礎工業数学第1 建築史概論 比較文化論	地区設計第1 経済学原理第1	工業力学および演習 社会学製図 社会学演習第1
第4学期	統計学概論第2 社会調査	計画数理第2 経済学原理第2	地区設計第2 都市計画史	社会学設計製図第1 社会学演習第2
第5学期	都市計画第1 産業計画第1 産業技術	宅地造成工学第1 社会動態論 経済開発	計量計画 社会学原理第1 建築環境工学概論	社会調査実習 社会学演習第3 社会学設計製図第2
	(以下都市計画コースのみ) 土木測量学第1 建築構造学概論 (以下社会・経済コースのみ) 工業立地 確率過程論第1			確率過程論第1演習
第6学期	都市計画第2 社会学原理第2 都市社会学	建築設備概論 経済計画	産業計画第2 都市計画第3	社会学演習第4 社会学設計製図第3
	(以下都市計画コースのみ) 宅地造成工学第2 地区設計第3 構造解析第1 鉄道工学 (以下社会・経済コースのみ) 自動制御原論第1 確率過程論第2 計量経済学			宅地造成工学演習 確率過程論第2演習
第7学期	電子計算機概論 経営システム工学	社会システム分析 観光計画	社会資本論 OR	環境工学実験 社会学設計製図第4 社会学演習第5 卒業研究
	(以下都市計画コースのみ) 地区設計第4 都市計画第4 都市経営 道路工学 都市防災 (以下社会・経済コースのみ) 計算機応用 産業経済学 工場計画			
第8学期				卒業研究

(つまり2年の始め)に行われる。

社会学科の教育はコース制をとっていた時期とそうでない時期があるが、初期には、都市計画コースと社会・経済コースがあった。科目の大部分は計画技術関係の科目であること、経済学原理や社会構造論など、社会科学の基礎原論科目がカリキュラムの始めの方に配置されていること、高学年ではシステム工学のように、(当時の)総合科学系科目が配置されていることなどの特徴が見られる。また、建築学について、環境工学、設備、構造、歴史と一通りの基礎科目が含まれているのは、学科設立の母体の一部が建築学科であったということから、建築士の国家試験資格を意識したものと思われる。

設立以来50年近い時間の経過の中で、社会学科のカリキュラムも大きく変化してきた。現在は学部・大学院ともに「公共システム」「時空間デザイン」「制度設計(経済学)」の3プログラム制と

しており、学部のカリキュラムは表2のようになっている。

全般的に、建築・土木を基礎とする空間計画系の科目は減少し、経済学や経営学系の科目が増えているが、これは社会学科に進学する学部1年生の専門領域を拡大したことに一因がある。もともと東工大は類別入試という方式を採っており、社会学科は長く建築学科、土木・環境工学科とともに6類(建設系)を構成する1学科として、所属学生も原則として6類からのみとしていたが、2008年度から1類(理学部)を除く工学部の全類からの進学を可能となるよう変更した。その結果、現在では定員の6割程度が建設系の学生で、その他は、機械系、生命系、化学系など、学生のもとの指向は多様な構成となっている。こういった学生は必ずしも空間計画に関心があるわけではなく、東工大学生の特長である得意な数理を活かして社会を解明したいという気持ち強い。

表2 社会学科の2014年度カリキュラム

	科目名		
第3学期	<ul style="list-style-type: none"> ■◆ミクロ経済学第一 ●ランドスケープ概論 ■◆非協カゲーム理論 ■確率と統計(情報工学科) 	<ul style="list-style-type: none"> ●空間計画設計演習第一 ●近代建築史 ●人間環境の計画史 	<ul style="list-style-type: none"> ■◆●社会科学のための応用数学 ◆●都市計画概論 ■◆●プログラミング基礎
第4学期	<ul style="list-style-type: none"> ■◆ミクロ経済学第二 ●空間計画設計演習第二 ●国土・地域計画論 ●住環境計画論 	<ul style="list-style-type: none"> ■◆マクロ経済学第一 ●景観学概論 ■◆協カゲーム理論 ■◆学習メカニズムの数理モデル 	<ul style="list-style-type: none"> ■◆●統計学(社工) ■◆●歴史方法論 ■◆●プログラミング応用 ●空間システム特別演習第一
第5学期	<ul style="list-style-type: none"> ◆●公共システム分析 ■◆計量経済学入門 ■◆マクロ経済学第二 ■経済成長論 ■◆サンプリング理論と実験計画 ■◆地球環境モデル論 ●社会学計画演習 	<ul style="list-style-type: none"> ●都市景観論 ●都市・地域計画史 ◆会計情報論 ■プロジェクトの経済学 ◆●社会調査論 ■◆比較経済分析 	<ul style="list-style-type: none"> ◆経営戦略・組織論 ■数理工学第一 ■◆●公共経済学(社工) ■◆最適化基礎 ◆確率と統計(情報工学科) ●空間システム特別演習第二
第6学期	<ul style="list-style-type: none"> ●空間計画設計演習第三 ■◆●住宅・土地政策 ●観光学概論 ■◆●経済学のための基礎数学 ◆●社会学概論(社工) ■◆環境経済学 	<ul style="list-style-type: none"> ■◆オペレーションズリサーチ ◆人間科学概論 ■国際経済学 科学技術者実践英語 ■コミュニケーション選択の理論 	<ul style="list-style-type: none"> ■現代経済の諸問題 ■◆●法システム ◆政治学(社工) ●景観計画論 ■◆●社会シミュレーション(社工)
第7学期	<ul style="list-style-type: none"> ■◆●応用計量経済学 ■◆●社会学インターンシップ 	<ul style="list-style-type: none"> ■◆温暖化影響評価論 ■◆●学士論文研究 	<ul style="list-style-type: none"> ●空間システム特別研究第一
第8学期	<ul style="list-style-type: none"> ●空間システム特別研究第二 	<ul style="list-style-type: none"> ■◆●学士論文研究 	

推奨: ■制度設計論(経済学)プログラム ◆公共システムプログラム ●時空間デザインプログラム

3. 学際教育の難しさ

筆者は社会工学科の歴史の中では比較的初期の卒業生であり、また、この20年間はスタッフの1人でもある。今ではあまり学際ということを強調していないが、筆者が学生だったころは社会工学の学際性ということが、学内外でよく議論されていたように記憶している。以下は、あくまでも筆者の個人的経験からではあるが、学際教育は、やはり特有の難しさがあるように感じる。

第1は、よく言われていることであるが、基礎と応用の順番である。確立されたディシプリンにおける教育は、まず基礎があり、それを習得してから応用という具合に設計されており、つまり順番は基礎科目から応用科目へと決まっている。しかしながら、学際教育では、基礎か応用かというと应用到分類される科目がどうしても多くなる。もちろん、基礎科目も用意されているが、順番でいうと、応用が先にあって基礎が後にくるような場合も少なくない。ところが、応用を十分に理解し、さらにそれを発展させようとするれば、やはり、どこかで基礎に立ち戻る必要がある。

筆者の専門は都市計画であるが、いわゆる計画系の科目だけでこれを理解し、発展させることはやはり難しい。その道のプロとまではいかないまでも、もともとの学問領域である建築や土木、造園といった伝統的ディシプリンの基礎知識が一定程度には不可欠である。学部の数年間や修士課程まで進学したとしてもただか5年間で、これらを全て習得することは不可能である。結局は卒業研究や修士論文の際に、さらには社会に出てから、再度基礎を（大抵は独力で）勉強せざるを得ない。

第2は、方法論に関してである。方法論は大きくは理論と実証に分かれ、さらに理論にもモデルや言説批判、実証では調査、シミュレーションを含む実験などがあるが、そもそも伝統的な学問領域は、領域特有の方法論を発展させることで進化してきたという歴史がある。一方で、社会工学のような学際領域は方法論の独自性にはこだわらず、

依ってたつ基礎科学やテーマによって、どうしても方法論を使い分ける傾向が強い。おのずと教育においても複数の方法論を学習することになるが、方法論の習得は、もともと理系指向か文系指向かという大学以前の学習内容にも関係するので、短時間でできるものではない。その結果、通り一辺倒の方法論は身に着いたとしても、それは表面的な理解であって、正しい方法論からすると、非常にこころもとない使い方となっている場合も少なくないように思う。

第3は、学際教育が行われている間にも、それらが依ってたつ既存のディシプリンそのものも発展し、しかも数十年前と異なり、現代ではその発展の速度が速くなっているという点である。例えば、マイクロ経済学を例にとれば、筆者が教育を受けていた時代と異なり、今ではゲーム理論の理解抜きには、マイクロ経済学を学習したことにはならないだろう。建築学や土木工学も同様である。こうした基礎領域の発展が、学際教育に反映されるには時間がかかるから、その結果、学際教育は時代遅れの基礎領域の知識の上に行われることになってしまう可能性を否定できない。

学際教育にはこういった難しさがあるように感じているが、もちろんデメリットばかりではない。たとえば、応用科目をカリキュラムの始めの方から配置することは、学生のモチベーションを持続させるには効果的である。実際、社会工学を志望する学生の社会に対する問題意識は非常に高く、こうしたモチベーションは卒業して社会に出た後、高く評価されることが多い。社会工学科・社会工学専攻は東工大の中でも就職に強いことで知られており、問題を発見・構造化し、解決の提案を作るといふ、今風の言葉で言えば「ソリューション指向」は、社会工学の卒業生に共通する強みでもあると思う。

4. おわりに

筆者の恩師でもあり、日本不動産学会の初代会長でもあった石原舜介先生が、社会工学科の設立

20周年記念誌に以下のような文を寄せられている。

…一本の社会学学科というカリキュラムにまとめられて数年後には、「社会学とは何か」という議論が殆んど行われなくなった。何んとなく各自が、自分の行っている研究や教育が社会学の一部であるという認識を持ち、やや自信を持って講義するようになってきたためではないかと思う。それが学生にも反映して、諸先輩の進路、卒論や修論の内容から何か漠然としてはいるが、他とは違う何かがある学科であるということが意識されるようになったのではないかと思う。

学科の設立に参画した者の発言としては大変無責任に思えるかも知れないが、この捉え所のないものこそ社会学ではないかと思っている。筆者のように長く社会学と関わっている者にとっては、これはしごく得心がいく発言である。まさに、そこで過ごした者は、それぞれに何か

「捉え所のないもの」を獲得し、それこそを社会学と感ずるのである。しかし、これから大学で学ぼうとする学生には、これは極めてわかりにくいことは否定できない。

現在、東工大は2016年4月からスタートの予定で、大きな教育改革を進めている。学部・修士の一貫化（すなわち原則として6年教育）というのがその目玉であり、この改革に伴い、学部・大学院も全学的に再編され、再編の中で「社会学」という名称を有する学科や専攻はなくなることとなった。こうした判断を最後に後押ししたのは、やはり社会学のわかりにくさということだったように思う。社会学の経験が不動産学に贈るものがあるとすれば、まずは対象が不動産であるというわかりやすさを活かしながら、さらに「学」としてのわかりやすさを高めることではないかと思う。

「専門教育の評価と期待」

(高梨竹雄、「都市計画」114、1981.2、p.50)

専門教育の評価と期待

宅地開発公団 厚木開発事務所計画
高梨 竹雄 Takeo Takanashi

我々が社会工学科に所属した頃は一期生ということもあって未だ満足な教科書もなく、専門教育とよべる整備されたカリキュラムもなかったように記憶している。ただ、学生も教官も共にこれから新しい分野を切り開いて行こうとする熱気に溢れていたように思う。

私個人に限っていえば、この熱に冒されたような甘美な夢は半年で醒めた。講義をうけ学科の仲間と議論をしても自分の学問領域がどこにあるのかよく分からずに悩んだ。社会工学とはプラズマのようなものでなんとなく凝集してみえるが、その中心を追いかけると既存の分野に消えてしまう。

このように螺旋階段をぐるぐる回っているうちに甚だ恐縮ではあるが、学科の存在そのものに懐疑的になってしまったのである。その対象範囲の広さと現実との乖離の大きさに当惑したといった方が適当かもしれない。

私は学科の対象を都市部における計画的分野に限定すべきであると考えていたが、学科設立当初というせいもあって、教官は夫々それ迄の研究過程における個別実体験を整理して一般化したものをベースにして各々が社会工学とは何かを方向づけて学生に対処し、学生もそれぞれの経験的、知的レベルにおいてそれなりに学科の定義づけをしようとして努力した。

この定義づけ、あるいは一般化といったものを性急に求めすぎたために、我々は無用の混迷をまねいたのではないかと思える。

社会に出て地方都市に赴任しそこで生活し、働らく人達と付き合い、歴史的時間の流れの中に今も存在する屋敷町等の街並み、掘割り、樹木のたたずまいに触れた時始めて「住空間」とか「アメニティ」とかいう術語の一部が感得できたように思う。

認識の段階は具体的個別的な事柄をその者の蓄積した経験と感受性の範囲で了解し、これを抽象化することにより一般的な水準に進むものとする。社会工学を考えると、この具体的事象の感得といった実体験上の認識なしに議論をすると空疎な形式論に陥いるのではないかと思う。

いままで見過ごしていた数字、何の気なしに使用していた術語の意味がある日突然、体全体で分かるときがある。このような分かり方というのは、ある道の奥義を会得するときの察し方に似ているのであろう。

我々は整理された社会工学観ではなく、現実の雑多な事象の中からどのような過程をへてその背景に潜む共通性を把握するのかに努力をそそぐべきである。社会工学科における教育は社会事象を認識する際、その存在のよってきたる歴史的背景に留意し、その影響が広範な政策立案、計画決定に携わる人間の社会との係わりあう姿勢、即ち視点を養ってくれたと今では考えている。巨大管理社会の各々の部門においてその境界領域に存する問題を処理するにあたり、人々は技術的事務者あるいは事務的技術者たらんことを要請されている。

ここで重要なことは大いなる常識であっていたずらに細分化された専門的知識ではないように思う。

常識というのか、平衡感覚というのか、このようなセンスは大学における専門領域の知識を知ることだけでは得られないのではないか。たとえば、縦割り制度の弊はよく言われるところであるが、一度組織ラインに組み込まれてあがいた後に見直してみるとその仕組みの存在理由が分かり、同時に横の調整という行為がいかに勇気と忍耐を要する困難な作業であるかを痛感する。

又地方都市の良さが見直されているが、そこにある相互扶助的な安定的な場は、同時に強制参加を求める種々の行事や、世間が目を光らせ

る掟を合わせ持っているのである。

無名性や、参加の自由は大都市における大きな魅力の一つであるが、これは同時に場の不安定さや孤独感を惹起する。このように良い面だけの、又は悪い面だけの制度はあり得ず、利点と欠点とがある均衡を保って社会事象は存在する。

この均衡点をどのように把え、どう認識するのか、その姿勢と手段と感受性を社会工学科は学生に与えつづけて欲しい。

大学と社会とがより頻繁に交流することにより、互いに刺激しあうことでその感受性を高める等、相互間の往復システムを教育の一環としてとり入れる事は有意義なことだと思われる。

また公と私の利害を調整する交渉ゲーム、公の選択・配分に係る公共経済等の概念が基礎理論の一部に位置づけられ、比較文化論的視点に

立った都市計画制度史や街の形成史を科目に追加されることを期待する。

私は今、厚木において「森の里」地区土地区画整理事業の計画業務に携っているが、面的開発事業はとくに諸手続き、各工程が並行的に錯綜しているため、担当間の調整作業がますます重要になってきている。

宅地の供給ということは人間の住まう場を提供することであり、向こう三軒両隣の世間とどうか、生活の拠点とどうか、そのようなものを提供したいと常々思っている。

生活が息づいているような雰囲気のある街ではそのたたずまいと共にその生活規範も風土や歴史の中で醸成されてきたものと思われる。

この広い意味での「生活の場」をいかにして実現していくのか、柔らかい丁寧な気持ちで模索していきたいと思う。

「計画の Spiritual Foundation」

(宮城健一、「都市計画」114、1981.2、.p49)

計画の Spiritual Foundation !

日本リサーチ総合研究所

宮城 健一 Kenichi Miyagi

私は社会工学科の第1期生として学部を昭和45年3月に卒業しそのまま、現在勤務している(社)日本リサーチ総合研究所(前身は(株)日本リサーチセンターの総合研究部門であり、昭和52年に改組、独立した。)に所属しました。

たずさわっている仕事の内容は、簡単に言えば公官庁の政策がらみの調査、研究を委託されて行うもので、一般にはシンクタンクと呼ばれています。

ところで、私の学生時代は社会工学科が出来たばかりであり、カリキュラムも体系的なものではなく途中で変更することなどもあった、言わば創生期の混乱期だった訳です。加えて私自身は怠惰な学生であったため、当時は社会工学に対するイメージは極めて希薄だった訳です。

従って色々な所で、「出身学科は何ですか。

—社工です。—社工って何ですか。」という問いには、いつも困惑のし通しです。

まず、私自身も含めて都市工学なり社会工学の専門性とは何だろうかという問いが生まれます。かつての社工の同輩と社会工学の専門性とは何かということで話を進めてゆくと、カリキュラムのオリジンはほとんど外部に以前から存在していたものであり、それらをまるでラッキョウの皮のように取っていくと、中は何もないという結論になってしまう。そうすると、私たちが受けた教育は何を求めていたかが非常にボケてくる。しかし何かあるだろう、生まれるだろうという期待だけがある。

そこで、今でもそもそも社工の専門性については明確なイメージを持ち得ていませんし、従って専門教育についての意見も持ち合わせませんが、今までの私の見聞きしたものの中から、いくつか述べてみたいと思います。

以前に、スリランカで一種の農村開発運動であるサルボダヤ運動を推進しているアリアラー

トネ氏と話す機会があった時、彼の運動の原則は次の5つであるといっていました

- (1) Self Human Development に奉仕すること
- (2) Rich-family life, Rich Community lifeを旨ざすこと
- (3) Grass-Roots-Upであること
- (4) Village Resourceを動員すること（技術も含めて）
- (5) Social-Developmentにつながるように Integrateしてゆく

その際Power-politicsや単なる経済ではなく、Moral, CulturalあるいはSpiritualな Leader-Shipで統合してゆく。彼はその Spiritual-foundationを“仏教”に置くという。

都市“計画”というものも、それは人々の心、生活様式、そして社会の行動様式に働きかけることであるから、社会開発計画の1つの領域に他ならないと思う。そうであれば、そこには少くともアリアラトネのいう、5つの原則に対する私たちなりの認識と方向性がなければならぬといえるだろう。

このように考えると、“都市計画”のもつ領域は大変な広がりをもつことになり、しかも諸科学の成果の総動員という様相をおびてくる。

そうすると、“計画”とは、恐らく、どのような動員の在り方があるか、それを科学的、体系的に追求してゆくことといえると思います。別な言い方をすれば、社会的 program の科学的接近ではないでしょうか。

私が卒業して仕事についた頃は、高度成長時代の真只中にあり、良し悪しは別にして、彼の言う5つは、経済力を持てば人間性は豊かになり、それはまた社会の開発にもつながるという

「成長イデオロギー」に満ちていた時代でしたから、しかも20歳代という若輩ですので、仕事の上で期待されるのは、いわゆるHow to のテクニックだったといえます。

しかし、昭和50年代以降は、価値観の多様化、目的喪失の時代etc.といわれるように、何のために、何をなすべきか、というようなところが問われ始めましたし、またそこに対する問いをししないと、いわゆる計画=デザインもできなくなってきた。

加えて、都市工学なり社会工学の対象とする社会的領域は、近年ますます、フレッド・ハーシュの言い方をかりれば、“局地”の配分・分配の問題でもあります。これらは全ての人々にそれぞれに帰属される訳にはいきません。従って何らかの公共倫理とそれを支える道徳的行為がなければ、混乱、インフレ、混雑現象を引きおこすやっかいなものです。

“計画”の科学は、現在そのPublic Acceptance, Social Acceptanceの諸条件が大きく変化する時代に突入したといえます。そこでは第1に計画の Spiritual Foundation が求められているようです。

勿論、これまで述べてきた事柄は、大学の専門教育でカバーできる問題だとは思いません。しかしながら、「計画学」全体としては、こうした要請に依っていかざるを得ない状況にあります。従って、少なくとも教育システムの1つの柱に、こうした社会的要請を反映させる“しくみ”を置くことが不可欠だと思っています。それによって、認識の平野の広がりが期待されると思います。〔編集部注：宮城氏は2003年4月10日逝去（享年55歳）〕

資料 6

東京工業大学百年誌（通史） 複数学部構想

東京工業大学百年誌（部局史） 第2章第14節 社会工学科

いずれも東京工業大学博物館資史料館のホームページ (<http://www.cent.titech.ac.jp/>) の「デジタルコレクション」の「東京工業大学の年史」より閲覧可能です。

2019年3月9日 発行

(3月15日 PDF改訂版)

発行：東工大社会工学科・専攻

同窓会「社工会」

事務局：〒152-8550 東京都目黒区大岡山2-12-1 W8-15

国立大学法人東京工業大学

環境・社会理工学院 十代田朗研究室

編集：50周年記念誌編集担当チーム

デザイン：ミルリーフ



1978



1979



1980



1981



1983



1984



1986